

2025年度インターゼミ・アジアダイナミズム班論文

「パックス・モンゴリカ」時代の  
文化交流史  
～文化交渉学の視点から～

【学部生】

藤川竜輔、三浦雄太、矢野雅大

【大学院生】

菅沼孝陽、佐藤力、阿達敏洋、中里健吾  
中村淳、馬尚慶、小谷田篤、五十嵐郁一

【指導教員】

金美徳、越田辰宏

2026年1月24日

# 目次

目次	6
はじめに	14
研究目的・方法	15
研究背景	15
第1章 「パックス・モンゴリカ」の成立に影響を与えたモンゴル民族の精神文化と現代への教訓	16
第1節 問題意識——宗教寛容と平和秩序形成の精神的基盤を問う	16
第2節 モンゴル民族の精神文化の特質——自然共生と包摂性の基底	17
第1項 テングリ信仰の構造と思想	17
第2項 母性原理優位の文化	18
第3項 ソルコクタニ・ベキの事例	19
第4項 モンゴル民族の精神文化の本質と現代的意義	20
第3節 根源的生命力尊重——モンゴル精神文化の基層構造	20
第1項 定義——生命の躍動を信仰の根源に据える	20
第2項 戦いと霊性——生命力尊重の戦略性	21
第3項 ネストリウス派の受容——制度宗教の対極としての霊的共鳴	21
第4項 テングリ信仰の身体性と儒教との対極性	22
第5項 メタ宗教としての「根源的生命力尊重」の包摂性	22
第4節 パックス・モンゴリカ成立の背景——寛容と包摂の精神力学	23
第1項 モンゴル帝国の宗教政策と寛容性の事例	23
第2項 モンケ・ハンの信仰と宗教観の哲学的深度	23
第3項 「根源的生命力尊重」が宗教間の対立を包摂した要因	24
第4項 フビライ・ハーンの統治理念と精神文化の融合	24
第5項 パックス・モンゴリカの思想的構造	24
第5節 現代への教訓——霊性と科学を架橋する視座	25
第1項 現代の分断構造と精神的空白	25
第2項 科学的自然敬愛精神——根源的生命力尊重の現代的昇華	25
第3項 「早すぎた秩序」の思想的遺産——現代精神文化への橋渡し	26
第4項 現代におけるメタ宗教としての可能性 ——対立・分断を超える理念	26
第5項 科学的自然敬愛精神宣言（文案） ——国際社会へのステートメント	27

第6節	日本の役割——パックス・ヤポニカへの希望.....	28
第1項	神道とテングリ信仰——自然との交感と身体的靈性.....	28
第2項	包摂性・倫理性・科学性——日本文化の特質.....	29
第3項	パックス・ヤポニカ——新たな国際秩序を日本から.....	29
第7節	未来への提言——生命倫理を軸とした平和秩序創造.....	30
<b>第2章</b>	<b>中国の教科書から見る歴史観</b> .....	<b>31</b>
第1節	研究目的・背景 .....	31
第1項	研究の背景 .....	31
第2項	先行研究と課題の所在 .....	31
第3項	研究目的 .....	32
第4項	本研究の構成 .....	32
第2節	中国の歴史教育と教材体系 .....	32
第1項	中国における歴史教育の制度的枠組み.....	32
第2項	『中外歴史綱要（上）』および高校教材の構成.....	32
第3項	「遼宋夏金多民族政権の並立と元朝の統一」単元の位置づけ... 33	
第4項	史料実証・問題解決型授業の導入動向.....	33
第3節	教材における元朝、チンギス・ハン、フビライの描写.....	34
第1項	チンギス・ハン像の転換—征服者から統一者へ.....	34
第2項	フビライ像の再構成—融合と統治の象徴.....	34
第3項	教材文言の特徴と表現分析 （「征服」から「統一」への言い換え） .....	34
第4項	重農政策・行省制度など政策面の事例.....	34
第4節	教育的意図と歴史観の分析 .....	35
第1項	「統一と融合」を軸とする叙述構造.....	35
第2項	「他者」から「中華」への再定義と国際的対比.....	35
第5節	結論 .....	36
第1項	本研究の要約 .....	36
第2項	教育的・文化的意義の考察 .....	36
第3項	今後の課題と展望 .....	37
<b>第3章</b>	<b>パックス・モンゴリカにおけるモンゴル帝国の広域統治と 多民族支配の仕組みから、現代の組織文化の在り方を学ぶ</b> .....	<b>38</b>
第1節	はじめに .....	38
第2節	モンゴル帝国の多様な統治システム .....	38

第1項	多様な法律の共存 .....	39
第2項	文化の橋渡し役たち .....	40
第3項	帝国をつなぐ仕組み: 駅伝制(ジャムチ)の役割.....	41
第3節	モンゴル帝国の統治から現代組織へのヒント.....	42
第1項	「統合」から「連結」へ: 多様性をつなぐモデル.....	42
第2項	現代組織への応用: 5つの設計原則 .....	42
第3項	実践する上での課題と限界 .....	43
第4節	結論: 「統合」の限界と、合理的な「ドライさ」の重要性.....	44
第1項	企業文化による「価値観の統一」の難しさ.....	44
第2項	「愛社精神」よりも「契約的な合理性」.....	44
第3項	現代版「ジャムチ」としてのプラットフォーム型組織へ.....	45
<b>第4章</b>	<b>モンゴル帝国の血統主義と女性の果たした役割及び現代への継承...</b>	<b>45</b>
第1節	はじめに .....	45
第2節	チンギス統原理とモンゴル帝国の血統支配による領土拡大.....	47
第1項	遊牧民社会における血統の重要性 .....	47
第2項	チンギス統原理の浸透 .....	47
第3項	モンゴル帝国の血統支配による領土拡大.....	47
第4項	チンギス統原理の問題点 .....	48
第5項	現代に引き継がれるチンギス・ハンの血統の影響.....	48
第3節	男系男子を支えた女性の役割 .....	49
第1項	女性の地位 .....	49
第2項	正妻と母系権威 .....	50
第3項	様々な場面での女性の役割 .....	50
第4節	現代への継承と共通性 .....	52
第5節	結論 .....	52
<b>第5章</b>	<b>チンギス・ハンの戦略的意思決定に学ぶ感情の転換</b>	
ーホラズム遠征における「情動」と「戦略」の統合メカニズムー.....		53
第1節	問題意識と研究の目的 .....	53
第1項	現代組織における合理性と情動の衝突.....	53
第2項	チンギス・ハンの合理的組織運営 .....	53
第3項	研究の目的と分析の焦点 .....	54
第2節	チンギス・ハンの合理的組織形成とリーダーシップ.....	55
第1項	血縁・権威主義の克服と価値観の形成.....	55

第2項	組織の合理的構造と公平性	55
第3項	イノベーションの重視	55
第3節	ホラズム遠征における合理的動機と情動的動機の対比	56
第1項	オトラル事件と感情的動機	56
第2項	戦略的・経済的必要性	56
第3項	情動と戦略の二重性	57
第4節	オーセンティックリーダーシップの観点による情動の転換	57
第1項	オーセンティックリーダーシップの定義と適用枠組み	57
第2項	情動の認識とマネジメント	58
第3項	メタ認知による情動の活用	58
第5節	現代組織の課題への示唆	59
第1項	研究の要約	59
第2項	現代組織への示唆	59
第3項	構造的課題と今後の展望	59
<b>第6章</b>	<b>モンゴル帝国における伝統音楽の役割</b>	<b>60</b>
第1節	はじめに	60
第2節	モンゴル帝国の音楽文化	60
第3節	中国の伝統音楽文化	60
第4節	モンゴルと中国の音楽思想と社会的役割の比較	61
第5節	文化交流	61
第6節	現代への継承	62
第7節	結論	62
<b>第7章</b>	<b>モンゴル帝国を支えた食文化</b>	<b>63</b>
第1節	はじめに	63
第2節	遊牧と食—狩猟・調理の工夫	63
第3節	草原の農耕文化と兵糧	64
第4節	乳製品と保存の知恵	64
第5節	食と黒死病—食文化がもたらした影とリスク	65
第6節	結論	66
<b>第8章</b>	<b>モンゴル相撲「ブフ」文化の東アジアへの広がり</b>	
—	<b>日本相撲の文化的・歴史的関係性の考察</b>	<b>67</b>
第1節	相撲	67
第1項	モンゴル相撲	67

第2項	日本の相撲について	68
第3項	モンゴル相撲（ブフ）の位置づけ	68
第4項	東アジア全体との共通性	68
第2節	モンゴル相撲（ブフ）が欧州に広がらなかった理由に関する考察	69
第1項	遊牧社会固有の文化と移植性	69
第2項	モンゴル帝国の西進と文化伝播	70
第3項	欧州の格闘文化	70
第4項	儀式性と宗教観の違いによる文化的抵抗	70
第5項	帝国解体後の交流断絶と近代スポーツの成立	70
第3節	結び	70
<b>第9章 モンゴル帝国における多言語政策と印刷文化の展開</b>		
— 記録媒体の歴史的転換と高麗の位置付けを含む再検討 —		
第1節	序論：武力帝国から情報帝国への視点転換	71
第1項	問題の所在	71
第2項	先行研究と本稿の立場	71
第2節	東アジアの知的基盤：記録媒体の変遷と技術革新	72
第1項	紙以前の記録媒体とその限界：比較史的視点	72
第2項	「紙」の発明と普及革命	73
第3項	印刷技術の胎動と「知識の標準化」	74
第3節	高麗という「知識インフラ国家」の先進性	74
第1項	物質インフラとしての「高麗紙」	74
第2項	国家プロジェクトとしての「八万大蔵経」	74
第3項	世界最古の金属活字技術の実用化	75
第4節	文書主義国家への転換と統治の可視化	76
第1項	「紙」による権力の投射	76
第2項	帝国の神経網：ジャムチと文書行政	76
第5節	官製印刷・翻訳・紙幣制度による制度的統合	76
第1項	官製印刷と政治的正統性の構築	76
第2項	「翻訳」による多言語統合戦略	77
第3項	管理通貨制度「交鈔」の導入	77
第6節	知識と文明の運河としての機能	77
第1項	東西科学知の循環と統合	77
第2項	文明の翻訳と標準化	78

第7節	文字統合の野心と印刷文明の分析	78
第1項	パスパ文字の構想と限界	78
第2項	東西の印刷文化：高麗とグーテンベルクの比較史	78
第8節	結論：紙が築いた帝国、高麗が支えた基盤	79
<b>第10章</b>	<b>モンゴル帝国時代と茶：文化的緩衝材としての茶の発展</b>	<b>80</b>
第1節	本論の目的	80
第2節	茶の起源	81
第3節	中国での茶の普及、その位置づけ	81
第4節	シルクロードにおける交易品としての茶の価値と文化的意義	82
第5節	ユーラシア大陸における茶の伝播	82
第1項	東アジア周縁への影響：朝鮮半島と日本における茶文化の展開	83
第2項	日本における茶文化の確立	84
第6節	緩衝材としての茶	86
第1項	禅を通じた自己修養 “茶禅一味”	86
第2項	茶室の空間と“間”、人間関係の“間”	87
第3項	譲り合いの精神 “After you”	87
第4項	平和を求める精神 “一碗からピースフルネスを” への思想の昇華	88
第7節	結び	88
<b>第11章</b>	<b>モンゴル帝国の自由貿易期における琉球の発展</b>	<b>89</b>
第1節	問題意識：パックス・モンゴリカが琉球を発展させた	89
第1項	本章の目的	89
第2項	グスク時代における自由貿易の意義	89
第2節	東アジア交易圏と元朝の海洋政策	90
第1項	元朝の海洋政策と「海の道」	90
第2項	東シナ海の回廊化と琉球の位置	90
第3項	民間主体の台頭と制度的「緩さ」	91
第3節	琉球列島と交易ネットワーク	91
第1項	遺物にみる自由貿易の痕跡	91
第2項	人的移動と知識の移植	91
第3項	農耕の再編と「冬作」体系	92
第4節	グスクの成立と富の集積	92
第1項	多機能拠点としてのグスク	92

第2項	外来財の配分と首長権力	92
第3項	大型化・城郭化の動因	93
第5節	三山分立と海域支配	93
第1項	三山分立の形成過程	93
第2項	海域支配と治安供給	94
第3項	外交と外来秩序への接続	94
第4項	北山と今帰仁グスクの位置づけ	94
第6節	明朝期の管理貿易：海禁と冊封体制	94
第1項	海禁の制度化とその影響	94
第2項	冊封体制と再分配の制度化	95
第3項	自由から管理への変容	95
第7節	結び	95
第8節	付論：モンゴル帝国の末裔が北山王として今帰仁グスクに君臨した — 比嘉佑典の仮説	96
第1項	はじめに	96
第2項	元朝の皇子・地保奴の琉球配流	96
第3項	今帰仁グスクと北山王権	97
第4項	沖縄に残る「モンゴルの影」	98
第5項	伝承と口承の力	98
第6項	学術的限界と想像力の意義	98
第7項	おわりに	99
<b>第12章</b>	<b>総括と今後の課題</b>	<b>99</b>
第1節	精神文化	99
第2節	組織文化	100
第3節	生活文化	100
第4節	総括	101
<b>おわりに</b>		<b>102</b>
<b>フィールドワーク記録</b>		<b>104</b>
フィールドワーク(1)：天理大学附属天理参考館		104
1) 開催日・場所		104
2) 内容		104
フィールドワーク(2)：モンゴルの伝統的祭典「ナーダム」観覧		105
1) 開催日・場所		105

2) 内容 .....	105
フィールドワーク(3)：東京国立博物館見学 .....	116
1) 開催日・場所 .....	116
2) 内容 .....	116
フィールドワーク(4)：モンゴル語によるミュージカル 『モンゴル・ハーン』鑑賞.....	117
1) 開催日・場所 .....	117
2) 内容 .....	117
<b>目次</b> .....	117
<b>執筆担当</b> .....	119
<b>参考文献</b> .....	120
書籍 .....	120
学術論文 .....	122
Webページ .....	123
<b>謝辞</b> .....	125
<b>付録 最終発表スライド</b> .....	126

## はじめに

インターゼミ・アジアダイナミズム班は、2017年より、「モンゴル帝国」の歴史を考察することによって、激動の現代世界を読み解き、未来に向けた示唆、視点を得るべく研究を続け、本年度で9年目となった。

2025年度のゼミは、同年1月に発足したアメリカの第二次トランプ政権が、諸外国に高額関税を課し始めたタイミングでスタートした。米国第一主義を掲げ、自国産業を守るという名目で、その実は外交交渉で有利な条件を引き出そうとした「deal」が目的であった。自由貿易の旗手であったはずの米国が、関税障壁を設けて世界の物流を妨げる姿は、第二次大戦前のブロック経済を思わせた。

一方、本ゼミが長年テーマとしているモンゴル帝国は、13世紀に武力で諸民族を制圧し、史上2番目となる大きさの版図を築いた。しかし、その支配は意外にも緩やかで、宗教的にも寛容であり、民族、出自にとらわれない人材登用を行うなど、柔軟な統治であったことが、これまでの研究で明らかになった。

モンゴル帝国は、ユーラシア大陸に、陸海にわたる自由貿易圏を築き、グローバル経済の先駆者であったといっても過言ではない。それは、トランプ政権の米国のみならず、大国がエゴを押し通すようになった昨今の国際情勢と対照的である。インターゼミ生は、歴史の鏡を磨き、過去の事象から教訓を得ることを目指して学んでいるが、人類は必ずしも進歩しているわけではない、という思いに至らざるを得ない。

各年の論文テーマは、2017年度が「モンゴル帝国とユーラシア興隆史」、2018年度が「モンゴル帝国の興隆と衰退」、2019年度が「モンゴル帝国と朝鮮半島」、2020年度が「パンデミックのユーラシア史とポストコロナ～モンゴル帝国史を起点としたペスト(黒死病)の欧州と日本の中近世史～」、2021年度が「倭寇とモンゴル帝国史～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～」、2022年度が「華人華僑とモンゴル帝国史」である。この活動は、2017年度から2022年度の論文をもとにした書籍「モンゴル帝国とユーラシア史」として、2023年3月に多摩大学出版会より出版された。2023年度のテーマは「モンゴル帝国の衰退から見る 宗教と統治～ロシアと中国の視点から～」、2024年度は「モンゴル帝国の遺産」であった。この歴年の研究成果は、他の班の実績概要とともに2026年に出版される予定である。

本年度は、前述の問題意識から、モンゴル帝国のユーラシア広域支配がもたらした「モンゴルの平和(パックス・モンゴリカ)」と、それに伴う諸地域の活発な文化交渉の実態を深掘りすることにより、アジアダイナミズムをあぶりだすことを目指した。「パックス・モンゴリカ」とは、古代ローマ帝国がヨーロッパからアフリカ、中東にまたがる広域支配を実現したことを評した「パックス・ロマーナ」から始まり、世界史の安定期を「パックス・ブリタニカ」、「パックス・アメリカーナ」のように表現した用語を、モンゴル帝国時代にも当てはめたものである。

本研究が、現代の、不安定になりつつある世界とどう向き合うか、ということを考える一助となれば幸いである。

## 研究目的・方法

1. アジアダイナミズム班が目指す論文は、歴史の視点から「現代的意義」を見出す。
2. 「文献研究とフィールドワーク」を中心に研究活動を行う。
3. フィールドワークは「博物館」の文物視察や「現地訪問・体験」を中心に行う。

## 研究背景

本研究は、モンゴル帝国史の8年間の研究を背景とし、9年目の研究テーマとして、「パックス・モンゴリカ時代の文化交流史」を研究対象とする。

年度	研究テーマ	頁数
2017	モンゴル帝国のユーラシア興隆史	107
2018	モンゴル帝国の興隆と衰退	244
2019	モンゴル帝国と朝鮮半島	84
2020	パンデミックのユーラシア史とポストコロナ	118
2021	倭寇とモンゴル帝国史～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～	106
2022	華人華僑とモンゴル帝国史	81
2023	モンゴル帝国の衰退から見る宗教と統治	89
2024	モンゴル帝国の遺産	229

# 第1章 「パックス・モンゴリカ」の成立に影響を与えたモンゴル民族の精神文化と現代への教訓

## 第1節 問題意識——宗教寛容と平和秩序形成の精神的基盤を問う

本章は、厳密な学術論文を目的とするものではなく、モンゴル帝国史を「全体知」の基盤として、現代の課題解決を志向する思想的試みである。専門研究の蓄積を踏まえながらも、それを超えて、精神文化と平和秩序形成に関わる歴史的知見に基づいた独自の解釈と思想的提言を提示する。ここで展開する解釈や提言は、あくまで一つの思想的試みであり、多くの議論の余地を含んでいる。読者の見識や批判を通じて、より深い理解と対話が育まれることを期待したい。

歴史の転換点において、精神文化が果たす役割はしばしば軽視される。制度・軍事・経済という要因が歴史を動かす主要因として語られる一方で、人々の内面に宿る価値観や信仰が、時にそれらを超えて文明の方向性を決定づけることがある。

モンゴル帝国が築いた宗教寛容と平和秩序、すなわち「パックス・モンゴリカ」は広く知られている。しかしながら、それを可能にした精神文化の力動——なぜそれが実現できたのかという根源的問い——には、これまで十分な光が当てられてこなかった。本章は、その空白を埋めることを目指す思想的探究である。

筆者が「パックス・モンゴリカ」に注目する理由は、その広大な地域に安定をもたらした独自の平和秩序にある。東アジアから中東・東欧に至るまで、異なる宗教・習俗・言語が交錯するユーラシアの広域において、モンゴル帝国は軍事覇権だけに依存せず、自然と生命を尊ぶ感受性に基づく寛容の姿勢によって多文化共存を実現した。通常、統治領域が広がるほど対立が激化するにもかかわらず、彼らは異質性を包み込む柔軟な世界理解を通し安定した交流圏を形成した。このように多様な文明圏をつなぎ、交易・移動・思想交流を支えた広域平和は、歴史上きわめて稀である。

一方で、近代の「パックス・アメリカナ」は主に軍事力と民主制を背景とした、いわゆる西側諸国中心の限定的な秩序であり、現在は米国の自国優先主義への転換とともにその役割を終えつつある。さらに、今日のユーラシアではロシアと中国が権威主義体制のもとで軍事的影響圏を拡大しようとしており、文化的寛容にもとづく平和とは異なる方向へ進んでいる。

こうした文脈において、本章でパックス・モンゴリカを取り上げる理由は明白である。分断の深まる国際環境において、パックス・モンゴリカの歴史的経験は、力によらない平和の可能性を考えるうえで重要な示唆を与える。

本章では、13世紀にユーラシア大陸を席卷したモンゴル帝国を対象に、彼らの精神文化が宗教寛容と国際秩序——すなわち「パックス・モンゴリカ」——をいかに支えたのかを探る。その背景には、自然の力に身をゆだねつつ、生命の営みを深く尊ぶ独自の世界観が息づいていた。この精神的基盤は、体系化された教義や制度的な戒律よりも、生命の躍動や自然との一体感、身体性を精

神的な拠り所とするものであった。その結果、モンゴル帝国の精神文化は、多様な宗教を包摂する「メタ宗教」として機能した。「 Tengri 信仰」や「母性原理優位の文化」は、その象徴的表れである。

さらに、この「根源的生命力尊重」が現代においてどのように応用可能かを考察する。分断と対立が深まる現在の国際社会において、宗教やイデオロギーを超えて人類が共有し得る精神的支柱とは何か。その答えの一つとして、筆者は「科学的自然敬愛精神」という概念を提示する。これは、自然への畏敬と科学的知性を融合させた精神であり、神道や Tengri 信仰が根底に持つ価値観とも響き合う。

筆者は、日本がこの精神を昇華し新たな国際秩序の支柱として提示することこそ、歴史的使命であると同時に未来への希望となると考える。「パックス・モンゴリカ」から「パックス・ヤポニカ」へ——ここから、過去の精神文化を教訓として、未来の平和秩序構築へとつなげる考察を行う。

## 第2節 モンゴル民族の精神文化の特質 ——自然共生と包摂性の基底

モンゴル民族の精神文化は、制度や言語によって体系化された宗教とは異なる次元に根ざしている。それは、自然との共生、生命への畏敬、そして身体性を重視する価値観によって形づくられた、根源的で象徴的な精神世界である。本節では、モンゴル民族の精神文化を特徴づける二つの柱——「 Tengri 信仰」と「母性原理優位の文化」——を中心に、制度宗教とは異なる精神性の構造を探っていく。

### 第1項 Tengri 信仰の構造と思想

モンゴル民族の精神文化の中核にあるのが「 Tengri 信仰」である。 Tengri とはモンゴル語で「天」を意味し、単なる天空の概念ではなく、宇宙の秩序と生命の源を象徴する存在である。人格神というよりも、自然そのものが持つ力として理解され、人間の行為を見守る倫理的な存在であると同時に、人間の内なる生命とも響き合う。

Tengri 信仰は、天を人格神として捉えるのではなく、自然の働きとしての「天」を生活世界に重ね合わせる独自の感性を育んできた。天の動きや大地の気配は、人が神聖さを感じ取る入口であり、その身体的な実感こそが信仰の核となっていた。

Tengri 信仰の根底には、シャーマニズムに基づく「宇宙三界観」がある。すなわち、宇宙は天上・地上・地下の三層に分かれ、それぞれが通路でつながっているという世界観である。天神は地上に直接降りず、シャーマンや英雄を使者として派遣し、悪霊を祓って秩序を保つとされた（ゲレルト, 2003, p77）。

モンゴル世界観における宇宙の構造は、天上界・地上界・地下界の三界から構成され、それぞれが連続性の中で捉えられていた。天上界は、天神・善霊の働きとしての善なる秩序を示し、地上界は人間の営みの場であり、地下界は悪魔・悪霊の領域である。この三つを隔てず受けとめる感性が、世界との一体的理解を支えていた。

モンゴル帝国のハンたちは、自らを「テングリの子」「テングリの代理人」と称し、王権の正統性をその宇宙的秩序に結びつけた。クビライ・ハン以降、最高位の命令文書の冒頭に「とこしえのテングリの力によって」という定型句が置かれたことは、この思想の制度化を示す。こうした霊的正統性は、単なる政治的権威ではなく、テングリ信仰の霊的共鳴に支えられていた。岡田英弘は次のように述べる。

「こうした雑多なモンゴル人のウルスから成るモンゴル帝国を統合していたのは、偉大なるチンギス・ハンの人格に対する尊敬と、チンギス・ハンが天から受けた世界征服の神聖な使命に対する信仰であった。チンギス・ハンがすなわちモンゴル帝国であり、モンゴル帝国がすなわちチンギス・ハンだったのである。」(岡田, 1999, p.221)

テングリ信仰は、自然と向き合う身体的経験の中で受け継がれてきたため、特定の教義に縛られる性質を持たなかった。この柔軟さが、異なる宗教や文化と衝突しない寛容性を育んだ。

さらに、テングリ信仰は制度化された宗教のように教義や儀式を中心とするものではなく、むしろ身体的な実感や自然との交感を通じて継承される。遊牧民としての生活は、天候、地形、動物の動きなど、自然の変化に敏感であることを求められ、それが信仰の基盤となった。天は遠くにある超越的存在ではなく、日々の暮らしの中に息づく「場」としての神聖性を持っていた。こうした霊性は、制度宗教との根本的な違いを際立たせる。ジャック・ウェザーフォードは、チンギス・ハンの若き日の逸話を通じて、モンゴルの信仰の本質を次のように描いている。

「いま身を隠している山に救われたと信じたテムジンは、山の霊に向かって祈りをささげた。仏教、イスラム教、キリスト教のように、聖典があって聖職者が導く宗教を信奉する部族とは異なり、モンゴル族はずっと精霊信仰を保ちながら、自分たちを取り巻く万物の霊に祈ってきた。＜久遠の蒼穹＞や『黄金の陽光』をはじめ、数限りない自然の霊を敬った。彼らは自然界を天と地に二分する。人間の魂が、肉体の静的部分でなく、血液や息や匂いという動的要素に宿ると同様、大地の魂も動く水に宿るとされた。」(ウェザーフォード, 2006, p.87)

この記述は、テングリ信仰が単なる「天」への信仰ではなく、自然界に遍在する霊的存在との交感を重視するものであることを示している。モンゴル人にとって霊性とは、聖典や教義ではなく、風や水、光という動的な自然現象の中に宿るものであり、身体的感覚を通じて実感されるものであった。

## 第2項 母性原理優位の文化

モンゴル民族の精神文化におけるもう一つの重要な柱が「母性原理優位の文化」である。遊牧生活は、季節・地形・環境に応じた柔軟さを求め、女性はその中で生命の守護者として中心的役割を担った。彼女たちは家族を支え、家畜を管理し、移動生活の安定をもたらす存在であった。

モンゴル社会には、生命を生み育てる力としての母性原理が文化全体に浸透している。この価値観は、支配や抑圧よりも、保護し育む姿勢を重視する倫理につながっている。こうした母性的な世界理解が、異質な存在を包み込む寛容性を支える重要な要因となっていた。この母性原理の影響力は、個人の精神形成にも深く及んでいた。楊海英は次のように述べている。

「テムジン(チンギス・ハン)は遊牧民モンゴル人の男であり、他の全てのモンゴル人男性と同じ、徹底的なマザコンであった。母親のウゲルン夫人には反抗できないし、反抗の気持ちすら湧いてこないはずである。第一夫人のポルテ后とは幼馴染みで、九歳か遅くとも十三歳までは彼女の実家、コンギラト部のダイ・セチェン家に長期滞在していっしょに育った。ポルテのほうが年上なので、テムジンは素直に従う。これが、遊牧社会の男の生き方である。」(楊, 2024, p.122)

この記述は、母性が単なる家庭的役割ではなく、精神的・倫理的な支柱として機能していたことを示している。遊牧社会において、女性——とりわけ母や妻——は、生命の守護者であると同時に、男性の行動原理や価値観を形成する存在でもあった。母性原理は、社会秩序の基盤として、個人の内面にまで深く浸透していたのである。

母性は家庭役割を越え、倫理・霊性・社会秩序の基盤となった。その象徴的慣習が「レヴィエート婚」である。これは、家族の生命的連続性を守るため、未亡人を家族内部で受け継ぐ制度である。さらには、父の妻との婚姻が成立する場合すらあり、女性を「個人」ではなく「生命の場」として捉える価値観を示す。

こうした慣習は、母性が世代を超えて共同体を再統合する力として機能していたことを物語る。母性原理は、現代的価値観とは異なるものであるが、共存と循環を基盤とする霊性として、モンゴル社会の根幹を支えていた。

### 第3項 ソルコクタニ・ベキの事例

母性原理の象徴的存在が、モンゴル帝国の「国母」ソルコクタニ・ベキである。彼女はチンギス・ハンの四男トルイの正妃であり、モンケ(第4代皇帝)、クビライ(元朝創始者)、フレグ(イルハン朝創始者)、アリクブケ(カアン位を争った王子)という、帝国の主要王朝を担う息子たちを育て上げた。楊海英は、彼女の教育と統治姿勢についてこう述べる。

「若くして光を失い、やがては最愛の夫まで義理の兄、オゴデイ・ハンの『身代わり』として奪われたソルコクタニ・ベキ。オゴデイ・ハンからは何度も再婚を迫られ、領地と軍隊も分割された。しかし、彼女は四人の息子たちに法令と礼儀に従って行動し、万事忍耐するよう、との家庭教育を徹底した。」(楊, 2024, p.210)

この記述は、ソルコクタニが政治的圧力や個人的困難に直面しながらも、母性原理に基づいた教育を貫いたことを示している。夫トルイの死後、彼女は政治的にも卓越した手腕を発揮し、オゴデイ家との権力闘争を乗り越えて、長男モンケを皇帝に擁立するなど、帝国の安定と継承に大きく貢献した。彼女はネストリウス派キリスト教徒でありながら、宗教的寛容と政治的包摂を体現した存在でもある。

その寛容性は、行動にも明確に現れている。ベキはネストリウス派の信仰者でありながら、中央アジアの古都ブハラにイスラム学校(メスジト)を建立するために巨額の資金を投じ、イスラームの導師や聖者たちにも衣類と喜捨を惜しみなく与えていた。これは、制度宗教の枠を超え、霊性の実践者を尊ぶ姿勢の表れであり、彼女の信仰が教義への帰依ではなく、生命と秩序への敬意に根ざした霊的態度であったことを物語っている。

その象徴性は、彼女の死後にも受け継がれた。大元ウルスの滅亡後、彼女を祀る祭殿はチンギス・ハンの四大オールドと合流し、オールドス万戸の祭祀の対象となった。現代に至るまで「柱たる妃」として尊崇され、祀られてきたのである。つまり、男性であるチンギス・ハンと同様に、国母として神格化されたということだ。

#### 第4項 モンゴル民族の精神文化の本質と現代的意義

モンゴル民族の精神文化の本質は、言語化されない信仰である。これは、教義に基づく制度宗教とは異なり、身体的実感、自然との交感、生命への直感的畏敬を基盤とする霊性である。テングリ信仰の「天」は、人格神ではなく、生命秩序と倫理を司る場の存在であり、母性原理はその秩序を包み込む力として働いた。

こうした精神文化は、多様な宗教を包摂する柔軟性を持ち、パックス・モンゴリカの宗教寛容を支えた。現代においても、分断や対立を超える思想的資源となる。自然との関係性、生命の尊重、共存の倫理という価値観は、制度宗教の限界を補完し、持続可能な社会の基盤となり得る。

### 第3節 根源的生命力尊重——モンゴル精神文化の基層構造

本節では、モンゴル民族の精神文化を貫く価値観として、筆者が「根源的生命力尊重」と呼ぶ思想を理論化する。この概念は既存宗教を否定するものではなく、それらを包摂し、共鳴と再構築の場として開かれる思想的枠組みである。制度宗教が分断や排他性を生む局面において、筆者の定義するメタ宗教として、共通の倫理的感受性と霊的共振の場を提供する「上位の共通基盤」として機能しうる。

#### 第1項 定義——生命の躍動を信仰の根源に据える

モンゴル民族の精神文化には、筆者が「根源的生命力尊重」と呼ぶべき価値観が息づいている。この価値観は、体系化された教義や制度化された宗教とは異なり、生命の躍動、自然との交感、身体的実感を霊的拠り所とする態度を意味する。テングリ信仰における天との交感や、母性原理に基づく包摂的な文化は、その象徴的表れである。

ここでいう「根源的生命力尊重」とは、「生命の根源に宿る創造的エネルギーに対して、自然・文化・身体を通じて感応し、畏敬と共鳴をもって生きる精神的態度」を指す。これは宗教を超え、生命の流れに寄り添いながら包摂的な霊性を育む文化的土壌である。

この霊性は、単なる抽象理念ではなく、日常生活の身体的実感——「生きられる・食べられる」感覚——に根ざしている。自然とともに生きる遊牧民の生活は、この身体的霊性を基底に持っていた。こうした霊性は、共同体的な祝祭にも表れる。たとえばモンゴル帝国では、クリルタイ(政治的決定の場)の後に必ず宴が開かれた。宴は生命の躍動を身体的に共有する場であり、食べること・歌うこと・踊ることは、天と地の間生きる者としての喜びを表す霊的実践であった。この祝祭的霊性は制度宗教に依存せず、自然と生命のリズムに根ざした「生の倫理」として存在していた。それこそが、本節で扱う概念を導く思想的根拠となる。

## 第2項 戦いと霊性——生命力尊重の戦略性

モンゴル民族の戦い方にも、根源的生命力尊重の思想が反映されていた。彼らは無益な殺戮を避け、直接戦闘よりも包囲・心理戦・降伏勧告を重視した。これは天の秩序を乱さず、生命の循環を断たないという霊的倫理に基づく。戦いとは破壊ではなく、秩序の再編成であった。この観点からは、自然のリズムに従い、無理を避け、流れを読む遊牧民的感性と同じ構造を持つ。霊性と合理性が融合した戦略であり、戦場においても「生きること」の倫理が貫かれていた。

この霊的倫理は、日常の生活習慣にも深く浸透していた。たとえば家畜を屠殺する際、モンゴル人は「血を草原に流さない」技法を重視した。羊の大動脈を体内で切る方法は、大地を穢さず、命を無駄にしないという霊性に根ざす。同様に、王族や貴人の処刑においても、血を地面に流さない方法(絞殺・窒息など)が選ばれた。これは死者への尊厳であると同時に、草原という生命の場を守る聖なる倫理の表れである。さらに、杉山正明は、モンゴル治下で死刑が極端に少なかった点について次のように指摘する。

「興味深いのは、モンゴル治下で、死刑が大変少ないことである。たとえば、大元ウルスが抑える中国方面では、『文化国家』を謳われる宋代より、ずっと死刑が少ない。まして、特に洪武時代、中央政府官員とその血族を何と五度にもわたって数千人単位、もしくは万単位で殺害するという歴史上でもそう類例を見ない蛮行を平然と行った殺伐とした明代とは、比較にならない」(杉山, 2010, p. 270)

この指摘は、モンゴルの霊性が制度的暴力を抑制する統治思想として機能していたことを示す。生命を断たず秩序を整えるという原理が、司法制度にも貫かれていたのである。

さらに、ウェザーフォードが指摘するように、モンゴル人の宗教観は「自分はキリスト教徒である以前にモンゴル人である」という霊性の優先性を持っていた。制度宗教より深い文化的霊性が、彼らの行動原理であった。

「モンゴルのクリスチャンにとって死や血を描写するのはタブーだったので、十字架にかかるキリストの肖像を描くことを断固拒否する点でもカトリック教徒とは違っていた。モンゴル人は自分がキリスト教徒だと認める場合も、宗教がまず自分の本質を表すものだと思っていなかった。キリスト教徒であるモンゴルの将軍のひとりが説明した通り、彼はクリスチャンではなく、何よりもモンゴル人なのだ。」(ウェザーフォード, 2006, p.281)

この指摘は、制度宗教よりも深い文化的霊性が彼らの行動原理であることを示している。血の描写を拒む感性は、モンゴルの霊性が教義の表層的な解釈を超えて、自然との交感を重視していたことを物語っている。

## 第3項 ネストリウス派の受容——制度宗教の対極としての霊的共鳴

モンゴル帝国でネストリウス派キリスト教が受け入れられたのは、根源的生命力尊重の具体的な表れである。ネストリウス派は、教義体系より霊的实践や倫理態度を重視する傾向があり、モンゴルの霊性との相性が非常に高かった。その特徴の一つは、キリストを「血の通う生身の人間」として捉える姿勢である。神性と人性の明確な区別、母性への尊重は、モンゴルの母性原理と深く共鳴した。

宗教を教義によって管理する西方キリスト教とは対照的に、ネストリウス派は内的靈性と倫理を重視する信仰態度を持つ。これは、テングリ信仰や母性原理と同じ構造の靈性であり、制度より生命と秩序の調和を重視する点で一致している。ネストリウス派の受容は、モンゴルの靈性が制度宗教を包摂しうる構造を持っていたことの証拠である。

#### 第4項 テングリ信仰の身体性と儒教との対極性

テングリ信仰は、踊り・歌・トランスなどの身体的儀礼を通じて神と交信する靈性である。身体を媒介に自然と宇宙と共鳴する信仰であり、理性主義的・教義主義的な儒教とは根本的に異なる。儒教は徳目体系や名分を重視し、科挙制度と結びつき、文献知識を中心とする。この構造は、身体的実感・自然との交感を基盤とするモンゴルの靈性とは相容れない。

大元ウルスにおける科挙廃止は、単なる行政改革ではなく、靈性と政治の接続原理の違いを象徴している。実務能力と現場感覚を重視し、文献中心主義を排した制度は、テングリの価値観の延長にあった。

宮廷儀礼においても両者の違いは顕著であった。延臣が序列に沿って整列する中国的宮廷に対し、モンゴルの宮廷は自由な身体性を保ち、女性も重要儀式に列席した。ジャック・ウェザーフォードは、大元ウルスの紫禁城における儀式の様子を次のように描いている。

「延臣が位階にしたがってきちんと整列する中国宮廷の伝統とは対照的に、モンゴル人は好き勝手に群がる傾向が強かった。おそらく中国人の神経を一番逆撫でしたのは、最重要の儀式でもモンゴルの女性が男性に交じって自由に列席することだったろう。モンゴル人の宮廷では儀式が無秩序になり過ぎ、皇帝の近衛兵が棍棒をふるって役人や賓客を押し返さなければならない場面も少なくなかった。」(ウェザーフォード, 2006, p.320)

祖先崇拜や家族中心の価値観は両者に共通して見えるが、その靈的構造は異なる。モンゴルにおける祖靈は自然との交感を介して存在し、儒教的家父長制とは別の靈性体系にある。

筆者の私見ではあるが、さらに注目すべきは、一定程度のモンゴル人がキリスト教やイスラム教に改宗したのに対し、儒教を信奉した例がほとんど見られない点である。ネストリウス派は、モンゴル帝国の貴族層や王族の間で広く信奉され、宮廷にも聖職者が仕えていた。イスラム教は西方のウルスで国家宗教となったが、儒教はあくまで支配対象の思想にとどまっていたように思われる。

#### 第5項 メタ宗教としての「根源的生命力尊重」の包摂性

「根源的生命力尊重」は、言語化される以前の身体的感受性——母性・自然・共感——に基づく靈性である。教義ではなく、生の実感から立ち上がる倫理であり、そのため多様な宗教を包摂する力を持つ。

モンゴルの靈性は、宗教が対立・殺戮を生む局面において、むしろ商業・経済の発展を通じて「生きること」に資する秩序形成を重視した。宗教を対立ではなく共存のための土台としようとした点に特徴がある。こうしたメタ宗教的構造は、現代においても応用可能であり、宗教や文化の違いを超える靈的基盤として機能しうる。本節は、その思想的基礎を示したものである。

## 第4節 パックス・モンゴリカ成立の背景 ——寛容と包摂の精神力学

本節では、前節で理論化した「根源的生命力尊重」という精神文化が、モンゴル帝国が宗教的寛容性を実現したことを明らかにする。この精神文化は、制度宗教を超えた包摂性と倫理性を備えており、平和的秩序形成において重要な役割を果たした。

### 第1項 モンゴル帝国の宗教政策と寛容性の実例

宗教寛容の象徴的事例として、4代目大ハーン・モンケの宮廷で行われた「謁見式」が挙げられる。この儀式では、シャーマンやキリスト教司祭が協働して「聖日」を定め、司祭はモンケのために祈りを捧げ、酒杯を祝別した。異教の儀礼が帝国最高権力者の公的儀式として執り行われていた点は、宗教的寛容が制度的に組み込まれていたことを示す。

### 第2項 モンケ・ハンの信仰と宗教観の哲学的深度

1254年、モンケ・ハンの命により、カラコルムで宗教弁論大会が開催された。キリスト教徒・イスラム教徒・仏教徒など、主要宗教の代表者が平等な条件で議論し合ったこの大会は、世界史上でも最初期の宗教間対話の制度的試みであるとされる。この弁論大会には、互いを侮辱することを禁じる規則が設けられていた。宗教間対立ではなく、対話と礼節を尊重する姿勢が、モンゴル帝国の宗教政策の本質をよく示している。

モンケ自身の宗教観はさらに深い。ウィリアム・ルブルク修道士との対話で、彼は次のように述べている。

「我々モンゴル人は、それによってわれわれが生き、それによってわれわれが死ぬ、唯一の神しかましまさぬことを信じ、われわれがその神に、正しい心をもって向かう。・・・しかしながら、神は手にいろいろ異なった指を授けたもうたように、人々に、いろいろ異なったみちを与えたもうた。」(バイカル, 2013, p100)

ここには、一神教的感覚と多元的寛容が同時に存在する。神は唯一だが、人間には多様な道がある——これは制度宗教の排他性を超えた、根源的生命力尊重の哲学的視座である。

モンケはさらに、キリスト教徒に対し、次のような聖書に反する行動を戒める批判を述べている。信仰の本質が教義ではなく「正しい心」にあるという思想は、モンゴルの精神文化の核心である。

「汝たちには、神の聖書を授けたもうた。それなのに、汝たちキリスト信者はそれを守らない。聖書には、人は他人を非難すべし、などとは書いていないはずだ。・・・[聖書には]人の金銭のために正義の道からはずれるべし、などとも書いていないはずだ。」(バイカル, 2013, p101)

この批判は、宗教の本質を教義ではなく「正しい心」に置くモンゴルの精神文化の表れであり、宗教者の倫理性を重視する姿勢を示している。モンケ・ハンの宗教観は、信仰の多様性を認めつつ、精神の純粋性と倫理的実践を重視するものであり、まさに「メタ宗教」的な構造を内包していた。

### 第3項 「根源的生命力尊重」が宗教間の対立を包摂した要因

モンゴル帝国の宗教寛容の根底には、「根源的生命力尊重」が存在する。テングリ信仰に象徴される自然との一体感、生命への畏敬、母性原理の包容性など、言語化されない「感じる信仰」が基盤となった。

クビライの治世以降、帝国が4つのウルスに分裂した後も、宗教的対立は深刻化しなかった。各ウルスが仏教・イスラム教・キリスト教など、異なる宗教を採用したにもかかわらず、戦争の原因とはならなかった。その理由は、宗教が「精神的本質」ではなく、「統治上の外被」として運用されていたからである。杉山正明は次のように述べる。

「大元ウルスはもとより、各地のモンゴル国家はいずれも、政治と経済以外のことについてはおどろくほど無関心であった。イスラム化したフレグ・ウルスでさえ、政権の中核となるモンゴルとその周辺の人々には、実は宗教性は希薄だった。フレグ・ウルスは、統治の必要からイスラム国家の外被をよそおったに過ぎない。」(杉山, 2010, p.270)

モンゴルの靈性においては、聖典や教義よりも、生命との関係性と秩序形成がはるかに重視された。宗教の違いは本質的対立ではなく、地域状況に応じた政治判断に過ぎなかった。

こうした靈性には階層構造がある。テングリの靈性(天との交感)は最上位であり、制度宗教の神々は人間界の文脈で理解される「地上界の神」に位置づけられる。靈性の深度の違いが、宗教を包摂する構造的寛容を生み出した。

### 第4項 フビライ・ハーンの統治理念と精神文化の融合

フビライ・ハーンの統治もさらに、根源的生命力尊重に支えられていた。彼は仏教を厚遇したが、他宗教への寛容も一貫して維持している。これは宗教的信仰心というよりも、統治における柔軟性であった。

クビライが自らの国家を「大元ウルス」と命名したことは象徴的である。「元」は『易経』の「乾元」——宇宙の創造原理——を指す。これはテングリ信仰の「天命」と中国思想を融合した概念であり、モンゴル帝国の宇宙的秩序観を反映している。「大元ウルス」は単なる王朝名ではなく、宇宙秩序に基づく統治の正統性を示す思想的表現であった。

### 第5項 パックス・モンゴリカの思想的構造

パックス・モンゴリカとは、軍事力のみによる平和ではなく、靈的共通項による秩序形成であった。モンゴル帝国が多様な宗教・文化を包摂できたのは、制度宗教間の対立を超える「根源的生命力尊重」というメタ宗教的精神を共有していたからである。

この精神は、現代にも応用可能な思想的モデルを提供している。制度・教義よりも、生命への畏敬、自然との交感、共存の倫理という普遍的価値を基盤とした秩序形成の可能性を示している。

## 第5節 現代への教訓——霊性と科学を架橋する視座

本節では、この思想が現代社会にどのように応用可能であるのかを探る。現代は、分断と対立が深まる時代であり、制度宗教やイデオロギーに依存しない普遍的な精神的支柱が求められている。こうした状況において、「根源的生命力尊重」の現代的昇華として筆者が提唱するのが「科学的自然敬愛精神」である。

### 第1項 現代の分断構造と精神的空白

現代社会は、宗教・政治・文化の各領域で深い分断を抱えている。宗教的な教義の違いは対立を先鋭化させ、政治的にはイデオロギーの衝突が社会の亀裂を広げている。文化の面では、グローバル化による価値観の多様化が、むしろアイデンティティの揺らぎと排他性の増幅を招き、人々の精神的基盤を不安定にしている。

これらの分断の根底には、共通の精神的基盤の欠如がある。かつて宗教が果たしていた「世界への意味づけ」や「人生の根源への問いかけ」が、制度宗教の衰退とともに弱まり、結果として個人は孤立し社会は断片化している。

こうした状況において、モンゴル帝国が築いた宗教寛容の構造——すなわち、異なる宗教を包摂する精神文化——は、現代の分断を乗り越えるヒントとなる。生命の根源的な躍動や自然との一体感を精神的拠り所とする「根源的生命力尊重」は、宗教を超えた共通基盤として、現代社会に新たな統合の可能性をもたらす。

### 第2項 科学的自然敬愛精神——根源的生命力尊重の現代的昇華

「根源的生命力尊重」を現代に昇華させる鍵は、科学と霊性の融合である。ここで提唱する「科学的自然敬愛精神」とは、自然界の法則やその複雑さを科学的に理解しつつ、そこに神聖性や畏敬を見出す精神である。これは、原初的な自然崇拜における自然への畏敬を、現代の科学的知見と結びつけた新たな霊性の形である。科学的自然敬愛精神は、以下の五つの思想的要素によって構成される概念である。

1. 自然科学の理解: 物理・化学・生物・地理・気候など、自然科学の知見に基づき世界を捉える。
2. 自然の神聖視: 科学的理解を通じて自然界の秩序の精妙さを知り、そこに畏敬の念を抱く。これはテングリ信仰における「感じる信仰」とも響き合う。
3. エコロジーと功利主義の統合: 生態系の持続可能性と、人類にとっての実利を両立する視点を持つ。
4. 人間と自然の共生: 人間が自然の一部であるという認識のもと、負荷を減らしながら生きる社会を構想する。
5. 精神的成長と悟り: 自然との調和を理解し、それに沿った生き方を実践することで、自己認識と幸福感を深める。

これらを一言で表すと、「科学的自然敬愛精神——理性を持って自然を知り、心を持って自然を愛する」となる。この言葉は、科学と霊性を対立ではなく補完的關係として捉える姿勢を象徴している。

### 第3項 「早すぎた秩序」の思想的遺産——現代精神文化への橋渡し

モンゴル帝国が築いた「パックス・モンゴリカ」は、宗教的寛容と精神文化に支えられた秩序形成の実現であったが、長くは続かなかった。杉山正明は、その理由を次のように指摘している。

「構想と実現の努力は称賛にあたいするが、なにぶんにも、それをささえるべき技術力、技術水準が低すぎた。クビライとそのブレインたちには、トラックもパワーショベルも、列車も動力船も無かった。さらに、通信・連絡の手段も、しよせん駅伝の特急便か伝書鳩しかなかった。東西一万キロメートルを超える超広域の大版図をまとめるには、あまりにも人類は技術上・産業上、プリミティブな段階にいた。」(杉山, 2010, p.276)

この指摘は、モンゴル帝国の秩序が「早すぎたシステム」であり、技術的制約によって長期維持が困難であったことを示している。

しかしながら、この「早すぎた」のはハード面だけではない。精神文化的にも、当時の社会条件では、モンゴルの包摂的霊性を制度的に普遍化するには限界があった。シャーマニズムやアニミズムに近い霊性は、近代化の過程で「迷信」として排除され、結果として現代人は精神的空白を抱えることになった。

一方で、現代は科学技術の発展によって、過去には不可能だった視点を実現している。宇宙から地球を俯瞰し、生命の複雑性に迫る科学は、逆説的に新たな霊性の可能性を開いている。遺伝子研究者・村上和雄が「生命の設計図には、人間を超えた何ものかへの驚嘆がある」と語ったように、科学的探究は世界の神秘性を減少させるのではなく、むしろ深化させる方向に向かいつつある。

現代において「霊性」とは、超自然的観念ではなく、生命や自然、他者とのつながりを深く感じ取る感受性として再定義されつつある。これは科学的思考と対立するものではなく、むしろ自然の働きを理解し尊重する態度を補完するものである。

「科学的自然敬愛精神」は、こうした現代の知性と古来の霊性が接続しうる地点に位置している。かつての霊性が持っていた生命への畏敬を、科学的理解によって再構築する試みである。

### 第4項 現代におけるメタ宗教としての可能性

#### ——対立・分断を超える理念

科学的自然敬愛精神は、制度宗教の枠を超えた「メタ宗教」としての可能性を持つ。それは、対立や分断を超える共通理念として、教育・文化・科学の領域に影響を与えうる精神文化である。具体的には、以下のような形で社会に浸透しうる。

- 環境教育：自然への畏敬と科学的理解を同時に育む
- 芸術表現：生命の神秘や宇宙的感受性をテーマとする

- 科学コミュニケーション：宇宙規模の視点を共有する
- ステートメント：国際社会への文書発信

これは、宗教的言語を用いずとも霊的感受性を育むことを可能にする点で、モンゴルの霊性と共通する包摂性を持つ。科学的自然敬愛精神を社会に根づかせるためには、思想だけでなく文化様式として実践されることが重要である。それは個人の内面から社会の構造へと広がる「精神文化の再構築」である。

次項では、上記の「ステートメント」の一例として、科学的自然敬愛精神を国際社会に浸透させることを目的とした宣言文書の文案を提示する。

## 第5項 科学的自然敬愛精神宣言(文案)

### ——国際社会へのステートメント

#### 1.序文:分断を越え、統合の精神へ

人類は長きにわたり、宗教・民族・文化の違いをめぐって争い、自然を征服の対象として扱ってきた。その根底には、精神と科学の分断、自然と人間の乖離、そして「他者」との共感の欠如があった。しかし今、我々は新たな文明の岐路に立っている。

気候危機、孤独の蔓延、社会的分断は、もはや一国や一宗教の問題ではなく、人類全体の課題である。この危機を乗り越えるためには、普遍的かつ倫理的な新たな理念が必要である。

「科学的自然敬愛精神」とは、自然界の法則を科学的に理解しつつ、その背後にある秩序と美に心で敬意を捧げる精神である。それは、宗教的信仰を否定するものではなく、むしろそれぞれの信仰や文化が育んできた敬意・謙虚さ・共感の精神と響き合い、人類が共有できる倫理的な基盤として機能するものである。この精神は、自然が生み出した「生命」という奇跡に対する深い敬意に根ざしている。その尊厳を奪う行為——戦争、紛争、差別、搾取——を廃絶するための、人類共通の倫理的羅針盤である。

この宣言は、国家・宗教・民族を超えて、人類共通の根本理念としての「科学的自然敬愛精神」を世界に提示するものである。それは、未来の国際平和秩序の礎であり、すべての生命との共生を志す者たちの誓いである。

#### 2.基本理念:科学的自然敬愛精神の五原則——生命の奇跡を守り、共生の未来を築く

- 1) 生命への根源的敬意：自然が生み出した生命の奇跡に深い敬意を抱き、いかなる存在も奪われるべきではないという倫理的感受性を育む。
- 2) 科学と精神の統合的理解：自然界の法則を科学的に探究しつつ、その秩序・美・神秘に心で向き合い、知性と感性の両輪で世界を捉える。
- 3) 争いの否定と平和の創造：戦争・紛争・差別・搾取など、生命を脅かすあらゆる暴力を否定し、対話と共感による平和的秩序の構築を志す。
- 4) 多様性の尊重と倫理的共通項の発見：宗教・文化・民族の違いを尊重しつつ、共通の敬愛精神を通じて、人類が共有できる倫理的基盤を見出す。

- 5) 未来世代への責任と共生の実践：自然と生命の尊厳を守ることを未来世代への責任と捉え、持続可能な共生社会の実現に向けて行動する。

### 3. 結語：生命を讃え、共生を誓う

この宣言は、いかなる宗教的教義にも依存せず、またいかなる国家的利害にも偏らない。それは、自然が生み出した生命の奇跡に対する根源的な敬意に基づき、科学と精神、個と共同体、過去と未来をつなぐ人類共通の倫理的羅針盤である。

我々は、この「科学的自然敬愛精神」を胸に、争いを否定し、分断を癒し、すべての生命との共生を育む文明を築くことを誓う。星々の塵から生まれた命が、互いに響き合いながらこの地球に息づいている。我々はその奇跡を、征服ではなく敬意で包み、破壊ではなく共生によって未来へと手渡す。この誓いは、未来世代への責任であり、地球という唯一の共通の故郷に生きる者としての、静かで力強い決意である。

## 第6節 日本の役割——パックス・ヤポニカへの希望

前節では、「科学的自然敬愛精神」という理念を通じて、根源的生命力尊重が現代においても重要な思想的資源になりうることを示した。この精神は、自然科学の知見と霊的感受性を統合し、宗教的教義に依存しない普遍的な倫理を形成する可能性を持つ。

本節では、この霊性的挑戦を担うリーダーとしての日本の役割に注目する。日本文化には自然崇拝・包摂性・倫理性という特性があり、「科学的自然敬愛精神」を育むうえで独自の土壌を備えている。かつてモンゴル帝国が果たした宗教的寛容と文化的統合の役割を、現代において思想的に継承・再構築する可能性として、「パックス・ヤポニカ」の構想を考える。

ここでいう「パックス・ヤポニカ」とは、日本が有する精神文化——自然との共生、倫理的包摂、霊性と科学の融合——を軸とした、思想的国際平和秩序の構想である。

### 第1項 神道とテングリ信仰——自然との交感と身体的霊性

神道は、日本固有の宗教でありながら、厳密な教義や経典を持たず、自然との交感を中心とする信仰体系である。山、川、風、火など自然現象そのものに神が宿るとされ、人間はそれらと調和して生きることが重視される。この姿勢は、モンゴルのテングリ信仰と深く響き合う。両者の類似性は次の点に観察される。

- 自然との共鳴：自然の背後に生命力と秩序を見出す
- 身体的儀礼の重視：神楽や禊と、シャーマン儀礼の共通性
- 祖霊とのつながり：先祖を霊的存在として敬う態度
- 教義の非中心性：体系化された教えより実践を重んじる
- 宗教的寛容性：神仏習合の歴史に象徴される柔軟性

これらはすべて、根源的生命力尊重の文化的表れとして位置づけることが可能である。しかしながら、注意すべきは、明治期に国家によって制度化された「国家神道」である。これは本来の神道の霊性とは異なり、政治的統合の手段として利用された側面が強い。原始的な自然霊性を国家の

正統性に結びつけた結果、戦後に至るまで影響を残した。この歴史は、霊性が政治権力と結びつく危険性を示している。現代における霊性の再構築には、国家神道の経験を十分に踏まえた慎重な倫理的姿勢が必要である。

## 第2項 包摂性・倫理性・科学性——日本文化の特質

日本文化には、自然との共生を重視する感性、共同体の調和を尊ぶ倫理観、そして多様な宗教思想を受け入れてきた包摂性がある。

- 和の精神：対立より調和を重んじる
- 自然観：生活の中に自然への畏敬が根づく
- 宗教的包摂：神道・仏教・儒教・キリスト教などを柔軟に受容
- 倫理性の高さ：災害時の協調行動などに見られる社会的統合力

これらの特性は、制度ではなく精神を基盤とする社会のあり方を示しており、モンゴルの霊性と同様に、共存を重視する思想的基盤となる。

さらに、日本は先端技術・環境技術・生命科学など、現代文明の要となる科学領域で重要な役割を果たしている。これは、「科学的自然敬愛精神」を具体化するうえで有利な条件である。科学理解と自然霊性の融合は、日本文化がもつ固有の可能性であり、国際社会に独自の思想的貢献を行いうる。

## 第3項 パックス・ヤポニカ——新たな国際秩序を日本から

筆者が提唱する「パックス・ヤポニカ」とは、日本の精神文化を軸に構想する新しい国際平和秩序である。これは軍事力による支配ではなく、精神文化による統合を目指すものであり、モンゴル帝国が実現した宗教寛容に通じる思想的遺産を継承しつつ、現代の課題に応答する枠組みである。環境問題、宗教対立、アイデンティティの揺らぎなど、現代社会の複雑な課題は、制度や力では解決が難しい。これらに対し、「科学的自然敬愛精神」は思想的指針を与えることが可能である。自然の法則と共生し、生命を尊重する倫理は、普遍性と包摂性を併せ持つ。

日本は戦後、平和主義と経済・技術による貢献を通じて、力によらない秩序形成のモデルを提示してきた。環境技術の先進性、災害対応の倫理、社会の協調性——これらは、モンゴルの霊性の現代的継承者としての資質を示している。

「パックス・ヤポニカ」とは、日本がもつ精神文化を国際社会に共有し、対立を超えるための思想的提言である。制度ではなく精神から世界を支えるという新しい秩序モデルであり、未来に向けた希望の構想である。

## 第7節 未来への提言

### ——生命倫理を軸とした平和秩序創造

本章では、モンゴル民族の精神文化——とりわけ「根源的生命力尊重」が、宗教寛容と平和秩序の形成に果たした役割を明らかにしてきた。テングリ信仰や母性原理を中心とする精神文化は、言語化されない信仰として機能し、宗教や制度を超えた包摂性を育んだ。その柔軟な靈性は「パックス・モンゴリカ」という歴史的秩序の精神的基盤となった。

この思想は現代においてもなお有効である。分断と対立が深刻化する国際社会において、宗教やイデオロギーを超える「メタ宗教」としての精神的支柱が求められている。こうした状況に対し、本章ではその一つの答えとして「科学的自然敬愛精神」を提唱してきた。これは、自然への畏敬と科学的知性を融合させた精神文化であり、根源的生命力尊重の現代的昇華形である。この精神は、教義に依存しない普遍的な感覚と経験に基づいている。自然との交感、生命への感謝、身体的実感——こうした基本的な感受性は、人類が共有できる精神的言語である。この共通性こそが、分断を超える思想的資源となる。

さらに、この思想的挑戦を担う存在として、日本には独自の文化的土壌がある。神道における自然崇拜、包摂性と倫理性的の強い文化、そして科学技術との融合。それらは「科学的自然敬愛精神」を育む基盤であり、「パックス・ヤポニカ」という新たな秩序の可能性を示している。もっとも、日本がこの役割を果たすためには、国家神道の歴史的経験を踏まえ、靈性を政治から切り離れた倫理的再構築が欠かせない。寺島実郎が指摘するように、靈性や宗教は時に民族的選民意識へと反転する危険を孕む。この点を踏まえつつ、日本の精神文化を普遍倫理へと開き直す視座が必要である。

「人間とは自らの存在を問い詰める特異な動物であり、その意味でいかなる国の、いかなる民族も自らのルーツを探る中で、民族の神話と権威付けを求める。それ自体は自然なことである。ただし、それが自尊を突き抜けて、排他的な選民意識に反転する時に害毒が生じるのである。」(寺島, 2021, p.257)

したがって、日本の精神文化が果たすべきは、自己を絶対化することではなく、自然への畏敬を普遍的倫理へと翻訳する作業である。神道本来の自然靈性——すなわち原始神道的な感性——を再評価し、科学と靈性を架橋する新たな思想的枠組みを提示する必要がある。

未来に向けて、我々は精神文化の力を再評価しなければならない。制度や経済だけではなく、生命と自然への敬意を軸にした秩序こそが、持続可能で安定的な国際社会を築く鍵となる。

「パックス・モンゴリカ」から「パックス・ヤポニカ」へ——それは、歴史の知恵を未来へと橋渡しする思想的旅路である。本章では、新たな平和的国際秩序の再構築に向けた思想的基盤を提示したが、その具体的な実践計画の提示は今後の課題として残されている。その実現は容易ではなく、数世代にわたる文化的熟成と勇気ある行動の継承が必要となるだろう。それでもなお、この思想が世界平和への羅針盤となることを願う。

## 第2章 中国の教科書から見る歴史観

### 第1節 研究目的・背景

#### 第1項 研究の背景

元朝は、中国史上初めてモンゴル民族によって全国統一が実現された王朝であり、世界史的にもユーラシア全域を結ぶ広大なネットワークを形成した時代である。その政治制度・経済政策・文化交流の影響は、中国社会の構造変化や民族関係の形成に深く関わっている。しかしながら、元朝の歴史は「征服と支配」という暴力的な側面を持つ一方で、「統一と融合」という国家形成の契機としても評価される複雑な性格を有している。この二面性が、現代中国の歴史教育においてどのように扱われているかは、教育と政治、歴史認識と国家意識の関係を理解する上で重要な論点となる。

近年、中国の歴史教育は単なる知識伝達から脱却し、学習者が歴史的思考力や多角的視点を養うことを目的として改革が進められている。その中でも、義務教育段階の教材『中外歴史綱要(上)』(人民教育出版社, 2022)では、「遼宋夏金多民族政権の並立と元朝の統一」という単元を設け、モンゴル帝国の成立から元朝による統一を「多民族国家形成の過程」として描いている。この構成は、歴史教育における「民族融合」と「国家統一」の理念を強調し、政治的・文化的な統合の価値を学習者に示す意図をもつと考えられる。

#### 第2項 先行研究と課題の所在

近年の中国教育学および歴史教育研究では、教材分析を通じて歴史叙述の価値構造を明らかにする試みが進められている。冯吉娜(2025)は、『中外歴史綱要(上)』(人民教育出版社, 2022)において人物史の扱いが表層的であることを指摘し、チンギス・ハンやフビライという「大人物」の描写が、民族間の関係史として十分に展開されていない点を問題視している(冯, 2025)。さらに、陳海鴻(2025)は、「大中華」概念を用いて元朝期を多民族融合の象徴と捉える教材叙述の傾向を分析し、国家的統一を重視する歴史観が教育現場で再生産されていると論じている(陳, 2025)。一方で、陶陽(2024)は、フビライ期の重農政策を経済史的観点から再評価し、政治的評価一辺倒の教材記述に対して実証的な補完を行っている(陶, 2024)。

これらの研究は、中国教育における元朝叙述の特徴を多角的に示しているが、依然として「教材における人物像の形成」と「その背後にある教育的意図」を総合的に検討した研究は少ない。特に、チンギス・ハンとフビライの描写を通じて、中国教育がどのように「征服の歴史」を「統一の歴史」へと再構成しているのかという視点は十分に論じられていない。

### 第3項 研究目的

本研究の目的は、中国の中学から高校への教育段階において歴史教材を分析し、元朝およびモンゴル支配者(チンギス・ハン・フビライ)がどのように描かれているのかを明らかにすることである。特に、教材の言語表現・人物叙述・構成上の特徴を通じて、中国教育がいかんにして「統一」「融合」「中華の包容」を強調する歴史観を構築しているかを検討する。

さらに、これらの叙述が単なる歴史説明にとどまらず、国家的アイデンティティの形成や民族意識の涵養とどのように結びついているのかを考察する。これにより、教育における「歴史の再構成」がどのような社会的・政治的意味を持つのかを明らかにすることを旨とする。

### 第4項 本研究の構成

本研究は、全5節で構成されている。第1節では研究の背景と目的を述べ、先行研究を整理した。第2節では、中国の歴史教育の制度的枠組みと教材体系を概観し、義務教育段階の『中外歴史綱要(上)』(人民教育出版社, 2022)および普通高等学校用教材『中外歴史綱要(上冊・下冊)』(人民教育出版社, 2020)の構成を比較・分析する。第3節では、教材におけるチンギス・ハンおよびフビライの叙述を取り上げ、表現方法や語彙の特徴を検討する。第4章では、教材の背後にある教育的意図と歴史観を考察し、「統一と融合」を軸とした歴史叙述の思想的基盤を明らかにする。最後に第5節では、研究成果を総括し、今後の課題と展望を提示する。

## 第2節 中国の歴史教育と教材体系

### 第1項 中国における歴史教育の制度的枠組み

中国の歴史教育は、国家の統一的な教育方針に基づいて実施されており、初等教育から高等教育に至るまで一貫したカリキュラム体系を持つ。義務教育段階では、教育部(日本の文部科学省に相当)が編集を統括する「統編教材」が全国で使用されている。これにより、地域差のない教育内容と、国家として共有すべき歴史意識の形成が保証されている。

この教育体系において、歴史科目は単なる過去の出来事の学習ではなく、学生に「愛国心」「民族意識」「文化的自信」を育む道德教育の一環として位置づけられている。特に多民族国家である中国においては、歴史教育が「民族団結」「国家統一」を理念として展開される傾向が強い。

### 第2項 『中外歴史綱要(上)』および高校教材の構成

義務教育段階の教材『中外歴史綱要(上)』(人民教育出版社, 2022)は、唐から明の時代を扱い、「遼宋夏金多民族政権の並立と元朝の統一」を主要授業の一つとしている(喬, 2025)。この教材では、元朝を「多民族国家の統一と形成」という観点から捉え、チンギス・ハンやフビライの征服活動を「分裂の終結」「民族融合の促進」として説明している。

一方、普通高等学校用教材『中外歴史綱要(上冊・下冊)』(人民教育出版社, 2020)は、世界的視点を重視して再構成されている。ここでは、元朝は「ユーラシア大陸の交流拡大」や「モンゴル

帝国の国際的影響」として位置づけられ、マルコ・ポーロの『東方見聞録』など西方史料を通じて世界的意義を示す構成となっている。すなわち、中学教材では「統一と融合」を中心とし、高校教材では「世界的連関と文化交流」を強調する形で、教育段階ごとに焦点が異なる設計になっている。

### 第3項 「遼宋夏金多民族政権の並立と元朝の統一」単元の位置づけ


**モンゴルは我が国**

**元朝的建立**

蒙古<sup>①</sup>是我国北方一个古老的民族，蒙古人善于骑射，逐水草而居，过着游牧生活。12世纪时，蒙古草原上分布着许多部落，相互间为争夺人口、草场、水源和牲畜频繁发生战争。人们盼望草原统一，结束战争。

1206年，铁木真完成蒙古草原的统一，建立蒙古政权。他被拥立为大汗，尊称为成吉思汗。从此，蒙古草原结束了长期混战的局面。『侵略』ではなく『拡張』

随着蒙古的强大，成吉思汗发动了大规模的扩张战争。几十年里，成吉思汗和他的子孙除向东、向南对金、西夏和南宋作战外，还向西一直打到欧洲的多瑙河流域。1227年，蒙古军队灭西夏。1234年，蒙古灭金，此后与南宋形成了长达40多年的对峙局面。



成吉思汗（1162—1227）

① 蒙古，原为12—13世纪我国北方草原诸部落中一个部落的名称，后来随着历史的发展和演变逐渐成为这些部落的共同名称。

図1 中国教科書抜粋 出典：『中外歴史綱要（上）』

本単元では、複数の民族政権が並立した時代を一体的に扱い、その相互関係の中で元朝が「最終的統一の達成者」として描かれている。チンギス・ハンは「草原世界を統一した英雄」、フビライは「統治制度を整え、経済を発展させた開明的君主」として位置づけられ、征服の過程は簡略化されている。

さらに、教材の章末には「思考と討論」という学習活動が設けられ、「元朝の統一は中国の発展にどのような影響を与えたか」など、国家的意義を考えさせる設問が提示されている。これにより、学習者は「多民族の融合によって形成された中華文明」という歴史認識を自然に学ぶ仕組みとなっている。

### 第4項 史料実証・問題解決型授業の導入動向

近年の教育実践では、「史料実証的思考(歴史的思考力)」の育成が重視されている。劉熙(2025)は、七年級(中学2年)における「元朝の建立と統一」の授業実践を分析し、史料を用いた探究

活動を通じて、学生が「行省制度」や「民族関係」などを自ら検証する学習の有効性を示している(劉, 2025)。

こうした手法は、元朝という複雑な時代を「征服の歴史」ではなく「多角的に考察すべき歴史」として理解させる教育方針の表れである。

## 第3節 教材における元朝、チンギス・ハン、フビライの描写

### 第1項 チンギス・ハン像の転換—征服者から統一者へ

教材におけるチンギス・ハンの描写は、征服者ではなく「草原を統一した偉大な政治家」として提示される傾向が強い。『中外歴史綱要(上)』(人民教育出版社, 2022)では、彼を「部族間の争いを終結させ、安定した秩序を築いた指導者」として紹介し、暴力的側面にはほとんど触れていない。

これは、征服を「統一の前提」として再定義する教育的意図によるものである(冯, 2025)。

さらに、高校教材ではチンギス・ハンを「ユーラシア交流の開拓者」として描き、東西交通の発展に寄与した存在として再評価している。このように、教育段階が進むにつれ、「征服の物語」は「文明交流の物語」へと変換されている。

### 第2項 フビライ像の再構成—融合と統治の象徴

フビライは、教材の中で「元の法を尊重し、農業を重視した開明的君主」として描かれる。陶陽(2024)は、フビライが「重農抑商政策を推進し、地方行政を安定化させた」と指摘し(陶, 2024)、その政治的功績が教材でも強調されている。

一方で、南宋征服や宗教政策などの負の側面はほとんど触れられず、「多民族の調和と制度整備」という肯定的側面に焦点が当てられている。

こうした叙述は、教育現場における「融合的歴史観」を支える象徴的表現である。

### 第3項 教材文言の特徴と表現分析(「征服」から「統一」への言い換え)

教材において「征服」「侵略」「支配」という語は極力避けられ、「統一」「融合」「発展」などの肯定的語彙に置き換えられている。

たとえば、「モンゴル軍が南宋を滅ぼした」という叙述は、「フビライが全国を統一した」と表現される。この語彙転換は、国家形成の連続性を保つとともに、「異民族支配」への抵抗感を和らげる教育的配慮と考えられる。

### 第4項 重農政策・行省制度など政策面の事例

フビライ期の政策として最も強調されるのが「行省制度」である。教材では、これを「地方行政の効率化をもたらし、多民族国家の統一を支えた制度」と位置づける(劉, 2025)。

さらに、重農政策については「漢人の生産活動を保護し、経済の安定をもたらした」と記され、フビライを「中華的統治理念を継承した君主」として描いている。

## 第4節 教育的意図と歴史観の分析

### 第1項 「統一と融合」を軸とする叙述構造

教材全体を通して最も顕著な特徴は、「分裂から統一へ」「対立から融合へ」という発展史観である。元朝の成立は、征服の結果ではなく「多民族の交流と融合によって形成された統一国家」として描かれている。

こうした叙述は、現代中国が掲げる「中華民族共同体」理念と深く結びついており、教育を通して国家統一と民族団結の価値観を内面化させる役割を果たしている。

特にチンギス・ハンやフビライに関しては、征服者ではなく「統一を実現した政治家」「民族融合を推進した開明的君主」として再定義されている。これにより、元朝の暴力的側面は希薄化され、代わりに「制度的統治」「文化的交流」が強調される。

陳海鴻(2025)は、こうした叙述の背後に「大中華」概念が存在すると指摘しており、元朝を「華夷一体」思想の実践例として位置づけている(陳, 2025)。教材では、モンゴル族も中国の歴史発展に貢献した民族の一つとして描かれ、異民族間の対立よりも「共創」「融合」が重視されている。これにより、学習者は「中華文明は多民族の共同成果である」という統合的歴史認識を自然に身につけることになる。

### 第2項 「他者」から「中華」への再定義と国際的対比

もう一つ注目すべきは、モンゴル帝国やフビライ像の「他者化」と「包摂化」の対比である。西洋文学において、たとえばコールリッジの詩『クープラ・カーン(忽必烈汗)』では、フビライは「豪奢で神秘的な専制君主」として描かれ、東洋的異国性の象徴となっている(丁, 2025)。

一方、中国の教材ではフビライは「中華文明の継承者」であり、「多民族国家の統合者」として描かれる。この差異は、文化的想像力の方向性の違い、すなわち「他者化」と「包摂化」という二つの歴史理解のあり方を示している。

中国の教育では、異民族であるモンゴルを「中華」の枠内に再定義することで、民族的多様性を包含する国家像を提示している。

これは、歴史教育を通じた文化的アイデンティティ形成の一環であり、単に過去を教えるのではなく、現在の国家理念を反映する教育的装置として機能している。

## 第5節 結論

### 第1項 本研究の要約

本研究では、中国の中等教育における教材分析を通じ、元朝およびモンゴル支配者の描写がどのように再構成されているかを明らかにした。



図 2 中国教科書抜粋 出所：『中外歴史綱要（上）』

その結果、教材では「征服」よりも「統一」、「対立」よりも「融合」が強調され、元朝は中国多民族統一国家の形成過程の一段階として位置づけられており、「外来の征服王朝」ではなく、「中国自身の歴史の一部」として語り直されている点に、本教材における元朝像の特徴が観察される。

### 第2項 教育的・文化的意義の考察

こうした叙述は、歴史教育が単なる知識伝達ではなく、国家的価値観の形成装置として機能していることを示している。特に、元朝という複雑な時代を「多民族共生の成功例」として描くことは、現代中国の「民族団結」政策と深く関連している。

しかしながら、筆者はこうした叙述が、統一や安定を重視するあまり、歴史の複雑さを単純化している側面もあると感じる。実際の元朝社会では、モンゴル人・色目人・漢人・南人という民族的階層が存在し、社会的差別も明確であった。それにもかかわらず、教材ではこれらの問題にほとんど触

れず、「平等な融合」を強調している。これは、教育が国家的統一感を育むために、あえて「征服」「支配」などの語を避け、民族対立の記憶を曖昧化しているためだと考えられる。

つまり、中国の歴史教育は、過去の事実を再構成することで、「多民族が共に国家を築いてきた」という統合的ナラティブを形成し、現在の社会的安定と国家意識を支える役割を果たしていると考えられる。

### 第3項 今後の課題と展望

今後の研究課題としては、教材の記述だけでなく、実際の授業実践・教師の解釈・学生の受容など、教育現場での再構成プロセスを明らかにすることが求められる。さらに、日本や韓国など他国の教材と比較することで、東アジアにおける歴史教育と国家アイデンティティの関係をより広く考察することが可能になるだろう。

筆者自身としては、教育が国家意識を育むことの重要性を理解しつつも、歴史の複雑さや矛盾をも学ぶ姿勢が今後の教育には必要だと考えている。特に、元朝のような多民族支配の時代を通じて、統一と差異の両面から歴史を考える教育こそが、真の歴史的理解を育む道であると感じている。

# 第3章 パックス・モンゴリカにおけるモンゴル帝国の広域統治と多民族支配の仕組みから、現代の組織文化の在り方を学ぶ

## 第1節 はじめに

一般的に「帝国」と聞くと、中央が強い力で支配し、すべてを同じルールで統一しようとする国家をイメージしがちである。しかしながら、モンゴル帝国の中でも「パックス・モンゴリカ(モンゴルの平和)」と呼ばれた時代は少し異なる。広大な領土と長く続いた支配は、文化や法律を無理に一つにまとめようとする政策ではなく、征服した人々の文化、宗教、法律の独自性を認めるという、現実的なシステムによって支えられていたと考えられる。

13世紀から14世紀にかけて、モンゴル帝国はユーラシア大陸の大部分を支配した。この巨大な帝国には、遊牧民、農耕民、都市の商人など、様々な暮らし方をする人々がいた。宗教も、シャーマニズム、仏教、イスラム教、キリスト教、道教など、非常に多様であった。こうした状況で、モンゴル帝国はどのようにして長期間、安定した支配を続けることができたのか。

一方、現代社会では、グローバル化が進み、異なる文化が混じり合っているが、同時に文化や国家の間での対立も起きている。多くの多国籍企業は、世界中に拠点を持ち、異なる文化を持つ従業員をまとめようとしているが、うまくいかないことも少なくない。例えば、海外の会社を買収したものであるが、企業文化が合わずに組織の中であつれきが生まれるケースはよくある。デロイトトーマツ コンサルティングが実施した調査によれば、日本企業による海外M&A(合併・買収)が成功する確率はわずか37%にとどまっている(デロイトトーマツ コンサルティング,2018)。また、クロスボーダーM&Aにおいては、文化的距離がM&Aの成否に影響を与えることが指摘されている(王ら,2023,p.179)。本社のやり方を一方的に押し付ければ現地で反発され、かといって各拠点のやり方を認めすぎると組織がバラバラになってしまう。これは多くのグローバル企業が抱える悩みである。

本章では、まずモンゴル帝国の多様な統治システムを、「法律」「人材の採用」「交通網」という三つの側面から見ていく。次に、その統治のやり方を「統合」ではなく「連結」という考え方で捉え直し、現代の組織、特に多国籍企業が抱える問題解決のヒントを探る。

## 第2節 モンゴル帝国の多様な統治システム

モンゴル帝国の法律、人材の採用、交通網を確認する。その特徴は、複数の法律が同時に機能するシステムを、意図的に取り入れた柔軟さにあったと考えられる。

## 第1項 多様な法律の共存

### (1) モンゴル帝国の法律制度「ヤサ」

モンゴル帝国の法律「ヤサ」は、かつて帝国全土で適用される統一法典と見なされ、中央集権体制の証とされてきた。しかしながら、最近の研究では、この考え方が見直されつつある。チンギス・ハンが軍や駅伝制度(ジャムチ)の規則を定めたことは記録に残るが、これらは主にモンゴル人エリート層を対象とするものであった。最古のモンゴル側史料『元朝秘史』には、国家全体の法典が公布されたという直接的な証拠はない。歴史家デイヴィッド・モーガンによれば、単一の法典「大ヤサ」という概念は、後世に生まれたイメージである可能性が高い(Morgan, 1986,p.163)。ヤサの実態は、全国民に強制される法律ではなく、モンゴルの軍人やエリート層に適用される慣習や個別命令の集合体であったと考えられる。

### (2) 二つの裁判制度:イルハン朝と元朝の例

モンゴル帝国の統治は、複数の法律が同時に機能することを認めていた。これは、征服した土地の社会を壊すのではなく、それをうまく利用して統治のコストを下げ、人々の反発を和らげるという、賢い判断だったと考えられる。

例えば、イランを支配したイルハン朝では、モンゴルの法律にもとづく裁判所(ヤルグ)と、イスラム法の専門家が担当するシャリーア法廷が、同時に存在していた(船田,2009,p.10)。ヤルグはモンゴル人や軍人が関わる事件を、シャリーア法廷はイスラム教徒の住民の間のトラブルを扱った。それぞれが担当する範囲が違い、それぞれの法律に基づいて判決を下していたのである。

例えば、家畜の処理方法について、モンゴルの伝統(血を抜かない)とイスラムの教え(血を抜く)は正反対であったが、イルハン朝はイスラム教徒に対して自分たちのやり方を認めることで、無用な対立を避けた(船田, 2009, p.12)。こうした二つの裁判制度は、モンゴルの支配層とイスラム社会の間の緊張を和らげ、社会の秩序を保つのに役立った。

同じように、中国を支配した元朝においても、モンゴルのならわしは、もともとあった中国の法律と一緒に使われていた(船田, 2009, p.15)。元朝は、宋や金の時代から続く中国の法律を基本的に維持し、そこにモンゴル独自の決まりを追加する形で国を治めたのである。

### (3) 約会制度

複数の法律があれば、当然、どちらの法律で裁くかという争いが起きる。元朝は、この問題に対応するために「約会(やくかい)」と呼ばれる特別な仕組みを作った(船田,2009,p.18)。これは、異なる法律のもとにいる人々の間で裁判が起きたときに、双方の役人が一緒になって裁判を行う制度であった。具体的には、例えばモンゴル人と漢人の間で争いが起きた場合、モンゴル人を担当する役所の役人と、漢人を担当する役所の役人が共同で話し合い、判決を下したのである。このやり方によって、どちらか一方の法律が優先されることを避け、お互いの伝統を尊重しながら争いを解決することができた。

この制度は、法律の違いをなくすためではなく、違いがある状態をうまく管理するために作られた。それぞれの法律の正しさを公式に認め、それらを調整するための手続きを用意したのである。約会制度の存在は、モンゴル帝国が法律の統一を目指していたのではなく、むしろ法律の多様性を前提として、それを管理する仕組みを発展させていたことを示している。

#### (4) 様々な宗教を認めること

様々なものを認める姿勢は宗教にも表れており、チンギス・ハンとその後の支配者たちは、仏教、キリスト教、道教、イスラム教など、主要な宗教の指導者たちの税金を免除していた(本田, 1991, p.245)。これは単に心が広がったというだけでなく、それぞれの宗教グループの自治を認め、その代わりにモンゴルの支配に協力してもらおうという、政治的な取引であった。この政策のおかげで、各宗教グループはモンゴルの支配下で自分たちのコミュニティを維持でき、帝国は彼らの宗教的な権威を通して、間接的に人々を治めることができた。

### 第2項 文化の橋渡し役たち

モンゴルは、役人を任命する際に、民族の違いよりも能力と忠誠心を重視した。その証拠に、帝国ができた早い段階から、契丹人の耶律楚材やウイグル人のチンカイのような、征服された民族出身の役人を積極的に採用している(道中华, 2022, p.56)。こうした能力を重視した人材の採用は、モンゴル帝国の統治を非常に効率的にした。

#### (1) 征服された民族出身の高官:耶律楚材とチンカイ

契丹人の耶律楚材は、モンゴル軍の一部が「占領した畑を壊して牧草地にしよう」と主張したときに、それに反対した。彼は、中国式の税金の仕組みを導入して、安定した税収を得ることの重要性を説いた。彼はオゴデイ・ハンに対し、「地税、商税、塩・酒・鉄の専売税などを決めれば、年間で銀50万両、絹織物8万匹、穀物40万石以上の収益が見込めます」と具体的な数字を挙げて説明し、これを認めさせた(道中华, 2022,p78)。彼の専門知識は、モンゴルの支配層が目先の利益だけを追い求めるのを防ぎ、長く続く安定した統治への道を開いたのである。

一方、ウイグル人のチンカイは、オゴデイ・ハンのもとの、宮廷の文書行政のトップを務めた。彼の権力は絶大で、たとえハーンの命令であっても、チンカイがウイグル文字で最後にサインをしなければ、その命令は正式な効力を持たなかったと記録されている(船田,2011,p54)。これは、彼が単なる書記官ではなく、帝国の重要な決定において、最終的な承認権を持つ「文化の門番」として機能していたことを示している。彼は、耶律楚材(契丹人)、マフムード・ヤラワチ(ムスリム)、粘合重山(女真人)という様々な出身の官僚たちをまとめ、帝国の幅広い文書行政をスムーズに進めた。

このように、モンゴル帝国は征服した人々の文化や行政の知識をうまく利用することで、多くの民族や文化をまとめる柔軟な統治システムを作り上げた。この現実的なやり方によって、モンゴル人自身には馴染みのない複雑な役所仕事を持つ地域でも、すぐに行政をスタートさせることができたと考えられる。

#### (2) ケシク制度:多民族エリートの養成所

モンゴル帝国の親衛隊であるケシクは、単なる軍事組織ではなかった。それはハーンの側近チームであり、将来の幹部を育てる学校のような役割も果たしていたのである(村岡,2013,p5)。チンギス・ハンは、部下の将軍や、同盟・征服した部族のリーダーの息子たちをケシクに入れ、そこで働かせることを制度にした。彼らは人質であると同時に、モンゴルのルールを学び、ハーンに直接仕えることで、忠誠心を育てていった。

ケシクのメンバーは、ハーンの宮廷で様々な仕事をしながら、モンゴルの軍の仕組み、宮廷の儀式、政治の決定がどう行われるかなどを間近で学んだ。ケシクでの勤務を終えた者たちは、故郷のリーダーとして戻ったり、帝国の重要な役人に任命されたりした。このシステムは、中央には忠実でありながら、自分のコミュニティでは現地の習慣や言葉を使って人々を治めることができる、多民族のエリート層を生み出したのである。

### (3) 色目人:財政と商業の橋渡し役

元朝の「色目人(しきもくじん)」は、厳しい民族の階級ではなく、行政の都合から作られたグループだと考えられる。これは、モンゴル人ではないけれど、伝統的な中国の法律の対象にもならない人々(主に中央アジアや西アジアの出身者)を指す、おおまかな言葉であった(松田,2005,p45)。彼らは、モンゴルの支配者と漢人の人々の間に立ち、財政、貿易、行政を管理する橋渡し役として活躍した。

特に財政と商業の分野で、色目人の役割は重要であった。彼らの多くは、シルクロード貿易で活躍してきた商人や金融業者で、商売や税金集めに関する豊富な経験と専門知識を持っていた。元朝は彼らを、税金を集める責任者や財政の管理者として採用し、帝国の財政運営を任せた。このグループの存在によって、モンゴル人は直接統治の負担を負うことなく、広大な中国の経済を効率的に管理することができたのである。

## 第3項 帝国をつなぐ仕組み:駅伝制(ジャムチ)の役割

### (1) ジャムチの仕組みと機能

駅伝制(ジャムチ)は、各地がそれぞれ独立性を持ちながらも、帝国全体を一つにまとめておくことを可能にした、決定的なインフラであった。ジャムチは、帝国の公式な使者、軍隊、そして許可を得た商人のために、食事、宿、馬を提供する、国が管理する巨大なネットワークであった(四日市,2010,p120)。それはユーラシア大陸全体に広がり、帝国の離れた地域同士を、それまでになかった速さと確実さで結びつけた。

ジャムチのネットワークは、約30キロメートルごとに駅(ジャム)が置かれ、各駅には馬、食料、宿が常に用意されていた。公式な使者は、「パイザ」と呼ばれる通行証を持っており、これを提示することで駅の施設を無料で利用できた。使者は疲れた馬を駅で新しい馬に乗り換えることができたため、非常に速く移動することができたのである。

### (2) 「薄い強い」支配のネットワーク

この広大なネットワークは、ハーンが広大な領土を管理するために欠かせないものであった。それは中央からの命令を地方へ運び、地方からの情報を中央へもたらした。ジャムチに象徴されるモンゴルの統治は、「薄い強い」支配のネットワークを作ることだったと指摘可能である。モンゴル帝国は、征服した土地に大規模な軍隊を置いたり、細かいルールを押し付けたりはしなかった。各地域は、もともとの統治の仕組みを維持し、高いレベルの自治を認められていた。しかしながら、ジャムチというインフラを通じて、中央と地方は常にしっかりとつながっていたのである。

### (3) 文化と経済の交流を促進

ジャムチの影響は、政治や軍事だけにとどまらなかった。商人たちもジャムチを利用することが許され、これによってユーラシア大陸を横断する長距離貿易が非常に活発になった。これにより、東西の品物だけでなく、技術や考え方の交流も進んだ。例えば、イタリアの商人ペゴロッチェが書いた商売の手引書には、クリミアから北京までの旅の様子が詳しく書かれており、ジャムチのおかげで「夜でも昼でも安全」だったと述べられている。

さらに、ジャムチは文化交流にも貢献した。使者や商人と一緒に、宗教家、学者、芸術家たちも帝国内を移動し、知識や技術、芸術のスタイルが広く伝わった。例えば、中国の絵画技術がペルシアの細密画に影響を与え、ペルシアの天文学の知識が中国に伝わったのも、このジャムチ・ネットワークがあったからこそである。

## 第3節 モンゴル帝国の統治から現代組織へのヒント

### 第1項 「統合」から「連結」へ:多様性をつなぐモデル

モンゴル帝国の統治を理解する上で重要なのは、「統合」と「連結」の違いである。統合とは、様々な要素を一つのシステムにまとめ、同じにしようとすることである。一方、連結とは、様々な要素がそれぞれの個性を保ったまま、お互いに結びつくことである。モンゴル帝国は、統合ではなく連結を選んだ。この「多様性の中の連結」こそが、モンゴル帝国が広大な領域を長く統治できた秘訣だったと指摘可能である。

### 第2項 現代組織への応用:5つの設計原則

多様な文化や専門性を持つ人材をまとめながら、各地域や部門の自主性を保つという課題は、13世紀のモンゴル帝国と現代の多国籍企業に共通している。グローバル化が進んだ現代において、企業や国際機関は、文化や言葉が違う人々を一つの組織にまとめることを求められている。しかしながら、画一的なやり方を強制すれば現地で反発を招き、逆に各拠点の独自性を認めすぎれば組織としての一体感が失われるという、バランスの問題に直面している。

モンゴル帝国の統治原則から、現代組織が取り入れるべき5つの設計原則を考えてみる。

#### (1) 分権的な意思決定

日常的な仕事や現地の市場への対応については、各拠点に大きな裁量を与えるべきである。モンゴル帝国が各地域の統治システムを維持したように、現代の組織も各拠点の独自の仕事の進め方や決定方法を尊重すべきである。本社は、会社全体の戦略や価値観を決めるが、それをどう実現するかは現地の判断に任せる。このやり方によって、現地の市場や文化に合った柔軟な対応が可能になり、従業員の自主性とやる気を高めることが可能である。

#### (2) 共通のビジョンと価値観の確立

組織全体で共有すべき理念や目標をはっきりとさせ、それをつながりの土台とすることが必要である。モンゴル帝国でハーンへの忠誠が中心であったように、現代の組織でも、会社の使命や価

価値観への共感が、多様な拠点をつなぐ力となる。ただし、この価値観は、特定の文化や地域に偏ったものではなく、すべての拠点が受け入れられる普遍的なものでなければならない。ある調査によれば、強い組織文化を持つ企業は、そうでない企業に比べて高い業績を上げていることが示されている(飛田,2010,p.62)。

### (3) 強力な情報インフラへの投資

迅速な情報共有と透明性を確保するためのシステムに、しっかりと投資すべきである。ジャムチが帝国のつながりを確保したように、現代の組織では、情報システムやコミュニケーションツールが同じ役割を果たしている。クラウドを使った情報共有、ビデオ会議システム、プロジェクト管理ツールなどへの投資は、単なるコストではなく、組織のつながりを保つための戦略的な投資と考えるべきである。これにより、物理的な距離を超えて、組織の一体感を作ることが可能である。

### (4) 文化的仲介者の育成:現代の「色目人」

異なる文化や専門分野をつなぐことができる人材を計画的に育て、適切に配置する必要がある。ケシク制度や色目人の例が示すように、本社と現地の両方の視点を持つ人材は、組織のつながりを保つ上で欠かせない。

特に、現代の組織において色目人の役割は非常に重要である。複数の文化がそれぞれの個性を保ったまま全体をまとめることは、現代の多国籍企業が直面する最も難しい課題の一つである。この課題に対応するためには、異なる文化圏の間に立ち、双方の言葉、習慣、価値観を理解し、うまく橋渡しできる人材が不可欠である。彼らは、単なる通訳や連絡係ではなく、文化的なあつれきを和らげ、お互いの理解を深め、組織全体の利益のために異なる視点をまとめる「文化の門番」として機能する。

グローバル人材育成プログラムを通じて、各国の有望な人材を本社で育て、彼らを各地域のリーダーや本社と現地をつなぐポジションに配置する。さらに、異文化間のコミュニケーションや調整が得意な専門家を積極的に採用し、組織内の文化的なあつれきを和らげる役割を任せる。彼らは、チンカイのように、公式な権限だけでなく、非公式なネットワークの中心としても活躍するだろう。

### (5) 多様性の尊重と活用

各地域や部門の独自性を、組織の弱みではなく強みとして捉え、積極的に活用すべきである。モンゴル帝国が各地域の専門知識を活用したように、現代の組織も各拠点が持つ独自の市場知識、技術、文化的な視点を組織全体の財産と考えるべきである。例えば、特定の地域で開発された画期的な製品やサービスを、他の地域にも広める。あるいは、異なる地域の専門家チームを組み合わせて、世界的な課題に取り組む。こうしたやり方によって、多様性は組織の競争力を高める源泉となる。

## 第3項 実践する上での課題と限界

モンゴル帝国の統治モデルを現代の組織に応用する際には、いくつかの課題や限界も知っておく必要がある。

第一に、モンゴル帝国の統治は、最終的には軍事力とハーンへの絶対的な忠誠という、現代の企業組織とは根本的に違う土台の上に成り立っていた。そのため、そのやり方を単純に真似することはできない。第二に、複数の法律を認めることは、法律間の矛盾や対立を常に含んでおり、その調整には「約会」のような高度な紛争解決の仕組みが必要であった。現代の組織でも、各拠点の自主性を認めつつ、企業倫理やコンプライアンスという共通のルールをどう維持するかという課題が生まれる。最後に、モンゴル帝国は最終的に分裂し、その広大な領土を維持することはできなかった。この歴史的な事実は、連結モデルが永遠の安定を保証するものではなく、常に内外からの挑戦にさらされるということを示している。

## 第4節 結論:「統合」の限界と、合理的な「ドライさ」の重要性

### 第1項 企業文化による「価値観の統一」の難しさ

本研究を通じてモンゴル帝国の仕組みを見てきたが、そこから現代の組織が得られる最大の教訓は、強力な企業文化によって従業員の価値観を統一しようという努力は、実は徒労に終わる可能性が高いということである。多くのグローバル企業は、多様な従業員を「ワン・チーム」にするため、共通の理念を浸透させ、内面的な統合を図ろうと腐心している。しかしながら、日本企業の海外M&Aの成功率が低いことから示唆されるように(デロイトトーマツ コンサルティング,2018)、異なる背景を持つ人々の文化的統合は極めて困難である。

モンゴル帝国が長期の支配を実現できたのは、むしろそうした精神的な統合をあきらめていたからではないであろうか。彼らは、被支配民の宗教や習慣に対して、受容的であったというよりも、統治コストを最小化するために「あえて干渉しない」という態度をとっていたように看取される。現代の組織においても、無理に個人の内面に踏み込んで同質化を求めるよりも、相互の領域を侵さない「適度な無関心」を保つ方が、結果として組織運営は円滑になるのではないであろうか。

### 第2項 「愛社精神」よりも「契約的な合理性」

モンゴル帝国の歴史的経緯(内部での反乱や離反の多さ)を鑑みると、人々が帝国に対して強い帰属意識(愛国心)を持っていたとは考えにくい。それでも帝国がシステムとして機能したのは、モンゴルの支配下にいる方が、交易の利便性や税制面での「メリット」を享受できたからだと考えられる。

これを現代の組織論に当てはめれば、従業員に対して過度な「愛社精神」や「エンゲージメント」を求めることには慎重であるべきだと指摘可能である。グローバルな環境下では、従業員は自身のキャリアや利益のために組織を利用する「傭兵」のような存在であると、ある種割り切って捉える視点が必要である。

本稿で論じた「薄くゆるいつながり」とは、情緒的な紐帯ではなく、あくまで「この組織に属することが合理的である」という判断に基づいた、機能的な契約関係のことである。組織と個人をつなぐものは、共有された理念である必要はなく、冷徹な利益の合致で十分なのである。

### 第3項 現代版「ジャムチ」としてのプラットフォーム型組織へ

以上の考察から、これからの組織は、擬似家族的な共同体モデルからの脱却を目指すべきだと筆者は考える。

組織が志向すべき姿は、構成員を教化し導くパターナリズム(温情主義)的な存在ではなく、構成員が自己実現のために利用する「インフラ」や「プラットフォーム」としての存在である。モンゴル帝国の「ジャムチ」がそうであったように、優秀な個人が自由に移動し、能力を発揮できる環境とルールさえ整備すれば、求心力を強制せずとも組織は維持されるはずである。

モンゴル帝国の事例から導き出されるのは、「組織が個人の内面や文化への干渉を控え、機能的な利便性の提供に徹したとき、初めて多様な人材がそこに集う」という逆説的な事実である。

多様性が進むこれからの社会で持続可能なのは、カリスマ的なリーダーシップで熱狂を生む組織ではなく、誰よりも冷徹に、参加するメリットだけを合理的に設計できる組織ではないであろうか。

## 第4章 モンゴル帝国の血統主義と女性の果たした役割及び現代への継承

### 第1節 はじめに

2025年4月中旬から6月初旬まで天理大学附属天理参考館においてチンギス・ハンの子孫であるチェチェン・ハン・ショロイから始まる世界最大級の家系図の展示があった(天理大学創立100周年記念第98回企画展-絆-ヒトとヒトをつなぐモノ)。その家系図は直径555cm、円形、布製であり、チェチェン・ハン・ショロイ(1577-1655、モンゴル南東部のハルハ部を治めたハーンの一人)から始まる14世代11,966人という壮大なものである。家系図の中心にはショロイの名前が記されており、そこから同心円状に赤い線が世代毎に区切られているが、そこに記載されているのは男系男子に限られており、それ以外の配偶者や女子は省略されている。かつてモンゴルの遊牧民社会ではチンギス統原理という思想があり、チンギス・ハンの男系男子のみが正統な支配者となる権利を持つと考えられていたことがこうした家系図の作り方にも影響を及ぼした可能性があるという。

本章ではモンゴル帝国でのチンギス・ハンの血統の重要性と男系男子踏襲の変遷、及び家系図に名前は出てこないが男系男子を支えてきたと推測される女性の活躍とその役割について考察し、現代との共通性を明らかにする。



図 3 チェチェン・ハーン・ショロイから始まる世界最大級の家系図（筆者撮影）

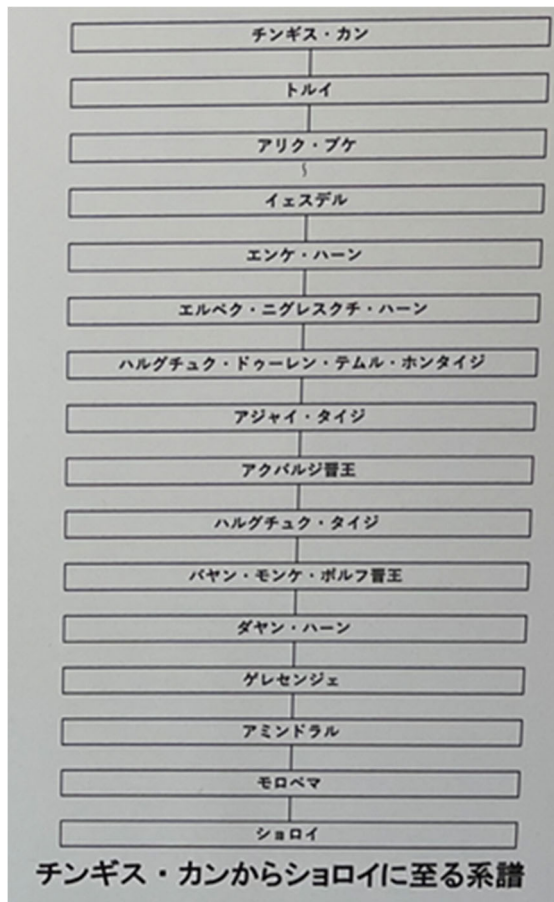


図 4 家系図展示説明文の系譜部分（筆者撮影）

## 第2節 チンギス統原理とモンゴル帝国の血統支配による領土拡大

本節ではチンギス統原理の生まれた歴史的背景と浸透、及び血統支配による領土拡大について考察する。

### 第1項 遊牧民社会における血統の重要性

中央ユーラシアの遊牧国家では同一の男系に属する氏族のみしか君主になれないとする血統原理が古代の匈奴の頃から一般的であった。これは、遊牧民社会では農耕社会と異なり固定的な行政制度や文字による法典を欠いていたため、政治権力は慣習法(ヤサ)と血縁によって担保されていたことが背景にある。とりわけ父系を通じた血統が強調され、族長や部族長の地位は原則として男系相続によって継承されていくということが一般的であった。

### 第2項 チンギス統原理の浸透

1206年、諸部族のクリルタイ(部族会議)によってテムジン(チンギス・ハン)として即位、この時点で「チンギスの子孫は特別な天命を帯びる」という観念が形成され、男系男子による継承原理が正統支配の基礎となった。チンギス・ハンは「ハーンと名乗るのは唯一、「黄金家族」のボルジギン家の出身者のみと定めたのである。」(楊、2024、p137)。

以後、帝国全体の大ハーンはチンギス家の男系男子から選出される慣習が固定化され、これがいわゆるチンギス統原理と呼ばれるようになったのである。つまりチンギス統原理を制度的に支えたのがクリルタイであった。

### 第3項 モンゴル帝国の血統支配による領土拡大

チンギス・ハンの死後も、彼の血を引く男系男子による支配体制が続いた。

長男ジョチには西方の草原地帯、二男チャガタイには中央アジア、三男オゴデイにはカアン位と東方領域、四男トルイにはモンゴル本土と軍事指揮権が分与された。これによりモンゴル帝国は血統による分割支配体制を整えた。

この仕組みは単なる行政分割ではなく、「チンギスの血統」を根拠にした分権支配であり、いずれの地域支配者もチンギス統原理に基づく正統な後継者と見なされた。

この分割支配体制はやがて帝国の分裂をもたらす一因ともなったが、いずれの後継国家も支配者は必ずチンギス家の男系子孫であった。

(チンギス・ハン直系の子息が支配した地域・国の例)

- ・キプチャク・ハン国(ジョチ家): ジョチの子孫がロシア南部から東欧にかけての支配権を確立。
- ・チャガタイ・ハン国: チャガタイ家が中央アジアを支配し、イスラム化が進展。

・イルハン朝(フレグ家): 西アジアのイラン高原に成立し、イスラム世界においても「チンギス家の権威」が正統性を担保。

・元朝(フビライ家): 東アジアで中国王朝を継承したが、その根拠は「チンギスの男系子孫」という血統に置かれた。

この原理はモンゴル帝国崩壊後も中央ユーラシアの遊牧民社会に広く根付いた。さらに、モンゴル帝国の構成員であった遊牧民のみならず、帝国の支配下にあったユーラシア大陸の各地の人々の心に強く残った(宮脇、1996、p.18)。

14世紀に中央アジアで台頭したティムール帝国はモンゴル帝国の継承国家の1つであったと見てよいが、帝王ティムールはイスラムの君主としてスルタンの称号を取ったものであるが、チンギス・ハン家の出身でなかったためハーンの称号を取る事ができず、西部チャガタイ・ハンのカザーンの娘と結婚し、グレゲン(婿)という称号を取って、チンギス・ハン家の権威に頼っている(佐口、1970、p399)。

この事例はチンギス統原理がモンゴル帝国崩壊後もなお政治文化として根強く機能していたことを示している。

その後、チベット仏教やイスラム教の権威の高まりなどにより影響力は徐々に変化していったが、20世紀にユーラシア各地が社会主義の嵐に席卷されるまで守られてきた(楊、2024、p137)。

20世紀に入り、チンギス・ハンの末裔であるチェチェン・ハーン、アクワン・ナリン(在位1910-1923年)の時代にモンゴルでは独立運動が起こり、1924年モンゴル人民共和国が成立、ソビエト連邦の影響を受けた社会主義体制の確立に伴い過去の情報が廃棄されている。さらに、モンゴルでは姓の使用が廃止され家系図を記録する習慣も憚られるようになり、男系男子の継承の考え方自体も衰退していったものと考えられる。

#### 第4項 チンギス統原理の問題点

チンギス統原理は帝国を安定化させる一方で、後継者争いを激化させる要因ともなった。チンギスの血を引く男系男子は数多く存在したため、彼らの間で正統性を競い合うことがしばしば内戦を引き起こした。フビライとアリクブケの内戦はその典型であり、両者ともにトルイ家の男系子孫であったがゆえに、互いに「正統なハーン」であると主張できたのである。

つまり、チンギス統原理は「血統による秩序」と「血統による分裂」の両面を併せ持っていたと考えられる。

以上のように、チンギス統原理はモンゴル帝国の支配構造を支える根幹であり、帝国を「チンギス家の帝国」として維持するための不可欠の原理であったが、その一方で、血統至上主義は権力闘争の火種ともなり、帝国の混乱を加速させる要因ともなっていると指摘可能である。

#### 第5項 現代に引き継がれるチンギス・ハンの血統の影響

岡田によると「チンギス・ハンは5百人もの妻や妾を持っていたと言われる。これは、遊牧民の社会では同盟はすなわち結婚関係であり、チンギス・ハンに服従してモンゴル人となった部族・氏族

はそれぞれ娘を差し出して忠誠の証とし、モンゴルと同盟した種族はやはり友好の証としてチンギス・ハン家と婚姻を結んだからである」(岡田、1996、p200)。加えて、彼の息子や孫たちも征服地で同様に多くの子孫を残した。モンゴル帝国の支配層は優遇され、高い地位にあったため、より多くの子供を持つことができた。結果として、チンギス・ハンの遺伝子が爆発的に広がり、学術的に見て現代で1,600万人以上に受け継がれている可能性がある」と推定される(真野、2019、)。

直近では日本でも著名なスポーツ選手がチンギス・ハンの末裔であるなど話題になったが、モンゴル帝国の領土であった地域のみならず、世界的にもその血統が脈々と幅広く継承されていると推測可能である。

### 第3節 男系男子を支えた女性の役割

本節では男系男子社会であるモンゴル帝国において、陰で男性を支えたと考えられる女性の役割と活躍について考察する。

#### 第1項 女性の地位

モンゴル帝国及びその継承国家において家系図に名を記されることのない女性であるが、関連資料を紐解くと女性の活躍は随所に登場する。E・D・フィリップスによると、家父長制の中で負担が大きく一夫多妻なのにも関わらず女性の地位は決して低いものではなかったと記されている。「生涯、衣食住で不自由しないためには、家族に属するほかはないが、一夫多妻のおかげでこれは楽だった。妾をとることはあったけれども、父親が同じなら、妻の子だろうが妾の子だろうが、嫡子、庶子の区別はなかった。妻同士の争いはあまりなかった。後継ぎの息子が、自分の母以外の父の妻を結婚抜きで引き継ぐ習慣は、中国人などを驚かしたけれども、これはアルタイ系の遊牧民には極めて普通だったことである。この習慣のおかげで未亡人とその子供たちは、奴隷にもされず、財産や家畜も盗まれずに助かったのである。戦争と狩猟以外のことでは、何かにつけて女は相談を受けたし、後にはハーンの未亡人は摂政になるようになった。モンゴルの女の忠実と貞節は、ほかの民族にも有名であった。」(フィリップス、1976、p29)。さらに、女性のなすべき仕事にはきりがなく、「家事は遊牧生活に必要なあらゆる仕事にわたり、牛車を御し、テントを組立て解体し、牛乳を搾り、バターをつくり、皮をなめして臄で作った糸で縫い合わせ、靴や靴下や多様な着物を縫い、テントや着物に使うフェルトを羊毛から作り、それからもちろん炊事と子供の世話をするのだった」(フィリップス、1976、p34)。

女性も乗馬や弓を射る練習をし、「毛皮・服・靴・脛当てや皮から作るあらゆる物の仕事をする。更にまた車を曳き、修理し、駱駝に荷を積み、どんな仕事においても極めて機敏で働き者である」(高田、2019)とあり、有事の時に戦う男性の陰で実質的な生活周りを支えていたのは主に女性であるという見方も可能である。



第1に政治的な補佐を担う役割である。チンギス統原理の下でも、男性後継者が未成年の場合、女性が摂政や後見人として政治に参画した。代表的な例がチンギス・ハンの4男トルイの妻であったソルカクタニ・ベキである。彼女は夫の死後、4人の息子(モンケ、クビライ、フレグ、アrikブケ)を養育し、将来の帝国を担う人材へと成長させた。彼女はただの母親ではなく、イスラム商人やキリスト教宣教師との関係を築き、国際的なネットワークを駆使して子の権威を高めた。結果として、長男モンケは大ハーンとなり、次男クビライは中国に元朝を建て、三男フレグはイルハン朝を開いた。

さらに、第3代皇帝のグユク・ハンの妻であったオグル・ガイミシュは、夫の死後に摂政として帝国政治を主導した。彼女の統治は短命に終わったものであるが、帝国全体の意思決定を女性が担った希少な例として注目される。これらの事例は、女性がチンギス統原理の男系男子社会の下でも、帝国運営の実質的担い手であったことを示している。

第2に政略結婚による領土拡大戦略においても女性の果たした役割は大きい。チンギス・ハンの子孫が西夏やホラズムの王族と結んだ婚姻は、軍事的支配を補完する政治的な連携となった。これらの政略結婚は戦闘を伴わずに相手を取り込む外交的手段であり、軍事的征服と同様の効果を発揮した。つまり、女性は-戦わずして勝つ-「血統の拡張」を担う存在であり、武力に依存せずに領土を拡大する戦略の担い手であったと指摘可能である。

第3に女性は文化や宗教をつなぐ媒介者としての役割である。彼女たちは自らの信仰や人脈を通じ、帝国が多宗教・多文化を包含する「ユーラシア的秩序」を築く上で重要な位置を占めていた。

トルイの妻ソルカクタニ・ベキは、ネストリウス派キリスト教を信仰していた。彼女はキリスト教徒だけでなく仏教徒・イスラム教徒の宗教者を庇護し、学問や宗教活動に積極的に支援を行ったと伝えられる(Broadbridge, 2018, ch.3)。

さらに、彼女は、息子であるモンケ、クビライ、フレグ、アrikブケに多宗教的な寛容姿勢を教育し、彼らが帝位を継いだ後の政策に影響を与えた。特にフレグのイルハン朝では、キリスト教徒や仏教徒への保護が強調されたが、これは母の宗教的背景に支えられていたと考えられる。

更に、夫の死後摂政として実権を握ったグユク・ハンの妻であったオグル・ガイミシュは、自身のオルド(宮廷)を拠点に、イスラム商人やキリスト教僧侶を庇護し、宗教的・文化的交流の場を提供した(Allsen, 2001, ch.4)。

オルドは単なる生活空間ではなく、文化的サロンや学問の拠点であり、女性がパトロンとして果たした役割は、帝国を「文化交流のハブ」とする基盤を支えた。

さらに、モンゴル王族の女性にはネストリウス派キリスト教を信仰する者が多く、彼女たちの婚姻は西アジアのキリスト教共同体との関係を強めた。イルハン朝の初期においては、王妃の影響によりキリスト教徒が宮廷に重用され、ヨーロッパ諸国との外交交渉にも積極的に関与した(ウェザーフォード, 2010, ch.6)。

これは「モンゴル＝イスラム世界征服者」という単純な図式を修正し、女性の信仰が多宗教共存を実現する媒介となったことを示しており、ひいてはモンゴル帝国の宗教に対する寛容性には女性の存在が大きく貢献した可能性があると考えられる。

このように、モンゴル帝国における女性たちは、宮廷を拠点に宗教者・学者を保護し、ネストリウス派や仏教・イスラムを媒介として文化的ネットワークを広げ、征服地統治を文化的側面から安定させた。モンゴル帝国は軍事力のみによって成り立ったのではなく、女性が媒介した宗教的・文化的寛容性によって支えられた「文化帝国」でもあったと指摘可能である。

このようにモンゴル帝国における女性の役割は、日常の生活基盤を支えることのみならず、時には摂政として政治を担い、婚姻を通して帝国を拡張し、文化・宗教の媒介者としてその支配を安定させるなど男系男子社会を支える、むしろ男性以上の働きを担い、「パックス・モンゴリカ」を支えた陰の主役であると考えられることも可能である。

## 第4節 現代への継承と共通性

以上の考察の通り、モンゴル帝国はチンギス・ハンの男系男子を基本とするチンギス統原理の下、血統主義による領土拡大、帝国の繁栄を築いてきた。さらに、そこには隠れた存在としての女性の活躍があったことが推察された。こうした血統主義と女性の役割は現代の社会や制度とも多くの共通性を持っている。

第1に男系男子による継承を原則とする制度は日本の天皇制に見られる他、血縁継承の考え方を組織まで広げると、現代の企業経営にも同様の運用がみられる。経営者の身内愛や執行を任せられる安心感、また意思疎通の容易さも継承の理由として推測される。またその一方で時には身内の中での抗争や対立による衰退も時代を異にしながらも同様に見られる現象である。

第2に女性の活躍である。現代は「男女平等」「ジェンダー社会」「共働き」社会であり、男女の差がなく活躍できる社会である。家庭における子供の教育、企業経営、人間関係のネットワーク作りなど男女差がなく行える時代であるが、男系中心であった以前より女性の活躍は顕著にあったものと考えられる。むしろ戦争、狩猟や有事の際に働く男性よりも生活基盤を支える主たる労働力は女性が担っていた事を考えると、陰で社会を支えていたのは女性であり、現在にも継承されている側面があるものと考えられる。

さらに、本考察により現代に至るまでのチンギス・ハンの遺伝子の影響力が膨大である旨が推測できた。西はヨーロッパから東は朝鮮半島までユーラシア大陸を広く支配したモンゴル帝国の旧領土のみならず、一説によると日本など更に広範囲への影響もあるとする説も存在する。いずれにしてもこの血統は時代を超えて現代社会に影響を残し続けていると指摘可能である。

## 第5節 結論

以上の通り、チンギス・カンの血統継承と領土拡大、及びそれを支えた女性の役割と活躍という観点で論じてきた。モンゴル帝国の歴史を「男系男子の血統支配」と「女性の補完的役割」の両面で捉えることにより、その繁栄と持続の要因をより多面的に把握ができたと考えられる。

さらに、本論文の共通テーマである「パックス・モンゴリカ」時代の文化交流において、宗教に対する寛容性や日常生活の基盤作りを担ったと思われる女性の果たした役割は極めて大きいものと推察可能である。

本節では、モンゴル帝国における血統主義の構造と、女性が果たした実質的な政治的・文化的役割を明らかにした。女性は単なる補助的存在ではなく、帝国の安定と継承の中核を担う存在であった。血統主義と女性の役割に加えて、帝国の拡大を可能にしたのはチンギス・ハン個人の卓越したリーダーシップである。次章では、ホラズム遠征を事例に、チンギス・ハンの意思決定における感情と戦略の統合メカニズムを分析する。

## 第5章 チンギス・ハンの戦略的意思決定に学ぶ感情の転換 ーホラズム遠征における「情動」と「戦略」の統合メカニズムー

### 第1節 問題意識と研究の目的

#### 第1項 現代組織における合理性と情動の衝突

現代の組織はグローバル競争の激化、技術革新の加速、そして予測不可能な状況という「答えのない時代」「従来の成功体験のやり方だけでは通用しない時代」に直面しており、持続的な成長のためには、組織変革とイノベーションの推進が不可欠である。

この変革の過程において、組織は常に相反する原理の根深い衝突に直面している。一つは、成果主義やAI導入による業務の効率化という「合理性」である。これは、客観的なデータ、能力主義に基づく有能な人材の登用、成果主義に基づく効率的な人事評価、そして論理的な意思決定を追求し、組織の存続と発展を目指す機能的な側面である。他方で、もう一つは、「情動(非合理的な感情)」である。組織は「感情をもつ生身の人間」によって構成されており、血縁、既存の権威への固執、集団間の嫉妬、あるいは過去の成功体験に基づく判断という、情動的な抵抗により、一見すると非合理的な動機によって決定される側面である。

理論上、合理的な組織運営が最善の成果をもたらすことは明らかであるにもかかわらず、多くの組織において、この「感情」という非合理的な要因こそが、組織変革とイノベーションを阻害する最も根深い要因となっている。こうした組織の課題は、単なる個人の問題に留まらず、人間が持つ感情と、それらをどう扱うかという「感情知性(EI)」の問題に深く関わっていることを示唆している。

#### 第2項 チンギス・ハンの合理的組織運営

本稿は、この「合理性」と「感情」の二重性を、歴史上の偉大なリーダーであるチンギス・ハンの行動原理に求め、その解決の糸口を「感情知性(EI)」の観点から探ることを目的とした。

歴史上、アジアからヨーロッパにまたがる巨大なモンゴル帝国を創設し、世界史の転換点を作った指導者チンギス・ハンには、しばしば冷徹な軍事指導者として語られるが、その真の偉大さは、極

めて徹底した「合理的組織運営」を、当時の血縁・氏族社会の価値観から切り離して構築した点にあります。(杉山、1996, p.42,43)彼のこの合理性の原点は、過酷な幼少期の経験、すなわち父の死後の氏族による裏切りと追放にあると考察される。この経験は、彼に血縁や属人的な愛情、旧来の権威が、個人の生存や集団の繁栄に対して極めて脆弱で非合理的であるという深い洞察を与えた。

これらの原体験を起点に、チンギス・ハンは、感情や伝統的権威から距離を置いた能力主義を組織の核心に据えた。その具体的な合理性は、以下の組織運営の事実によく表れている。

多民族・多宗教の有能な人材登用：彼は、支配下の民族や宗教を問わず、有能な者を積極的に枢機顧問官や千戸長(せんこちょう)などの要職に登用しました。これは、「誰であるか(情動・血縁)」ではなく、「何ができるか(合理性・能力)」のみを評価基準とする姿勢であり、現代組織の能力主義や多様性の概念を先取りしています。例えば、耶律楚材(やりつそざい)のような異民族の優秀な人材を信頼し、国家運営の中枢に配置することはその典型です。

イノベーションの重視とジャムチ(駅伝制)の導入：広大な帝国を効率的に統治・維持するために、彼は情報伝達の迅速化を実現する駅伝制(ジャムチ)を整備しました。これは、情報という「リソース」を「効率性」という合理的な目的のために徹底的に管理・活用するという、極めて現代的な組織運営の発想に基づいています。(Dモーガン、1986, p.91-100)

このように、チンギス・ハンは、組織の基盤を感情や権威といった非合理的な要素から意図的に切り離し、帝国の生存と拡大という目的のために能力と効率性を最優先するという、徹底した「合理的組織運営」を構築しました。この事実は、彼が単なる軍事リーダーではなく、極めて高度な「感情知性(EI)」を内包したセルフマネジメント能力を持つリーダーであったことを示唆しています。また、モンゴル帝国の組織体制は、法制に基づき、軍事と統治を分離しない連合国家構造であったとする指摘もあります。

### 第3項 研究の目的と分析の焦点

チンギス・ハンの行動を突き動かした内面的な「動機」、すなわち、合理的な戦略の背後にある感情的なエネルギーの源泉、あるいは、その感情を統制し、戦略へと転換させたリーダーとしての「在り方」について深く掘り下げることにあります。具体的には、ホラズム遠征という重大な決断における「復讐心という情動」と「地政学的な戦略という合理性」の二重性を史実に基づき対比した。加えて、この二重性を統合するプロセスを、現代リーダーシップ論の核である「オーセンティックリーダーシップ」の視点、とりわけ「自己認識力」と「セルフマネジメント力」という「感情知性(EI)」の極致として捉え直す点にあります。これにより、チンギス・ハンのリーダーシップを、単なる歴史上の成功例ではなく、「生身の人間」が不確実な時代を切り開くためにいかに自身の「感情」を「合理的なエネルギー」へと昇華させうるかを示す、現代組織論への示唆に富んだケースとして位置づける(ハーバード・ビジネス・レビュー編集部、2014, p.10)。

## 第2節 チンギス・ハンの合理的組織形成とリーダーシップ

### 第1項 血縁・権威主義の克服と価値観の形成

チンギス・ハンのリーダーシップの根幹にある徹底した合理性は、彼の過酷な「ライフストーリー」にその原点を求めることができます。幼少期に父イエスゲイが毒殺された後、一族であるタイチウート氏に裏切られ、母や弟たちと共に追放された経験は、モンゴル社会における伝統的な血縁や氏族の論理が、個人の生存や正義に対してどれほど無力で非合理的であるかを彼に痛感させた(Dモーガン, 1986, p.46-47)。この経験を通じて、彼は血縁や属人的な愛情、旧来の権威という感情的な絆に依存する社会構造を根本から否定し、「血縁・氏族の枠を超えた能力主義」を自身と組織の行動原理として確立するに至りました(杉山, 1996, p.68-72)。(この解釈の枠組みは、ライフストーリーがリーダーの在り方に決定的な影響を与えるというオーセンティックリーダーシップの概念に依拠する)(ハーバード・ビジネス・レビュー編集部, 2014, p.10)

この実体験は、チンギス・ハン自身の「価値観形成」に決定的な影響を与えた。彼にとっての核心的な価値観は「実力」と「忠誠心」であり、これは裏切りによって形成された「権威や感情を切り離れた、目的達成を最優先するリーダーとしての在り方(オーセンティシティ)」の基盤となった。すなわち、彼は自身の内発的動機の源泉である、個人的な復讐心や悲しみという感情を、モンゴルを統一し二度と裏切られない強固な社会を築くという公的な大義へと昇華させることで見出したのである。この感情を超越したかのような合理性こそが、後の広大な帝国の組織運営を可能にした、彼のオーセンティックなリーダーシップの原点と指摘可能である。

### 第2項 組織の合理的構造と公平性

チンギス・ハンが構築した組織の合理的構造は、まさにこの能力と忠誠心に基づく「公平さ」を具現化したものであった。彼は、征服した多種多様な民族・宗教の背景を持つ有能な人材を積極的に枢機顧問官や中央集権的な機構の要職に登用した。この人材登用の基準は、「誰の血筋か」や「どの宗教を信仰しているか」という非合理的な属性ではなく、「何ができるか」、すなわち能力と実務能力のみに依存していた。

彼は全モンゴル人を「千戸制(せんこせい)」という軍事・行政組織に組み込み、各千戸長を忠誠心に基づいて選任した。このシステムは、特定の血縁集団や権威に依存しない、「公平さ」に基づく組織像を確立した。(杉山, 1996, p.42-45)こうした制度化された公平性は、構成員が「自分の能力や意見が正当に評価され、組織の目的に資する行動が報われる」という「信頼」を基盤としており、(Dモーガン, 1986, p.20)結果として広大な領域を支配する上での統治の「安定性」をもたらした。この信頼こそが、後の驚異的な統治の求心力となったのである。

### 第3項 イノベーションの重視

広大なユーラシア大陸を支配する上で、チンギス・ハンは徹底した合理性とイノベーションを組織の基盤とした。その最も顕著な例が、駅伝制(ジャムチ)の導入である。ジャムチは、広大な帝国

全土における情報と命令の伝達を迅速化・標準化するための、極めて合理的かつ革新的なインフラシステムであった(杉山, 1996, p.66-68)。

このイノベーションは、情報というリソースの「効率性」と「正確性」を最大化するという発想に基づいている。さらに、軍事面においても、軽装化された騎馬部隊による驚異的な機動力を追求し、組織を「迅速な意思決定と実行」が可能な形に再構築した。これらの事実は、彼が単なる戦闘の天才であるだけでなく、組織全体のパフォーマンスを最大化するために非情なまでに合理的な構造改革を断行し続けた、革新者としてのリーダーシップを持っていたことを示している。

### 第3節 ホラズム遠征における合理的動機と情動的動機の対比

#### 第1項 オトラル事件と感情的動機

1218年に発生したオトラル事件は、チンギス・ハンの「合理的リーダーシップ」が、「感情」という非合理的な力によって突き動かされた転換点として位置づけられる。チンギス・ハンは、西方交易路の確保という合理的な戦略に基づき、ホラズム・シャー朝に対し、平和的な通商関係の樹立と交易ネットワークの拡大という合理的目的を持った隊商を派遣した。

しかしながら、このモンゴル商隊がホラズム領のオトラルで略奪と虐殺に遭い、さらにホラズムのムハンマド二世がモンゴル側の使節団に最も侮辱的な行為に出た。この一連の出来事は、チンギス・ハンにとって、単なる経済的損失を超えた、モンゴル帝国とその指導者に対する「公的な侮辱」となった。遊牧民社会において、使節団の殺害や身体的な侮辱は、権威に対する直接的な挑戦であり、復讐を要求する強烈な情動的なトリガーとなった。特に、幼少期に裏切りによって地位を失った過去を持つチンギス・ハンにとって、この侮辱は、自らのリーダーとしての「在り方」と帝国の存続を賭けた問題へと直結した。この復讐心という激しい情動が、彼を西征へと駆り立てる強烈なエネルギー源となったことは疑いようがない。(Dモーガン, 1986, p.58-59)

#### 第2項 戦略的・経済的必要性

一方、ホラズム遠征は、この情動的な動機よりも先行して存在しており、戦略的、そして経済的な「合理的必要性」に基づいている。(杉山, 1996, p.50)

中央アジアを掌握するホラズムは、東西交易路の促進を希望していた。モンゴル帝国の経済基盤を確立するための戦略的な合理性に他ならない。(Dモーガン, 1986, p.58)

大規模な遠征は、貴族や功臣への領土(分封)分配と、兵士への戦利品の供給を可能にする。ホラズム征服は、モンゴル帝国内部の情動的な対立や嫉妬を緩和し、チンギス・ハンへの求心力を維持するための、極めて計算された組織マネジメントの側面ではないか。

### 第3項 情動と戦略の二重性

モンゴル・ホラズム両国の対立が深まっていた1218年にモンゴル帝国から派遣された使節団と謁見し、「両国の友好を望み、自分の子のように見なしたい」というチンギスからの申し出を受け取った(ドーソン,1968,p174-175)。アラーウッディーンは使節の一人であるマフムードにモンゴル帝国の兵力について尋ねたとき、アラーウッディーンに怒気を帯びていることに気付いたマフムードはモンゴルの兵力はホラズム・シャー朝に比べて弱いものだと言え、平静を取り戻したアラーウッディーンは友好的な回答を与えて使節を送り返したと伝えられている(ドーソン,1968,p175-176)。同年、モンゴルが派遣した使節団と隊商がオトラルの町で総督イナルチュクに殺害され、財貨が略奪される事件が起きた。モンゴル帝国のホラズム・シャー朝遠征の原因を使節団の虐殺に対する報復とすることが従来定説とされているが、先述したようにメルキト部・ナイマン部残党の動向を巡って両国は1217年から既に軍を動かしており、「オトラル事件」はモンゴル側にとってホラズム侵攻の正当化の方弁に過ぎないと指摘されている(杉山,2010,p,57-60)。

そもそも中央アジア遠征の補給基地たるチンカイ・バルガスンが1212年に建設されているように、ホラズム・シャー朝の攻撃は前もって計画されたものであり、使節団は遠征の前に派遣された偵察隊の役割を担っていたと推定する見解が現れており(小林,1960,p146-147)モンゴルの中央アジア遠征の動機として、王侯貴族への新たな牧地の授与、従属民への戦利品の分配による社会的矛盾の緩和が挙げられている(多摩大,2023,p,16)。

チンギス・ハンの「自己認識」と「セルフマネジメント」というオーセンティックリーダーシップの視点から分析することとした。

本節では、チンギス・ハンのホラズム遠征を通じて、リーダーシップにおける感情知性(EI)の重要性を論じた。復讐心という強い情動を戦略的エネルギーに転換する能力が、帝国拡大の原動力となったことを示した。これまでの章では、精神文化、統治システム、血統と女性、リーダーシップという帝国の基盤を論じてきた。ここからは、パックス・モンゴリカ期における具体的な文化交流の諸相に目を転じる。次章では、音楽文化の役割と交流について考察する。

## 第4節 オーセンティックリーダーシップの観点による 情動の転換

### 第1項 オーセンティックリーダーシップの定義と適用枠組み

本章の分析枠組みである「オーセンティックリーダーシップ」とは、「自己の価値観、信念、倫理観に基づいて行動する真のリーダーシップのあり方」を指します(ハーバード・ビジネス・レビュー編集部,2014)。その中核は、自己認識、セルフマネジメント、バランスの取れた情報処理、関係性の透明性という要素から成り立っている。本論文では、特にチンギス・ハンの「自己認識力」と「セルフマネジメント力」が、彼の「在り方」にどのように作用したかを分析する際の枠組みとして、この概念を適用した。

## 第2項 情動の認識とマネジメント

使節たる人物は不可侵の存在であり(Dモーガン,1986,p,59)復讐心が生まれて当然の場面だが、チンギス・ハンが感情的な報復に走ることなく、綿密な戦略のもとに遂行した事実は、彼が極めて高度な感情知性(EI)を有していたことを示しています。EIは、自己の感情を認識し、それを管理する能力(ゴールマン, 1996, p.50)であり、戦略的意思決定の鍵となります。まず、自己認識力の観点から見ると、チンギス・ハンには、裏切りという実体験によって形成された自身の「脆さ」と「怒り」のパターンを深く認識していたと推測される(ハーバード・ビジネス・レビュー編集部, 2017, p.15)。彼はその「復讐心というネガティブな情動」を否定したり抑圧したりするのではなく、「自分を突き動かす強烈なエネルギー」として認識した。

次に、この認識された情動をセルフマネジメント力によって意識的に「利用」した点に、彼のリーダーシップの特異性がある。彼は、私的な感情をそのまま暴走させることを避け、「帝国の生存と拡大」という公的な目的に向けて感情のベクトルを変換した。具体的には、「復讐」を「遊牧民の尊厳を守る」「ホラズムという脅威を排除する」という大義名分へと昇華させたのである。このプロセスこそ、感情を単に抑制するのではなく、組織の成果のために意識的に「活用」する、セルフマネジメントの究極の例である。

## 第3項 メタ認知による情動の活用

チンギス・ハンが感情の転換は、自身の感情や思考パターンを客観視する「メタ認知」の能力なしには成立し得ない。彼は、激しい怒りという自己状態を認識しつつも、同時に、その怒りを「戦略実行のエンジン」として俯瞰的に捉えることができた。このメタ認知の作用によって、情動は非合理的な行動を導くのではなく、戦略的合理性を推進するためのエンジンへと昇華されたのである。

これは、自己の「脆さ」や「ネガティブな感情」を受け入れ、さらにそれを他者を動かすための合理的な利益にしたと解釈可能である(ブラウン, 2012)。彼は感情を「手放す」のではなく、その強大なエネルギーを「活用する」という、より戦略的な選択をした。

この「活用」の選択によりオトラル事件の残虐な復讐は、単なる感情の発散ではなく、「チンギス・ハンに敵対すれば徹底的に殲滅される」という「恐怖」をユーラシア全域に広めるための冷徹な心理戦略として機能した。彼自身の激しい復讐心が、客観的な戦略として利用された瞬間であり、感情知性(EI)を戦略に組み込んだ究極の例だと指摘可能である。

チンギス・ハンが示したホラズム遠征の二重性は、「合理的な組織運営者であっても、非合理的な情動が行動の起動力として機能する」という普遍的なリーダーシップの真実を提示した。

彼のリーダーシップは、自身の情動(復讐心)を、帝国のパーパス(モンゴル帝国の拡大・安定)や、価値観(能力・公平性)に基づいて統合し、内発的動機へと変換した点に独自性がある。彼にとってのオーセンティックリーダーシップとは、私的な情動を公的な合理性に奉仕させるためのセルフマネジメントの技術であったと言えるであろう。

この在り方は、現代のリーダーが、市場の不確実性や組織内の対立に直面した際に、自身の「恐れ」や「不安」という感情を組織の「未来」や「進化」という『合理的性』で推進するための指針とな

りうる。チンギス・ハンは、感情を切り離したのではなく、感情の力を最も合理的に利用するという、自身の中心軸となる価値観を基盤とした「リーダーシップの在り方」を体現している。

## 第5節 現代組織の課題への示唆

### 第1項 研究の要約

本研究は、チンギス・ハンのホラズム遠征を事例として、リーダーシップにおける「合理性(戦略的必要性)」と「情動(復讐心)」の二重性を分析した。チンギス・ハンは、個人の激しい情動を、自己認識力とセルフマネジメント力という感情知性(EI)によって統制し、「帝国の生存と拡大」という公的な戦略を推進するための「強烈なエネルギー」へと意図的に転換させた。この情動の統合と活用のプロセスこそが、彼の「セルフマネジメントされたオーセンティックリーダーシップ」の核心であったと総括した。

### 第2項 現代組織への示唆

現代組織における「合理性」と「情動」の衝突、つまり、戦略的な合理性が「生身の人間が持つ感情」(嫉妬、不安、権威への固執)によって阻害される現象の根源は、組織構造や個人の能力以前に、リーダー自身の「感情知性(EI)」の欠如によるものであると指摘した。

チンギス・ハンが示した洞察は、リーダーシップにおける感情の「活用」の重要性である。リーダーは、自身の自己認識力とセルフマネジメント力を磨き、個人の感情を、組織の「ビジョン」や「合理的な目標達成」に向けることが、不確実な時代における課題解決に不可欠である。この「感情知性(EI)」を持つリーダーこそが、組織内における情動的な障壁を取り払い、信頼と共感に基づいた成果を上げるチームを築くことが可能である(荻野, 2020)。

### 第3項 構造的課題と今後の展望

組織変革の最終的な成功は、個人の努力を超え、上位者の情動や主観的な価値観に基づく評価システムに依存するという構造的な課題が存在した。この課題の克服には、リーダーが自身の価値観とパーパスに基づく一貫した行動原理を確立し、組織全体に「合理性」と「公平性」の基盤を提供することが求められる。

感情を戦略的エネルギーに変え、合理的リーダーシップを構造的な課題の中でいかに定着させるか、さらに、リーダーの自己認識が組織の公平性に与える影響を定量的に示すなど、感情知性を組織変革の動力源とするための具体的なメカニズムを追及していきたいと考える。

感情を戦略的エネルギーに変え、合理的リーダーシップを構造的な課題の中でいかに定着させるか、さらに、リーダーの自己認識が組織の公平性に与える影響を定量的に示すなど、感情知性を組織変革の動力源とするための具体的なメカニズムを追及していきたいと考える。

## 第6章 モンゴル帝国における伝統音楽の役割

### 第1節 はじめに

私生活の趣味で、音楽活動というものに取り組んでいる。作曲を行ったり、邦ロックやHIPHOPというジャンルの曲を聴いたりすることが多く、その中でも日本の歌詞や音楽の雰囲気を感じること、歌詞は「心情」音楽の雰囲気や特徴は「決まったコードから心理状況などを表現した状態の雰囲気」などを核にしてそこから広げていくというイメージを強く持っている。しかしながら、モンゴルや中国の伝統音楽について調べてみると、日本とはまったく異なる目的や方法で音楽が使われていることに気づき、そこに興味を持った。

モンゴル帝国は幅広く文化交流が進み、こうした交流の中で、音楽の形や役割がどのように変化したのか、また現代では、モンゴル・中国ともに伝統音楽の継承が行われているが、観光向けの演奏やアレンジが増え、本来の使われ方が見えにくいという指摘もある。そのため、歴史の中で音楽がどのように扱われてきたのかを理解することは、現代の継承を考える上で重要だと考えられる。

本章では、モンゴル・中国・日本の音楽を比較し、それぞれの社会における音楽の位置づけや歴史的な文化交流、そして現代への継承について考察する。

### 第2節 モンゴル帝国の音楽文化

モンゴルの音楽は、遊牧という生活様式と深く関係がある。広大な草原での放牧や移動の中で、音楽は人々の心を支え、自然とのつながりを感じる手段として存在してきた。

代表的な楽器として、馬頭琴は馬のいななきや風の音を思わせる(大塚, 1967)。ホーミーはひとりの歌い手が二つの音を同時に響かせる独特の歌唱法で、自然界の音と共鳴するように生まれた表現とされている。長唄(ウルティン・ドー)は、広がる草原を想起させる、ゆったりとした旋律で、時間の流れそのものを音楽にしたような特徴をもつ。さらに、モンゴルの気候は変化が激しく常に持ち運びができるような楽器を造っていた。

さらに、モンゴルでは音楽が宗教的な意味も担っていた。シャーマニズムの儀礼では、太鼓や歌を通して霊と交信し、自然や祖先とつながる儀式が行われていた。さらに、口承文化の中で語り継がれてきた叙事詩『ジャンガル』などでは、語りと音楽が一体化し、英雄の物語と民族の記憶を伝える重要な役割を果たしている。

### 第3節 中国の伝統音楽文化

中国の伝統音楽は、古代から体系的な理論をもって発展してきた。五音(宮・商・角・徴・羽)という音階構造は、陰陽五行の思想と結びつき、音楽を通して宇宙や社会の調和を表そうとする考え方であった(田中, 2008)。

中国では、古代から宮廷音楽と民間音楽が分化しており、前者は国家儀礼や宗教行事に使われ、後者は庶民の祭りや娯楽の中で発展してきた。

代表的な楽器には、古琴、笛子、二胡、鼓などがある。古琴は静謐な響きで精神修養のために演奏され、二胡や笛子は情緒豊かな旋律で人々の感情を表現した(川原, 2017)。

さらに、「礼楽思想」と呼ばれる儒教の理念の中では、音楽は人を善に導き、社会秩序を保つための道徳的な手段とみなされた。中国の音楽は単なる芸術ではなく、世界の秩序そのものを象徴するものだった。

## 第4節 モンゴルと中国の音楽思想と社会的役割の比較

モンゴルと中国の音楽には、表現の目的や価値観の違いだけでなく、社会の中で果たしてきた役割にも大きな差がある。

まず、モンゴルの音楽は「自然との共鳴」と「精神性」を重視している。

モンゴルでは、歌や楽器の演奏は単なる娯楽ではなく、自然の力と心を通わせる行為だった。ホーミーのように自然界の音を模倣する歌唱法は、人と自然、そして霊との結びつきを感じるための手段であった。さらに、音楽は遊牧生活の中で孤独を和らげ、広大な草原の中で生きる人々の心の支えにもなっていた。

加えて、婚礼や出産、葬送など、人生の節目に必ず歌や演奏があり、音楽が共同体の絆を強める役割を果たしていた。

一方、中国の音楽は、「秩序」や「調和」を社会に保つためのものと考えられてきた。

思想の中では、音楽は人の心を整え、徳を育てるための手段とされた。

つまり、音楽は人々の感情を和らげ、国家の安定にも寄与するものとされたのである。

中国では、国家の威厳を示すために音楽が用いられ、朝廷の祭祀や外交儀礼などでは厳格な形式の演奏が行われた。さらに、地方では農作業や祭りの中で民間音楽が発展し、人々の娯楽や共同体意識を支える役割も果たしていた。

このように、モンゴルでは音楽が自然や霊的世界と人を結ぶ「内面的・精神的役割」を担っていたのに対し、中国では社会秩序や道徳を維持する「外的・制度的役割」を持っていたと考えられる。

どちらの文化においても、音楽は単なる芸術ではなく、人々の生き方や価値観を映す社会的機能をもっていた。

## 第5節 文化交流

13世紀にモンゴル帝国がユーラシアを統一すると、東西の文化はこれまでにないほど交流するようになった。元朝の宮廷では、中国、中央アジア、ペルシア、アラブなど、さまざまな地域の音楽家が集まり、多文化的な宮廷音楽が生まれた。

この時代、宮廷には「教坊」と呼ばれる音楽院が設けられ、音楽や舞踊の教育が行われた。琵琶や二胡という弦楽器の技術もこの時期に大きく発展し、馬頭琴やウト(アラブのリュート)などの楽器が互いに影響し合ったと考えられている。

こうした文化交流の結果、中国の宮廷音楽には遊牧民的な要素が取り入れられ、逆にモンゴルの音楽にも定型的な旋律や理論性が加わった。音楽は、征服や支配の中でも、人と文化を結びつける媒介として働いていた。

## 第6節 現代への継承

現代において、モンゴルと中国の伝統音楽はそれぞれの国で保護と継承の努力が続けられている。

モンゴルでは、ホーミーや馬頭琴の文化がユネスコの無形文化遺産に登録され、国内外で高い評価を受けている(島村, 2021)。一方、中国でも国家主導で伝統音楽の保存・研究が進められ、「非物質文化遺産保護法」が整備された。

ただし、どちらの国でも、伝統音楽が観光や商業の要素として扱われる一方で、その本質的な精神性や生活文化との結びつきが薄れてきているという課題もある。

若い世代の中には、伝統音楽をポップスやロックと融合させる動きもあり、新しい形での継承が模索されている。

## 第7節 結論

本研究を通して以下のことが明らかになった。

- ・音楽文化は生活様式と思想に深く根ざして発展してきた

モンゴルでは遊牧生活とシャーマニズムにより、自然や儀礼と結びついた音楽が育まれた。一方、中国では農耕社会と儒教思想を背景に、音階理論や宮廷制度を備えた体系的な音楽文化が形成された。

- ・音楽は社会の中で固有の役割を果たしてきた

モンゴルでは共同体の結束や精神的支えとして、中国では儀礼や統治との関連が強い役割として用いられてきた。どちらも単なる娯楽ではなく、社会と人々の暮らしを支える機能を持っていた。

- ・13世紀のモンゴル帝国期には音楽が文化交流の一端を担った

元朝の宮廷では多様な地域の音楽家が活動し、楽器や演奏技法の交流が確認されている。これにより、宮廷音楽に多文化的な特徴が見られるようになった。

- ・現代は伝統音楽の継承にとって転換期である

無形文化遺産登録や法制度により保存が進んでいる一方、演奏の場が観光・商業目的へと変化し、生活文化との結びつきが希薄化する課題が指摘されている。

## 第7章 モンゴル帝国を支えた食文化

### 第1節 はじめに

1206年にチンギス・ハンが建国したモンゴル帝国は、史上最大級の領土を支配し、東西文明の接点として大きな役割を果たした。移動式の遊牧生活を行っていたモンゴル人は、定住せずに草原を巡りながら征服と交易を繰り返し、その過程でさまざまな文化や技術を取り入れたとされる。彼らが長距離の移動や過酷な戦争を行うことができた背景には、「食」が存在した。食文化は単に栄養補給の手段ではなく、兵站・信仰・生活哲学・外交・戦略など帝国を支える基盤として機能していたと考えられる。特にモンゴル帝国では、肉を中心とした「赤い食べ物」と、乳製品を中心とした「白い食べ物」が食文化の中心を成し、季節や軍事状況に応じて使い分けられていた。本論では、狩猟と調理・農耕と兵糧・乳製品と保存技術・飲み物・ペストとの関係という五つの観点からモンゴル帝国の食文化を整理し、その特徴を分析する。さらに、モンゴルの食が帝国の拡張や戦争といかに関わったのかを考察し、食と国家の関係を明らかにする。

### 第2節 遊牧と食—狩猟・調理の工夫

モンゴル帝国の食文化の中心には、遊牧民としての生存戦略があった。彼らは草原を移動しながら生活を営んだため、定住社会のような農耕や都市的な食文化を持たず、家畜と狩猟を軸とした実用的かつ機動性の高い食事を形成していた。基本的には羊が主食の肉として最も多く消費され、牛がそれに続いた。馬は「戦いや移動を支える大切な労働力」であったため、日常的には屠らず、婚礼や大宴会などの非日常的な儀礼の時だけ食されることが多かったとされる(国立民族学博物館)。家畜との距離感は、「食料としての価値」とともに「社会的役割」によって順位づけされていたのである。

食べ方の特徴としては、焼く方法が約八割、煮る方法が約二割であったとされている。これは、鍋などの調理器具がまだ十分に普及しておらず、また遊牧生活の特性として「素早く調理でき、運搬の負担が少ない」方法が好まれたためである。直火によって羊や鹿をそのまま焼く方法は、調理器具を必要としない点で効率的であり、遊牧民にとって実践的であったと推測される。ただし、煮る料理にも一定の需要は存在しており、長距離の移動後に体力を回復するための滋養食として、肉を煮込む文化もあった。火力は草原の乾燥した薪や牛糞が使われ、家畜の排泄物を燃料として再利用するという、環境に適応した知恵も観察される。

モンゴル人は半猟半牧の生活を行っていたため、狩猟は重要な食料獲得手段であった。獲物としてはウサギ、鹿、猪、タルバガ(シベリアマーモット)、ガゼルなどが挙げられる。狩猟は食料確保の手段であると同時に、軍事訓練としての性格も持っていた。獲物を追跡する力、弓を正確に放つ技術、馬を自在に操る能力などは、戦場においても直接役立つものであった。したがって、狩猟は単なる生活行為ではなく、軍事的機能を兼ねた「日常的な訓練」としての側面を持っていたと考えられる。

代表的な料理として、チンギス・ハンが好んだとされる羊の腿焼きが挙げられる。史料によれば、戦争中にも兵士の士気を高めるために、料理人たちは素早く肉を調理し腿の部分だけを提供したという。丸焼きは時間を必要とするが、腿のみを扱うことで調理時間を短縮でき、味も濃厚である。ここには「最小労力で最大の栄養を得る」という遊牧的合理性が観察される。さらに、肉を部位ごとに分ける概念が存在したことから、単純な焼き方であっても食文化の体系化が行われていたことがうかがえる。

興味深い点として、モンゴル帝国には料理人制度が存在した可能性がある。宮廷や軍隊では、食糧を管理する役割を担った者たちがおり、これを「オールド(王の幕営・行政機関)」と呼ぶ史料も存在する。大規模な軍事行動では食糧管理が兵站として機能し、肉の保存方法や調理工程に関して一定の規則が存在したと考えられる。食文化は組織的な戦略の一部として位置づけられており、単なる日常生活の側面ではなく、軍事制度とも密接に関わっていた。

さらに、宴会文化にも注目すべき点がある。モンゴル帝国では宴会は政治交渉・外交・儀礼の場であり、食事は社会秩序を確認する行為でもあった。羊や馬を食すかどうかは、社会的な立場や儀礼の重要度によって左右され、食事は「身分」や「生産力」と結びつく象徴的な意味を帯びていた。食を通じて集団の結束が高められ、戦士たちの士気を向上させる効果も期待されたと推測される。

以上のように、遊牧民の食は単に生理的欲求を満たすものではなく、軍事・経済・社会を支える実践的システムであったことが理解される。狩猟と調理の合理性、家畜との関係性、宴会を中心とする儀礼性は、遊牧という生活様式を超えてモンゴル帝国の拡張を支える基盤となっていたのである。

### 第3節 草原の農耕文化と兵糧

粟の栄養価については、現代の栄養学的知見に基づく推定ではあるが、100グラムあたり350～360キロカロリーのエネルギー量を持つとされている(農学・栄養学の一般的な数値に基づく)。この数値は直接的な史料に基づくものではないため、本論では参考程度に留めるが、少なくとも肉中心の食生活だけでは補いきれない栄養素を、穀物によって補完していた可能性は高い。

したがって、遊牧生活を支えるのは肉と乳製品だけではなく、農耕による炭水化物供給との「二層構造」こそが、食料体系の基盤になっていたとも考えられる。この視点は、モンゴル帝国が長距離遠征を可能にした理由を理解するうえで重要である。

### 第4節 乳製品と保存の知恵

乳製品の中でも特に重要な役割を担ったのが、馬乳酒(アイラグ)である。馬乳を発酵させた微アルコール飲料であり、乳糖発酵によって自然に生成されることから、遊牧民の日常的な栄養補給として機能した。馬乳酒は子供から高齢者まで幅広く飲まれ、夏季に不足しがちな水分・ビタミン類を補う重要な食品となっていた。遊牧民の多くは、馬乳酒を「飲み物」というよりも、「夏季の主的存在」と捉えていた可能性もある。さらに、馬乳酒は社交や儀礼の場でも提供され、来客に振る舞う

ことが礼儀であったという記録も存在している。乳製品は栄養源であると同時に、社会的な秩序を保つ役割すら持っていたと考えられる。

さらに、馬乳酒を蒸留して作るアルヒ(アルコール飲料)も知られているが、こちらは低濃度の馬乳酒とは異なり、より強い酒として儀礼や宴会に用いられた。近年では穀物を原料とした蒸留酒が主流となっているものであるが、モンゴル帝国の時代には乳製品の加工技術が中心であり、乳文化が精神的・文化的価値を持っていたことがうかがえる。馬乳酒はしばしば「白い食べ物の象徴」として扱われ、肉の料理である「赤い食べ物」と並ぶ食文化の二本柱となっていた。

乳製品の加工法には多くの種類が存在した。例えばヨーグルトや凝乳、バター、チーズなどの発酵食品があり、それらは余剰となった乳を保存する手段として活用された。特に重要であったのは、乳製品の保存性を高めた固形乾燥乳「アーロール(干しヨーグルト)」である。アーロールは噛みしめながら食べるほど硬質であり、長距離移動の際にも携帯できる保存食として機能していた。乾燥した乳製品は非常に長い保存期間を持ち、軍隊の遠征において兵糧の一つとして利用された可能性がある。肉と乳を加工・保存しながら食料体系を維持した点に、遊牧民の生活の合理性と環境適応力が観察される。

保存技術の面では、モンゴル帝国の人々は草原の自然環境を活用し、“天然冷蔵庫”として屋外の寒気を用いた肉の凍結保存を行っていた。秋になると羊や牛を屠り、冬季の自然な低温によって肉を凍結させて保存した。凍結した肉は、そのままでは食べられないため、少量ずつ湯で茹でて食べる方法が用いられていたとされる。春になると保存が難しくなるため、残った肉は干し肉(ボルツ)として加工され、長期保存に適した形に変換されていた。肉と乳という主要食材は、保存技術によって一年を通して利用しやすくなり、これは遊牧社会の安定した食生活を支える基盤となっていた。

以上の点を踏まえると、モンゴル帝国の乳製品文化は単なる食料保存の技術ではなく、季節変化への適応・兵站システムの補完・社会的象徴性の形成という複数の役割を担った複合的な文化であったことが理解される。乳製品は単に栄養源として機能しただけでなく、遊牧民が異なる環境に適応し、集団としての秩序を保ち、帝国の拡大を支える「食の戦略」でもあったと考えられる

## 第5節 食と黒死病—食文化がもたらした影とリスク

この感染拡大の背景には、食文化と交易・移動を基盤とする社会構造が存在していたことが挙げられる。モンゴル帝国では、征服後に商業ルートを整備し、草原と都市を結ぶ交易が盛んに行われた。東西交易の活発な移動は、経済的繁栄をもたらす一方で、人間・家畜・物資による感染の拡散経路にもなっていた。特に毛皮商人はマーモットなどの小動物を扱った可能性が高く、交易を通じてペスト菌を保有する動物が各地へ運ばれた可能性がある。

ペストとの関係を語るうえで、カップア包囲戦(1346年)は避けて通れない。キプチャク・ハン国(モンゴル系国家)とジェノヴァ商人勢力の戦いで、包囲中にモンゴル軍の陣営でペストが発生したという記録が残されている。史料によれば、モンゴル軍は病死した自軍の遺体を投石機でカップア城内に投げ入れ、疫病を拡散させたと言われている。この出来事は「世界初の生物兵器攻撃」として語られることもあるが、その真偽については議論があり、“意図的な攻撃”だったのか、“死体処理の

結果”なのかは断定できない。ただし、食文化と病が密接に結びついていたこと、そして移動と交易が感染経路となったことは確かである。

この事例から読み取れるのは、モンゴル帝国の食文化が拡張の原動力であると同時に、感染症というリスクを抱えた社会構造でもあったという点である。肉食の習慣、遊牧・狩猟生活、毛皮利用、交易ネットワークなど、食文化を支える要素は同時に感染症拡大の条件ともなり得た。すなわち、食文化は帝国の強みであると同時に「帝国の脆弱性」をも内包していたことが読み取れる。

食が力となり、また危険ともなり得たという視点は、モンゴル帝国を理解する上で重要である。食文化は単に生活習慣の問題ではなく、兵站・交易・環境適応・病との関係を含む総合的な社会システムとして存在していたと考えられる。



図 6 マーモット 出典：wikimedia commons

## 第6節 結論

さらに、食文化は単に栄養補給を目的としただけではなかった。食は儀礼・社交・政治交渉の場で用いられ、宴会や儀式において羊や馬を捧げる行為は、社会秩序を確認し、集団の結束を維持する役割を果たしていた。さらに、食料の保存・加工技術は、遠征における兵站システムの基盤となり、帝国の軍事力を支える要素ともなった。食文化は、遊牧社会における精神的価値・社会構造・軍事戦略と密接に結びつき、まさに「食のシステム」として機能していたと考えられる。

一方で、食と移動を前提とした社会構造は、黒死病(ペスト)の拡大という負の側面も生み出した。狩猟によるマーモットとの接触や、交易路を介した人・物資・家畜の往来は、感染拡大の条件ともなった。食は力であると同時に、帝国の脆弱性を露呈させる契機にもなったのである。

モンゴル帝国の歴史を食文化の視点から見つめ直すことで、帝国がなぜ長距離移動と大規模征服を可能にしたのかについての理解が深まる。すなわち、食とは単なる生命維持の手段ではなく、帝国の形成・維持・拡大を支えた戦略的基盤であったということが可能である。食文化の体系化

こそが、モンゴル帝国を、歴史上類を見ない強大な存在へと押し上げた原動力であったと考えられる。

## 第8章 モンゴル相撲「ブフ」文化の東アジアへの 広がり—日本相撲の文化的・歴史的関係 性の考察

### 第1節 相撲

日本の相撲界ではモンゴル出身力士(朝青龍、白鵬、日馬富士、鶴竜)の活躍が目立っており、その背景にはモンゴル相撲の伝統と鍛錬が関係している。そこで、モンゴル相撲と日本相撲の文化的・歴史的な関係性について研究する。



図 7 モンゴル力士と日本力士 出典：日刊スポーツホームページ

### 第1項 モンゴル相撲

モンゴルでは「ブフ」と呼ばれる。モンゴル語で「忍耐力」「耐えぬく力」という意味。正確には力士を表す言葉で、競技自体を指す言葉はモンゴルには存在しない。

一方英語では「モンゴリアン・レスリング」という呼び方が一般的である。

勝敗の決まり方は、相手の膝以上の部位(膝、手、背中など)が地面に着いた時点で負けとなる。

日本のような土俵は存在せず、屋外の草原など広い場所で行われる。

体格や体重による階級はなく、誰とでも対戦可能で、無差別級といえる。  
試合時間には制限がなく、長時間に及ぶ勝負も珍しくない。

## 第2項 日本の相撲について

日本の相撲は「日本書紀」によると今から約1500年前に野見宿禰(のみのすくね)と當麻蹶速(たいまのけはや)が相撲を取ったのが始まりとされている。

モンゴル相撲「ブフ」は紀元前3世紀、今から約2500年前に始まったといわれている(富川, 2025)。

どちらも始まりは宗教的な奉納儀式や神事であり、それとともに戦士としての鍛錬という意味がある。

二大潮流として、モンゴル国で実施されているハルハ・ブフ、中国・内モンゴル自治体で実施されているウジュムチン・ブフ

## 第3項 モンゴル相撲(ブフ)の位置づけ

「ブフ」はモンゴルの遊牧民社会において長い歴史を持つ伝統的な武芸である。それは単なる競技ではなく、成人男性の強さや名誉を示す重要な儀礼の一部として発展してきた(山田, 2025)。

「ナーダム」はモンゴル語で「遊び」や「祭り」を意味する。ナーダム祭は、モンゴルの国家的祝祭であり、モンゴル建国の記念日(7月11日)に合わせて開催される。

ナーダム祭においては、競馬・弓術とともに「三大男児の技」のひとつに位置付けられ、モンゴル人のアイデンティティを体現する文化的要素である。その技や所作には、力強さ、美しさ、威厳を示す意味が込められ、試合の前後に行われる「鷲の舞」などの儀式には遊牧民の自然観や祖先崇拜が表現されている。こうした特徴は、モンゴルにおけるブフが単なるスポーツ以上の文化的・宗教的な価値を持つことを示している。

## 第4項 東アジア全体との共通性

日本・中国・朝鮮半島などにも、相撲や角力と呼ばれる類似の力比べ文化が存在する。

### (1) 中国とのつながり

中国では春秋戦国時代以前の古代文献に「角抵」や「角力」と呼ばれる力比べの記録があり、軍事訓練や宮廷儀礼の一部として行われていた。また、漢代以降は祭祀的要素も加わり、豊穰祈願や祖先祭祀と関連して力比べが行われたとされる。これらは投げ技(腰投げ・足払いなど)の技術体系が共通。「衣を掴んで投げる」形式(組衣式)がブフ由来である。儀礼的に始まり礼で終わる点も共通している。

### (2) 朝鮮とのつながり

朝鮮半島では豊作祈願や祭礼の中で行われる「シルム」(朝鮮相撲)があり、地面に足をつかせる点や力強さを競う点でブフや日本の相撲と共通する。

13世紀、モンゴル帝国が高麗を征服下に置いたことが、ブフ文化の伝来に大きく関係している。モンゴルは高麗を属国化し、その後約80年間にわたって政治的・軍事的・文化的な影響を与えた。

### (3) 日本とのつながり

日本の相撲も、中国や北方の文化的影響を受けながら、神道の祭祀や宮廷儀礼と結びつき独自に発展してきた。例えば、奈良時代の宮中行事である「相撲節会」や、神社の例大祭で行われる奉納相撲などがその例である。日本相撲においても、相手を地面に倒すことで勝敗を決めるという原理はブフと間接的に共通している。

日本と朝鮮半島は古代から政治的・文化的交流が盛んにおこなわれていた。特に3～7世紀の古墳時代～飛鳥時代にかけて、朝鮮半島の百済・新羅・高句麗などから多くの渡来人が日本へ移住・渡来していた。この中で武術や格闘文化も伝来したと考えられる。

『日本書紀』には、高麗(こま)の人が力比べをしたという記述があり、相撲の原型が朝鮮半島を通じて伝わった可能性を示唆できる。

### (4) 東アジア全体との共通性

モンゴルや満州、中国北部から朝鮮半島、日本列島に至る広い範囲で、古代から人々や文化が行き来し、力比べという原初的な技術や儀礼が伝播・変容していったことを示唆している。特に北方の遊牧民社会が発達させた武芸的要素が、中国や日本の文化と接触する中で取り入れられ、それぞれの土地で固有の意味合いを持ちながらも共通する基盤を残したと考えられる。

モンゴル相撲(ブフ)は、東アジアの力比べ文化の重要なルーツのひとつであり、相撲を通じて見える「力と儀礼の文化」の系譜は、東アジアの民族的・文化的なつながりを理解する上で非常に興味深い視点を提供している(高山, 1999)。

## 第2節 モンゴル相撲(ブフ)が欧州に広がらなかった理由に関する考察

モンゴル相撲(ブフ)は、モンゴルで最も重要な伝統文化の一つであり、騎馬・弓と並ぶ「三大競技」として受け継がれてきた。東アジアでは、清朝を通じた中国への影響や、シルムとの交流を通じた朝鮮半島への浸透など、一定の広がりを見せた。しかしながら、ユーラシア大陸西方の欧州においては、この競技が文化として根付くことはなかった。

### 第1項 遊牧民社会固有の文化と移植性

ブフは、遊牧民社会の生活様式と強く結びついた格闘技である。放牧や狩猟で鍛えた身体能力を競う場であり、戦士としての技術向上や共同体の祭礼とも密接に関連していた。このような遊牧民社会特有の身体文化は、農耕社会や封建制が中心であった中世欧州とは文化的土壌が大きく異なっていた。そのため、ブフの価値観や儀礼をそのまま導入することが難しく、移植性の低さが広がりを阻害したといえる。

## 第2項 モンゴル帝国の西進と文化伝播

13世紀にモンゴル帝国は東欧にまで勢力を広げたが、その支配は軍事的・短期的な性格が強く、日常文化を浸透させる余裕はなかった。さらに、西方のキプチャク汗国などではイスラム文化が支配的であり、ブフに含まれる半裸の儀礼やシャーマニズム的要素は宗教的価値観と衝突したと考えられる。そのため、たとえ支配を受けた地域であっても、モンゴルの娯楽文化が定着する環境は整っていなかった。

## 第3項 欧州の格闘文化

中世欧州にはすでにレスリングやフェンシング、騎士の武術など、多様な格闘文化が存在していた。特にレスリングは各地域にローカルルールがあり、武術や娯楽として広く定着していた。このように既存の競技体系が確立していたため、新たに異文化の格闘技を受け入れる必然性が乏しかった。スポーツ文化の“市場飽和”が、ブフの広がりを阻んだ一因といえる。

## 第4項 儀式性と宗教観の違いによる文化的抵抗

ブフは競技であると同時に祭礼であり、鷲の舞や天空への祈りなど、宗教的要素が濃厚である。一方、キリスト教世界では公的な場での半裸の儀式や異教的象徴を含む行為は忌避される傾向が強かった。そのため、ブフの象徴性や儀式の形式は欧州社会の価値観と相容れず、文化的抵抗感が浸透を妨げた。

## 第5項 帝国解体後の交流断絶と近代スポーツの成立

モンゴル帝国が崩壊すると、東アジアと欧州を直接結ぶ文化ルートは弱まり、ブフが伝播する機会はほぼ消滅した。さらに近代期に入ると、欧州ではレスリングやボクシングといった競技が国際的ルールのもとに体系化され、スポーツの標準化が進んだ。この段階では伝統武術が新規に入り込む余地は小さく、ブフが欧州に定着する可能性は事実上なくなった。

## 第3節 結び

以上のように、モンゴル相撲(ブフ)が欧州へ広がらなかった背景には、遊牧社会の文化的特殊性、モンゴル帝国の政治的性質、欧州における既存格闘文化の強固さ、宗教や身体観の相違、そして歴史的交流の途絶といった複数の要因が複雑に絡み合っていることが明らかとなった。特に重要なのは、スポーツや格闘競技が単なる身体技法にとどまらず、社会構造・宗教観・生活様式と密接に結びつく“複合文化”であるという点である。文化は環境に依存し、また社会の価値観によって選択・淘汰されるため、たとえ強大な帝国が広大な地域を支配したとしても、その象徴的な身体文化が自動的に広がるわけではない。

さらに、ブフが東アジアでは一定の浸透を見せた一方、欧州ではほとんど定着しなかったという事実は、文化伝播において“地理的距離”以上に“文化的距離”が影響することを示唆している。東アジアの諸文化は、儒教・仏教・シャーマニズムといった宗教的共通点、祭礼や武術文化の類

似性、歴史的交流の頻度の多さなど、プフの受容を支える基盤を持っていた。一方、欧州はキリスト教を中心とした宗教体系、貴族社会に根付いた武術文化、そして中世以降に形成される近代スポーツの体系が、外来文化を受け入れる余地を狭めていた。

この対照的な構図は、スポーツの国際的伝播を理解する上で重要な示唆を与える。すなわち、スポーツが異文化へ広がるためには、単にその強さや魅力だけでなく、社会的制度や宗教観、人々の身体イメージといった文化全体との整合性が不可欠なのである。プフが欧州に広がらなかったという歴史的事例は、グローバル化が進む現代においても、文化の地域性や社会的背景を理解することの重要性を教えてくれる。

## 第9章 モンゴル帝国における多言語政策と印刷文化の展開 — 記録媒体の歴史的転換と高麗の位置付けを含む再検討 —

### 第1節 序論：武力帝国から情報帝国への視点転換

#### 第1項 問題の所在

13世紀にユーラシア大陸を席卷したモンゴル帝国は、短期間で東アジアから東欧に至る広大な領域を統合した世界史上最大の陸上帝国である。その支配様式は、同時代人の恐怖心も相まって、しばしば「武力」「征服」「残虐性」という単線的な印象で語られてきた。確かに、圧倒的な騎馬軍団による軍事力は帝国の拡大を可能にした最大の要因である。しかしながら、この空前の巨大帝国を半世紀以上にわたって維持し、多様な定住地帯を統治するためには、軍事力による威圧だけでは不十分であった。膨大な遠隔地間で情報・命令・経済・宗教儀礼を安定的に流通させる強固な制度が必要であり、地域・言語・宗教が著しく異なる広域をひとつの行政圏として機能させるために不可欠だったのが、紙・印刷・翻訳制度・文書行政という「知識インフラストラクチャー」である。

#### 第2項 先行研究と本稿の立場

モンゴル帝国の性格については、古くから多様な議論が展開されてきた。伝統的な中国史の文脈では、元朝を「野蛮な征服王朝」と見なす傾向が強かったが、近年の研究、特に杉山正明氏や岡田英弘氏らの業績により、ユーラシア規模での視点から帝国の開放性や商業重視の姿勢が再評価されてきた(杉山、1996、p.132; 岡田、2010、p.95)。さらに、船田善之氏は、帝国の多言語行政における文書の実態を詳細に分析している。

本研究は、こうした「世界帝国」としての再評価を前提としつつ、その統治を実務面で支えた技術的・物質的基盤に焦点を当てる。すなわち、帝国を単なる政治的統合体としてではなく、情報が流通する巨大なネットワークとして捉え直す試みである。

とりわけ本稿では、帝国の内部において高麗(918-1392)が果たした役割に注目する。高麗は単なる属国や搾取対象としての征服地ではなく、高品質な紙・高度な木版印刷・世界最先端の金属活字・熟練した技術人材を提供する、帝国の情報体系を支える「知識インフラ国家」であった(岡田、2010、p.95)。宋代中国の高度な印刷文明を継承しつつ、それを独自に発展させた高麗の技術は、元朝の行政システムで再利用され、後の朝鮮王朝期における印刷文化の爆発的発展の礎となった。本稿は、紙という「物質インフラ」と翻訳という「制度インフラ」を同一の視野で捉え、東アジアの知識循環・技術循環のネットワークを描き出す。

## 第2節 東アジアの知的基盤:記録媒体の変遷と技術革新

### 第1項 紙以前の記録媒体とその限界:比較史的視点

モンゴル帝国が広大な行政機構を「紙」に依存する以前、人類は文明ごとに様々な記録媒体を用いてきた。これらの媒体の特性を理解することは、なぜ「紙」が帝国統治の基盤となり得たのかを明らかにする上で重要である。

古代エジプトで使用されていたパピルスは、「ペーパー(paper)」の語源となった媒体である。パピルスの茎を薄く削いで縦横に交差させ、圧着して乾燥させたもので、軽くて丈夫という利点があった。しかしながら、「漉く」工程を経ないため繊維の絡み合いが弱く、折り曲げに弱い欠点があった。そのため、ページを綴じる冊子体(コデックス)には不向きで、主に巻物状で使用された。

地中海世界や西アジアで広く普及した羊皮紙(パーチメント)は、動物の皮をなめして薄く加工したものである。非常に強靱で耐久性に優れ、両面筆記や製本も容易であったが、一冊の聖書を作るのに数百頭の羊が必要となるなど、生産コストが極めて高価であり、日常的な行政文書への大量利用には限界があった。



図 8 羊皮紙写本製作の様子 出典：Miracle de Notre Dame

一方、東アジアの古代中国や日本において広く用いられたのは木簡・竹簡であった。これらは入手が容易な素材であり、誤字を小刀で削って修正できる利便性から、長期間にわたり公的文書から荷札まで幅広く利用された。しかしながら、重量があり嵩張るため、例えば車一台分の竹簡でも現代の書物一冊分の情報量に満たないなど、大量の情報の蓄積と遠隔地への運搬には物理的な制約が大きかった。

## 第2項 「紙」の発明と普及革命

こうした記録媒体の歴史を一変させたのが、中国における「紙」の発明である。紀元前2世紀頃から原始的な紙は存在したが、画期的な転換点は、後漢時代の105年に蔡倫が製法を改良・標準化したことである。彼は麻のぼろ布、樹皮、古漁網という植物性繊維を原料とし、これらを煮沸・解砕して水に分散させ、簀(す)で漉き上げる技術を確立した。この「蔡侯紙」は、記録媒体の可搬性、耐久性、低コスト化を同時に実現する革命であり、情報伝達の手軽さと量を飛躍的に増大させた(小島、2003、p.12)。

この技術は、タラス河畔の戦い(751年)を経てイスラーム世界へ伝播し、バグダードなどに製紙工場が建設されたが、東アジアではそれより早く、610年に高句麗の僧・曇徴によって日本へ伝えられたとされる。日本ではその後、楮(こうぞ)、三桠(みつまた)、雁皮(がんび)を原料とする独自の和紙へと発展した。特に、ネリ(植物粘液)を加えて繊維を均一に分散させる「流し漉き」技法の確立により、薄くて強靱な紙の大量生産が可能となった。

### 第3項 印刷技術の胎動と「知識の標準化」

紙の普及は、同一の情報を大量に複製する「印刷」技術の土壌となった。東アジアでは、印章や碑文の拓本という技術を背景に、7世紀頃から木版印刷が始まったとされる。現存する世界最古の印刷物の一つである日本の『百万塔陀羅尼』(770年)は、国家による仏教事業として百万巻もの小経典が印刷された例である(佐藤、1997、p.101)。

宋代に入ると、科挙制度の浸透による読書人階層の拡大に伴い、商業出版が勃興した。儒教経典や医書、暦法という知識が大量に複製される中で重要な変化が生じた。それは印刷による「知識の標準化」である。宋の印刷所では、テキストの正誤を厳密に照合する校勘制度が発達し、確定した「正本」を版木に彫ることで、同一の内容を持つ書物が帝国各地に流通した。これは単なる技術ではなく「知識の官僚制化」であり、モンゴル帝国は後にこの征服地のシステムを取り込み、広大な領域の行政基盤として再利用することになる。

## 第3節 高麗という「知識インフラ国家」の先進性

### 第1項 物質インフラとしての「高麗紙」

高麗は、モンゴル帝国の知識インフラを物質面で支える最も重要な供給源の一つであった。高麗で生産される紙(高麗紙)は、良質の楮を原料とし、高度な流し漉き技術によって作られた繊維の長く強靱な紙であり、中国産の竹紙などと比較して圧倒的な耐久性を誇った(World History Encyclopedia、2001)。

特に、その白さと光沢、そして墨の乗りの良さは、中国の文人たちからも高く評価された。さらに重要なのはその耐湿性・耐折性である。湿度の高い環境でも劣化しにくく、折り曲げても破れにくい特性は、長期保存が必要な公文書や仏典、そして後述する「紙幣」の素材として、代替不可能な価値を持っていた。元朝は高麗に対し、貢納品として大量の紙を要求しており、これが帝国の行政実務を支えていたことは想像に難くない。

### 第2項 国家プロジェクトとしての「八万大藏経」

高麗の技術力と国家意志を象徴するモニュメントが八万大藏経である。高宗治下の13世紀中葉、モンゴル軍の侵攻による国家的危機に際し、仏力による国難打開を祈願して敢行されたこの事業は、16年の歳月をかけて約8万1千枚の版木を完成させた空前のプロジェクトであった(朴、2001、p.54)。



図 9 海印寺・大蔵経経板閣の内部にある版木 出典：ユネスコ世界記録遺産

特筆すべきは、その驚異的な精度と保存技術である。版木には、数年間海水に浸けて脂を抜き、乾燥させた桜や梨の木材が使用され、歪みや腐食を防ぐ処理が施された。さらに、現在版木が収められている海印寺の蔵経板殿は、建物の配置と窓の大きさを工夫することで自然の通風を最大限に利用し、室内の湿度を一定に保つ高度な環境制御設計がなされている。800年以上を経た現在も版木の保存状態が極めて良好である事実は、高麗が保有していた。「知識を物理的に保存する」技術が世界最高水準にあったことを証明している。

### 第3項 世界最古の金属活字技術の実用化

さらに高麗は、世界に先駆けて金属活字印刷を実用化した国家である。従来の木版印刷は、一文字の誤りも許されず、一度彫り上がった版木の内容変更が不可能であるため、多種類の書物を少量ずつ印刷する用途には不向きであった。

これに対し、高麗では13世紀から14世紀にかけて、青銅などの金属を用いた活字鑄造技術が確立された。これは、土や砂の鑄型に溶かした金属を流し込む高度な技術であり、耐久性のある同一形状の活字を大量に生産することを可能にした。現存する世界最古の金属活字本『直指心体要節』(1377年)は、この技術の結晶である。活字は、組み替えるだけで多様な書物を印刷できる「更新性」と「可搬性」において画期的であり、知識情報の柔軟な運用を可能にした。高麗は「紙を作る国」を超え、製紙・製版・校合・鑄造という知識インフラ技術の総体を保有する、東アジアの技術センターであった。

## 第4節 文書主義国家への転換と統治の可視化

### 第1項 「紙」による権力の投射

遊牧国家として出発したモンゴルは、多元的な定住社会を統治する段階で、統治の根幹を「紙」によって可視化する徹底した文書主義国家へと転換した。これは、文字を持たなかったチンギス・ハンが、ウイグル人から文字とその行政利用の有用性を学び、積極的に採用したことに端を発する。

皇帝(カアン)の命令である「ジャルリグ(聖旨)」は、絶対的な権威を持つ紙文書として発行された。例えば、1246年に即位したグユク・ハンは、ローマ教皇の使節プラノ・カルピニに対し、ペルシア語で書かれた国書を与えて帰国させた。現在バチカン図書館に保管されているこの文書には、ウイグル文字モンゴル語による「長生天氣力裏、大福蔭護助裏、皇帝聖旨(永遠なる天の力により、大いなる福の加護により、皇帝の聖旨)」という定型句を含む印璽(ハーンの印)が捺されており、紙文書が皇帝の代理として機能していたことを鮮明に示している(杉山、2000、p.147)。

### 第2項 帝国の神経網:ジャムチと文書行政

広大な帝国の隅々まで皇帝の意思を伝達するために整備されたのが、駅伝制度「ジャムチ(站赤)」である。公務で移動する使者は、皇帝や高官から発行された「牌子(パイザ)」や「乗驛・給用文書」を携行することで、各地の宿駅で馬や食糧の提供を受ける権利を保証された。

この巨大な物流・情報ネットワークを維持するためには、膨大な事務処理が必要となる。大都の中央官庁(中書省など)では、漢人、モンゴル人、色目人(西域出身者)など多様な出自を持つ書記官(ビチグチ)たちが雇われ、文書の起草、翻訳、登録、保管という実務を担った。彼らが作成・管理する紙の文書群こそが、皇帝が物理的に不在である遠隔地においても統治の持続性と整合性を保証する担保であった。

## 第5節 官製印刷・翻訳・紙幣制度による制度的統合

### 第1項 官製印刷と政治的正統性の構築

モンゴル帝国は、征服した南宋や金、西夏から高度な技術と人材を吸収し、自らの統治システムに積極的に組み込んだ。特に、江南の豊かな都市文化を支えていた民間の印刷工、彫刻工、校勘者という専門技術者たちは、一部が大都へと移送され、政府直轄の官製印刷所(興文署など)に再編成された。

さらに、西夏の征服は、チベット仏教との深い結びつきをもたらし、多言語の経典を翻訳・出版するためのノウハウを提供した。元朝は、歴代皇帝の勅命集や法典(『元典章』など)、そして儒教経典や農書の出版を国家事業として推進した。印刷は、単に知識を広める道具であるだけでなく、皇帝が多様な臣民に対して「文治の保護者」としての自像を標準化して提示し、帝国の正統性を布告するための重要な政治装置として機能したのである(『元史』巻85)。

## 第2項 「翻訳」による多言語統合戦略

モンゴル帝国は、多様な民族・言語集団を内包していたが、単一の言語（例えばモンゴル語や漢語）による統一を強要することはしなかった。代わりに採用されたのが、翻訳の制度化による統治戦略である。

皇帝の命令は、まずモンゴル語で発せられ、それが対象地域の言語に合わせて、漢文（口語体・文語体）、ウイグル文字トルコ語、ペルシア語、チベット語などに翻訳され、文書化された。時には、一つの碑文に対訳形式で複数の言語が併記されることもあった（多言語碑文）。これを可能にしたのが、中央に設置された専門の翻訳局（翰林兼国史院など）と、そこで育成されたマルチリンガルの官僚集団である。彼らは、厳格な用語集や対照表を運用し、翻訳における意味のズレを最小限に抑える努力を行っていた。

同時代のイスラム世界（例えばイル・ハン国やマムルーク朝）においても、紙は行政や学問に不可欠なインフラであった。しかしながら、そこではアラビア語やペルシア語が支配的な行政言語・共通語として機能しており、元朝のような組織的かつ大規模な多言語同時翻訳システムは必ずしも顕著ではなかった。

モンゴル帝国（特に大元ウルス）の独自性は、紙と印刷技術が存在したからこそ、一度正確に翻訳された命令を、同等の法的効力をもって帝国中に大量複製・流通させることができた点にある。これは暴力のみに頼る支配ではなく、被支配者が自らの言語で理解できる形での「理解可能な命令」による統治であり、帝国の凝集性を高める上で極めて有効に機能した。

## 第3項 管理通貨制度「交鈔」の導入

文書主義は経済政策においても徹底された。元朝は世界で初めて、金属本位制から離脱した管理通貨制度ともいべき不換紙幣「交鈔」を、帝国内の主要な交換手段として広域流通させた。

金や銀という素材そのものに価値がある貨幣とは異なり、「紙切れ」を通貨として機能させるためには、発行元である国家への絶対的な信用と、偽造を防止するための高度な技術が必要である。ここで決定的な役割を果たしたのが、再び高麗の技術であった。交鈔の素材には、桑の樹皮を原料とした繊維が強く緻密な紙が用いられ、その品質維持には高麗の製紙技術の影響があったと考えられる。さらに、複雑な文様や印章を精密に印刷する技術も偽造防止に寄与した。この「紙の経済」は、塩や茶の専売制度、税の納入と連動して運用され、国家財政の規模を飛躍的に拡大させるとともに、帝国各地の市場を経済的に連結する動脈となった（『元史』食貨志）。

## 第6節 知識と文明の運河としての機能

### 第1項 東西科学知の循環と統合

帝国の情報インフラは、実務行政だけでなく、高度な知識の東西循環も促進した。いわゆる「パクス・モンゴリカ」の下で、人々の往来が活性化し、書物が国境を越えて移動した。

イスラム世界で高度に発展した天文学・数学・医学は、アラビア語やペルシア語の書物を通じて東方へもたらされた。大都には回回司天台(イスラーム天文台)が設置され、ジャマール・アッディーンら西域の学者が、もたらされた知識を漢訳し、中国の伝統的な暦法と統合して、当時世界最高精度の「授時暦」を完成させた。逆に、中国の農書や本草学の知識も西方へ伝達され、イル・ハン国ではラシード・アッディーンが編纂した『集史』の中に中国の歴史や文化に関する詳細な記述が含まれている(ラシード、1999、p.88; 杉山、1996、p.233)。

## 第2項 文明の翻訳と標準化

この知識の相互移転は、単なる表層的な模倣ではなく、異なる文化圏の度量衡や用語を照合し、統合する高度な知的作業を伴っていた。紙と印刷は、宗教と科学という文明の核心的知識を運ぶ「文明の運河」として機能したのである。

## 第7節 文字統合の野心と印刷文明の分析

### 第1項 パスパ文字の構想と限界

フビライ・ハーンは、帝国の多言語状況をより効率的に統合するため、チベット仏教の座主パспаに命じて、あらゆる言語を音写できる新たな共通文字「パспа文字(蒙古新字)」を作成させ、1269年に公布した。これは、モンゴル語、漢語、トルコ語、チベット語などを統一的な文字体系で表記しようとする、極めて野心的な文化的統合の試みであった。

政府は学校を設立してパспа文字の普及を図り、公文書や牌子、碑文、陶磁器の銘文などに使用させた。しかしながら、漢字という数千年の歴史を持つ強力な文字文化が根付く中華地域において、新たな表音文字を定着させることは容易ではなかった。さらに、既存の翻訳官僚システムが既に十分に機能していたため、実務レベルでの完全な切り替えには至らなかった。この「失敗」は、逆説的ではあるが、帝国が既存の多言語システムを翻訳制度によって十分に運用できていた証左でもある。

### 第2項 東西の印刷文化: 高麗とグーテンベルクの比較史

元が北走してモンゴル帝国がユーラシアから退潮した後も、その技術的遺産は各地に継承された。朝鮮半島では、朝鮮王朝が官営機関(鑄字所、後の奎章閣など)を中心に金属活字技術をさらに発展させ、儒教国家としての統治基盤を強化した。

ここで、東アジアの活字技術を世界史的な視点から評価したい。ヨーロッパでは、高麗の金属活字実用化から約70年後の15世紀半ば、ドイツのヨハネス・グーテンベルクが活版印刷術を確立した。彼は鉛・錫・アンチモン合金を用いることで鑄造しやすく耐久性の高い活字を実現し、葡萄絞り機を改良した印刷機(プレス機)と油性インクを組み合わせることで、大量かつ高速な印刷システムを作り上げた。

アルファベットという文字数が数十文字に限られる表音文字文化圏では、活字の利点が最大限に発揮され、印刷物は爆発的に普及し、宗教改革や科学革命の原動力となった。一方、数千～数万の文字を要する漢字文化圏では、活字の組版(植字)に膨大な手間がかかるため、需要に応じて少部数を迅速に印刷する、あるいは国家が内容を頻繁に改訂する書物(暦や法典)の印刷に適していた。

つまり、高麗・東アジア型は「国家主導・多品種少量生産・人的資源依存」であり、グーテンベルク・西洋型は「民間主導・少品種大量生産・機械依存」という異なる発展を遂げたのである。モンゴル帝国は、東アジア型の高度な技術を「制度」として組織化することで、その統治に最大限活用したと考えられる。

## 第8節 結論:紙が築いた帝国、高麗が支えた基盤

本稿は、モンゴル帝国を従来の軍事史的視点から解放し、「情報インフラストラクチャー」の観点からその統治構造を再構築した。帝国は、蔡倫以来の「紙」という媒体で権力を可視化し、宋代に確立された「印刷」で知識を標準化し、独自の「翻訳制度」で多言語世界を連結した、史上稀に見る情報帝国であった。

加えて、この壮大なシステムの背後には、良質な楮紙、精密な木版、先進的な金属活字、そして熟練した技術者を提供し続けた高麗の存在があった。高麗は帝国の周縁ではなく、東アジア印刷文明の中核を担う「知識インフラ国家」として、その統治を持続可能にする決定的な役割を果たしていた。紙の歴史は権力の歴史であり、その担い手としての高麗の位置づけは、ユーラシア規模の世界史において、改めて高く評価されるべきである。

つまり、高麗・東アジア型は「国家主導・多品種少量生産・人的資源依存」であり、グーテンベルク・西洋型は「民間主導・少品種大量生産・機械依存」という異なる発展を遂げたのである。モンゴル帝国は、東アジア型の高度な技術を「制度」として組織化することで、その統治に最大限活用したと考えられる。

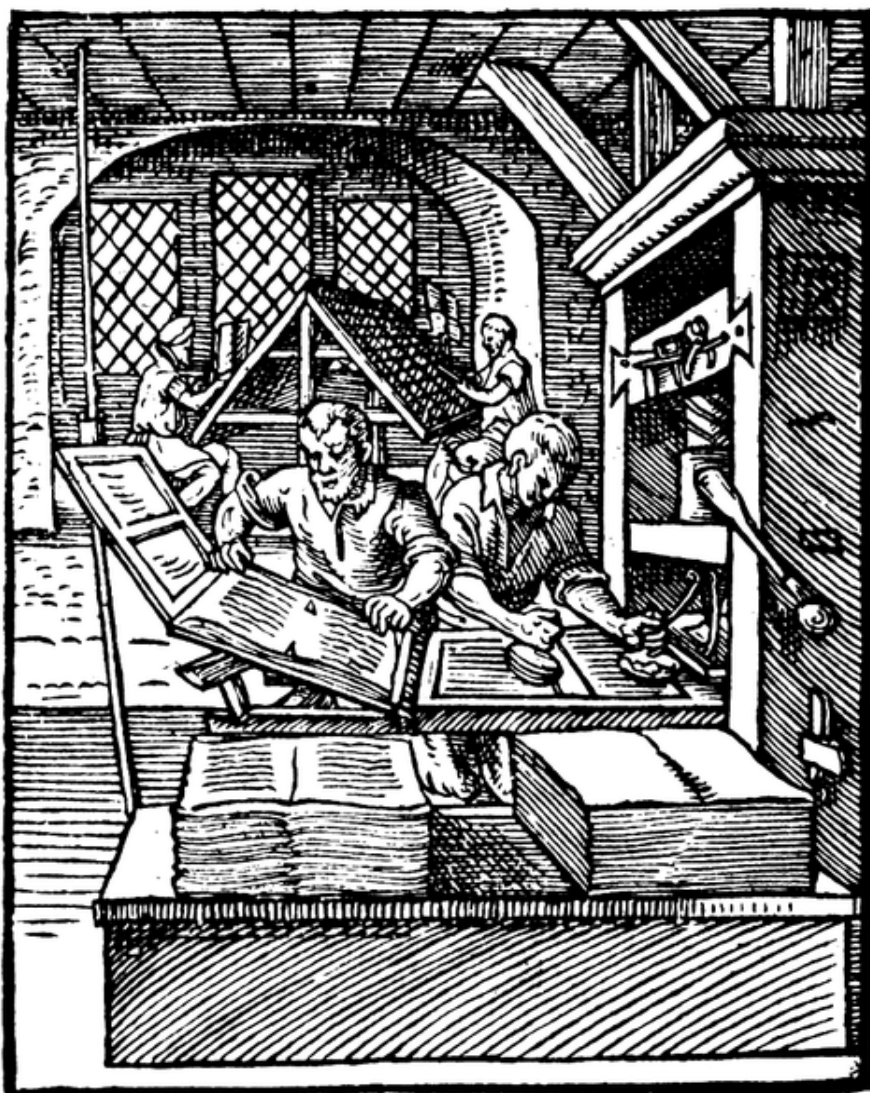


図 10 1568年に描かれた印刷所の様子。一時間に240枚を印刷。出所：鶴見大学図書館所蔵見大学図書館所蔵

## 第10章 モンゴル帝国時代と茶：文化的緩衝材としての茶の発展

### 第1節 本論の目的

中国で生まれた茶の歴史、その位置づけ、モンゴル帝国というユーラシア規模の支配体制の下で、茶がいかに交易・儀礼・思想の交差点として機能し、異文化間の接触、受容、平和に貢献してきたのか、及び混沌とする現在の世界状況においてこれからの茶が持つ意味を考察する。

## 第2節 茶の起源

茶の起源は、現代の中国南西部、すなわち雲南省・四川省・ミャンマー北部・インドのアッサム地方にまたがる高原地帯に求められる。この地域は「東アジアの三日月地帯(東亜半月弧)」とも呼ばれ、温暖湿潤な気候と高地特有の霧により、茶樹(カメリア・シネンシス)の自生に最も適した環境を備えていた。現在も雲南省西双版纳(シーサンパンナ)には樹齢800年以上の野生茶樹が存在し、人類と茶の関係が極めて古いことを物語っている(竹田, 2010, p26)。

考古学的にも、紀元前の出土遺物から茶の葉や炭化茶が確認されており、少なくとも3000年以上前から薬用・儀礼用植物として用いられていたと推定されている。『神農本草経』(紀元前1世紀頃)や、2世紀の医書『桐君録』には、茶が「毒を解し、眠気を去る薬」として記されている。さらに、2000年以上前に書かれた『僮約(どうやく)』には茶を飲む習慣の記録があり、四川地方で既に日常的に喫茶が行われていたことが窺える(熊倉, 1990, p20)。

当時の茶は、葉を蒸して固めた団茶(餅茶(へいちゃ))の形を取り、貴族や僧侶の間で珍重された。唐代になると、陸羽が『茶経』を著し、茶が薬用から嗜好品・文化へと転換する。その後、宋代の点茶法、明代の散茶法を経て、茶は生活文化と精神文化の両輪として東アジア全体に浸透していった。

さらに、雲南・四川の茶はシルクロードを経て中央アジア・ペルシア・中東へと運ばれ、「茶の道(Tea Road)」として世界の交易史に名を残している。こうして茶は、単なる植物から、人類の記憶と文明を結ぶツールとなり、健康・交流・精神性を象徴する文化的存在へと変化していった。

## 第3節 中国での茶の普及、その位置づけ

中国における茶の普及は、単なる嗜好品の拡大ではなく、社会的・精神的・文化的象徴としての深化の過程でもあった。初期の茶は薬用や儀礼用として用いられ、王侯貴族や仏僧の間で広まったが、やがて唐代(618-907)に入ると庶民層にも普及し、「喫茶風」が国家的流行となった。唐の文人・陸羽は『茶経』(約760年)を著し、茶の歴史・製法・器具・飲用作法・精神的意義を体系化した。陸羽は茶を「儉の徳をもつ人が飲むもの」と位置づけ、茶を清廉・節度・心の修養の象徴として説いた。

当時の茶は蒸した茶葉を固めた団茶(餅茶(へいちゃ))が主流で、湯釜で煮出して供され、儀礼や贈答にも頻繁に用いられた。唐代の宮廷では茶宴が外交儀礼として行われ、茶は礼と徳を象徴する国家文化となっていった。

宋代(960-1279)には粉末にした茶葉に湯を注いで茶甕で泡立てる点茶法(抹茶法)が広まり、今日の日本の茶の湯の原型となった。北苑には皇帝専用の茶園が設けられ、極めて精緻な品質管理のもとで「貢茶(皇帝献上茶)」が作られた。この時代、喫茶は詩文や画を伴う文人文化の象徴ともなり、茶会が知識人の交流の場として発展した。

さらに、1064年の蔡襄(さいじょう)『茶録』は、点茶の作法と道具の標準を示し、続く徽宗帝(きそうてい)の『大観茶論』(12世紀初頭)は、茶を美学・哲学・修養の対象として再定義した。さらに、審

安(しんあん)の『茶具図贊』には、茶筴・茶匙などの器具が図入りで紹介され、器物文化としての茶道具体系が形成されていった。

明代(1368-1644)になると、葉茶を急須で淹れる泡茶法(煎茶法)が普及し、従来の抹茶法は衰退した。これは製茶技術の進歩とともに、茶がより庶民的・家庭的な飲料へと転化したことを意味する。葉の香りと湯の味を楽しむ煎茶法は、清代には文人趣味と結びつき、やがて日本・朝鮮・東南アジアにも伝わり、東アジア全体の生活文化を形づくる礎となった。こうして中国の茶は、精神修養・社交儀礼・日常の癒しを兼ね備えた総合的文化装置として成熟していった。

## 第4節 シルクロードにおける交易品としての茶の価値と文化的意義

シルクロードにおける茶の流通は、単なる嗜好品の交易を超え、文明の交差と文化交流の象徴として重要な意味を持っていた。中国西南部の雲南・四川地方で生産された磚茶(れんが状に固めた茶)は、保存性と輸送効率に優れており、唐代以降、キャラバン隊によって中央アジア・チベット・ペルシア、さらにイスラム世界へと運ばれた。特に、馬・羊・塩などと交換される「茶馬交易」は、東アジアとユーラシア内陸を結ぶ経済の大動脈として機能し、茶は戦略的資源でもあった。

モンゴル帝国(13～14世紀)の拡大は、この茶交易を飛躍的に促進した。帝国の広大な支配圏のもとで、キャラバン路が整備され、茶は絹や香辛料と並ぶ国際交易の主力商品として扱われた。宮廷では茶が外交儀礼や宗教儀式に用いられ、貴族や僧侶の間では「文明の象徴」として高い地位を得た。特にチベット・モンゴルでは、乳や塩、バターを混ぜたバター茶として定着し、茶が遊牧文化と融合した地域文化を形成した。

また、茶は単なる経済的商品ではなく、精神文化の担い手でもあった。仏教・道教・イスラムなど異なる宗教圏の人々が交易を通じて接触する中で、茶は「中立的な共通飲料」として交流の場を支えた。寺院では修行僧の覚醒を助け、商人や学者の談論の場では思考と対話を促す媒介となった。こうして茶は、東西文明の間に静的な調和と精神的交流をもたらす存在として重んじられた。

さらに、茶の流通は陶磁器・金属器・書画・宗教美術など多様な文化財の伝播を伴い、東西文化のハイブリッド化を促進した。唐三彩・青磁・茶器などの造形は、イスラム陶芸やヨーロッパの磁器文化にも影響を与え、茶をめぐる美意識がグローバルに広がっていった。

総じて、シルクロードの茶は「飲料」であると同時に、「思想」「美」「交わり」を運ぶ媒体であった。それは戦争や宗教対立を超えて人々をつなぎ、交易と精神の平和的共存を体現する文化的シンボルであったと考えられる。

## 第5節 ユーラシア大陸における茶の伝播

茶は中国南西部で誕生し、唐代にはシルクロード交易を通じて西域オアシス都市やサマルカンドなどの中央アジア商人社会に伝わった。宋～元代には、ウイグル・ソグド商人らが茶を東西交易の中継品として扱い、馬・香料・宝石などと交換された。モンゴル帝国の拡大(13世紀)により、茶は

国家的物流網に組み込まれ、カラコルムからイラン高原に至るルートで流通が確立した。イル・ハン朝では、中国系陶磁器とともに茶が宮廷文化に取り入れられ、医薬・儀礼・上層嗜好品として受容された。14世紀以降、ティムール朝を経てペルシア語文献にも茶が登場し、香辛料や糖と並ぶ「東方的贅沢品」として象徴化された。最終的に、モンゴル-イラン間の文化融合を背景に、茶はイスラム圏における新しい嗜好文化の萌芽を形成し、後のオスマン帝国・サファヴィー朝期の飲茶文化の基礎となった。

## 第1項 東アジア周縁への影響: 朝鮮半島と日本における 茶文化の展開

### (1) モンゴルの茶

モンゴルにおける茶文化は、中国との交流を基盤に、遊牧生活と寒冷な気候に適応した独自の実用的・社会的飲料文化として発展した。モンゴルでは古くから、交易を通じて中国の雲南・四川から磚茶(レンガ状の固形茶)が輸入され、13世紀のモンゴル帝国時代にはすでに宮廷・貴族・遊牧民の間で広く消費されていた。特にチンギス・ハン以後、帝国の拡大により茶は軍需・外交・貢納品として機能し、「茶と馬の交換(茶馬交易)」が国家的規模で行われた。

モンゴルの茶は、飲用よりもまず栄養補給と保温の役割が大きく、乳やバター、塩を加える独特の「スーテーツアイ(奶茶(ないちゃ))」として発展した。この飲み方は、仏教僧侶や交易商人によってチベットや中央アジアにも広まり、ユーラシア内陸の茶文化圏を形成した。モンゴルの家庭では、客を迎える際に必ず茶を差し出す習慣があり、これはもてなし・信頼・平等の象徴とされている。

さらに、モンゴルの茶は遊牧社会の秩序とも深く関わり、家庭・部族・国家の連帯を保つ社会的儀礼飲料としての性格を持った。冬の厳寒期にはバター茶がエネルギー源となり、また宗教儀礼では茶が供物として使用された。モンゴル帝国時代には、茶がシルクロード交易における重要な財貨として、中国から中央アジア・ペルシアへ運ばれ、経済・文化・宗教を媒介する象徴的商品ともなった。

現代モンゴルでもこの伝統は息づき、都市部でも朝食や来客時にスーテーツアイを供する習慣が続いている。すなわちモンゴルの茶は、嗜好品というよりも生存・信仰・交流を結ぶ生活文化であり、その根底には「自然と人、客と主、身体と精神を温める一碗」という哲学が流れているのである。

### (2) 朝鮮半島の茶

朝鮮半島の茶とは、中国から伝来した茶文化が独自に発展し、儒教・仏教・王朝文化と結びついた生活と礼の象徴となったものを指す。新羅時代に仏教僧が唐から茶を持ち帰ったのが始まりとされ、高麗期には仏教儀礼と国家祭祀に茶が用いられた。李氏朝鮮期に入ると儒教的な儉約思想の下で華美な茶礼は衰えるが、上流士大夫(したいふ)層の間で「茶礼(タレ)」と呼ばれる形式が整えられ、礼節・精神修養の実践として継承された。茶は単なる嗜好品ではなく、静寂・節度・調和を重んじる文化的修養の手段であり、現在も韓国伝統茶礼として結婚式・冠婚葬祭・教育現場に受け継がれていった。さらに、緑茶だけでなく、麦茶・柚子茶・五味子茶など多様な薬膳茶文化が生まれ、朝鮮の自然観と健康思想を映し出している。

### (3) 日本への茶の伝来

中国・唐の時代に盛んになった喫茶は、中国文化の一環として遣唐使らによって日本に伝えられた。当時、団茶は貴重品であったので天皇や貴族、僧などの間で飲まれていた。

平安時代初期の弘仁6年(815)、嵯峨天皇は琵琶湖へ遊覧に出かけた折、梵釈寺(滋賀)に立ち寄り、住職の永忠より茶をふるまわれたとの記録もある(日本後記)。英忠は30年以上も唐で仏教を学んで帰国したばかりであったので、中国から持ち帰った白磁や青磁の茶碗を用いて、唐の様式で茶をいれたと考えられる。

寺院だけではなく朝廷でも春と秋の二度、大勢の僧を集めて国家と天皇の安泰を祈る仏教行事・季御読経(きのみどきょう)で茶がふるまわれていた。その茶は引茶とよばれ、甘葛(あまずら)、生姜などの調味料を入れたものであった。この季御読経は、奈良時代から平安時代の終わり頃まで数百年ものあいだ続けられた。

延暦寺を開いた最澄は比叡山のふもとに茶園を開いたと伝えられ、また嵯峨天皇は琵琶湖遊覧の直後に茶の木を関西の各地に植えて、茶を献上するように命じている(日本後記)。ほかに内裏や東海地方にも茶園があったようで、これらの茶が季御読経などの折にふれて飲まれていたと考えられる。

### (4) 茶と禅宗

鎌倉時代の中頃、中国宋へ仏教の研究に渡った栄西は、禅宗と抹茶法をたずさえて帰国した。禅宗では、抹茶は座禅修行での眠気を覚ます効果があり、栄養補給にも良いとされていた。その為、後には禅宗寺院の生活ルールに組み込まれていくこととなる。(熊倉、1990、p35)

中国禅は唐代に僧院での長時間の坐禅・夜坐を支える覚醒の飲料として茶を制度的に取り入れた。禅林では、寺内で茶を栽培・煎出し、来客への供茶や僧堂での茶礼が日課化していく。宋代には禅僧が文人層と交わり、点茶や茶宴の作法・語彙が広まり、「茶仏一味／茶禅一味」という象徴語で、茶を修行と一体化して捉える思想が形成された。禅的価値(清・寂・無心)は、茶の簡素・端正・即今という審美と共鳴し、寺院から都市社会へと波及した。こうして茶は薬用飲料から、修行の補助・接待の礼・精神修養の媒介へと位相を変え、宋代の都市文化(茶館・点茶・競技的点茶)とも繋がっている。

## 第2項 日本における茶文化の確立

### (1) 戦国時代の茶の位置づけ

戦国時代(15～16世紀)において、茶(「茶の湯」の文化)は武士・大名の間で単なる嗜好品を超えて、政治的・社会的象徴としての位置を確立した。例えば、織田信長は名物茶器を収集・配布する「名物狩り」を通じて、支配権・家臣統制・領国経営の道具として茶を活用した。

また、茶会の開催・茶頭(ちゃとう)選定などを通じて、典礼・交際・外交儀礼の場として茶の湯が整備され、また武家の修養・精神統制にも寄与した。

加えて、堺・京都・大阪という商人・茶人が茶の湯文化を担い、戦国大名がこれらの文化資本と連携したことで、茶は戦国の混乱期における権威の可視化・文化統合手段ともなったのである。

## (2) 珠光、紹鷗、千利休とその功績

茶の湯の歴史は、珠光(しゅこう)、紹鷗(じょうおう)、千利休(せんのりきゅう)の三人を中心に、禪的精神と美意識が深化しながら形成されていった。

室町時代の村田珠光(1423-1502)は、奈良興福寺の僧であり、後に一休宗純に参禅して「心の法」を茶の湯に取り入れた。彼はそれまでの唐物中心の豪華な唐茶(唐物荘厳の茶)に対し、質素な美を重んじる「わび茶」の萌芽を示し、「心の静けさこそ茶の本意」という思想を確立した。珠光は「一盃の中に天地を観る」という禪的な世界観を提示し、茶を修行・精神鍛錬の場として位置づけた点で画期的である。

その志を継いだのが武野紹鷗(1502-1555)である。彼は商人でありながら高度な美意識を備え、珠光の「わび」をさらに洗練し、道具・空間・所作における簡素と調和の美を追求した。紹鷗は唐物と国焼の器を等価に扱い、「用の美」や「質素の中の品格」という概念を提示したことで、後世の美学に大きな影響を与えた。さらに、紹鷗の茶室構成(四畳半台目など)は、のちの茶室様式の原型を築いた。

そして、千利休(1522-1591)が、茶の湯を「侘び寂びの哲学」として完成させた。利休は「和敬清寂」の理念を掲げ、亭主と客の心が調和する一瞬を「一期一会」として尊重した。彼の茶室「待庵」は、侘び茶の建築的完成形であり、空間・道具・作法のすべてが「無駄を捨てた美」を体現している。さらに、利休は織田信長・豊臣秀吉の茶頭として、茶の湯を政治・文化・精神の三位一体の体系に昇華し、日本人の心の型(かた)を形成した人物と考えられる。

この三人の系譜によって、茶の湯は単なる嗜好や儀式から、人間形成・精神修養・美学の統合体へと進化した。すなわち、珠光が「心の法」を与え、紹鷗が「形式の美」を整え、利休が「思想としての茶道」を完成させた。

千利休の子孫は、その後、3つの流派(表千家、裏千家、武者小路千家)に分かれ、利休の考え・教えを守っていく存在となった(学校茶道教本編集委員会, 2004, p113)。

## (3) 江戸時代 - 庶民への茶の浸透-

江戸時代(17~19世紀)には、茶は武士や公家の嗜みから離れ、庶民の日常飲料として広く定着した。初期には高価だった煎茶や番茶も、流通網と焙煎技術の発達によって価格が下がり、町人・農民層にも普及した。特に18世紀中頃、宇治の永谷宗円が青製煎茶製法を確立したことで、香味に優れた緑茶が大量生産可能となり、茶の質が飛躍的に向上した。茶屋や街道の「茶店」は、旅人や庶民の社交・休憩の場として発展し、「一服の茶」が日常的なコミュニケーション文化となった。さらに、寺子屋や年中行事にも茶が登場し、「もてなし」や「礼節」の象徴として生活に根づいた。さらに、幕府の財政・商業政策とも結びつき、宇治茶・静岡茶などの産地ブランド化が進み、茶は経済・文化両面で庶民社会を潤す象徴的商品となった。

## (4) 近代の実業家・数寄者たち

明治から昭和初期にかけての日本では、封建的身分秩序の崩壊とともに、茶の湯は武家の教養から実業家・文化人の精神的教養と美意識の象徴へと変化した。こうした流れの中で登場したのが、「近代の数寄者(すきしゃ)」と呼ばれる人々である。彼らは、千利休の「わび」の精神を近代的感覚で再解釈し、経済活動と文化的教養を融合させた。

代表的な人物に、三井物産の重役であり「茶の湯の実業家」と称された益田鈍翁(ますだどんのう)、住友家の文化顧問として多くの名品を蒐集した野崎幻庵(のざきげんなん)、宝塚・阪急を創業し「生活と芸術の融合」を体現した小林一三(こばやしいちぞう)らがいる。彼らは、政治・経済の最前線に身を置きながら、茶の湯を通じて人間の品格と社会的調和を追求した新しい知的階層であった。

彼らの茶室や道具の好みには、西洋文化の影響を受けた「モダンなわび」の感覚が見られ、古典主義に留まらない新しい美の創造を試みた。さらに、財界・政界・学界をつなぐ「茶会」が社交・文化・情報交換の場として機能し、茶の湯は近代日本のネットワーク形成と文化資本の象徴となった。

この時代の数寄者たちは、茶道を伝統芸能ではなく生きた思想・文化経営の場として再構築し、今日の文化人・企業家の精神的系譜の礎を築いた。

#### (5) 現代 - 裏千家 鵬雲斎 汎叟宗室

鵬雲斎 汎叟宗室は、1923年に京都で生まれ、1964年に第15代裏千家家元を襲名した。

若き日には海軍に入隊し、戦争体験を経た後、生き残った者の使命として「一碗からピースフルネスを」という理念を掲げ、茶道を通じて世界平和・文化交流の媒介とする活動を展開した。

家元としては、茶禅一味(茶と禅は一体)を主眼とし、伝統の茶道を国際化・現代化することに力を注ぎ、海外支部の設立・国際茶道教室の派遣などを推進した。

2002年に家元職を長男に譲った後も、2025年8月14日に102歳で逝去するまで大宗匠として茶道界を指導し続けた。

鵬雲斎の活動は、伝統の茶の湯を現代社会・国際社会において生きた文化として再構築した実践者であり、茶道を個人修養・国際交流・平和構築のツールとして位置づけた。

## 第6節 緩衝材としての茶

### 第1項 禅を通じた自己修養 “茶禅一味”

「茶禅一味(ちゃぜんいちみ)」とは、茶の湯と禅の精神が一体であるという理念を表す言葉であり、単なる作法や芸術ではなく、心を磨くための修行の道を示している。茶を点てる行為そのものが、自己と向き合う「静の修行」であり、また客をもてなす一連の所作は「動の修行」として、日常生活における禅的实践の場とであると説く。

その起源は中国唐代の禅林における喫茶習慣にさかのぼり、修行僧の瞑想の合間に茶を飲んで心身を整えたことに由来する。栄西(1141-1215)はこの実践を日本に伝え、『喫茶養生記』で「茶は養生の仙薬、延齢の妙術なり」と述べ、茶が心身の安定と覚醒をもたらすことを説いた。これが後の「茶禅一味」の思想的基盤となった。

室町期の村田珠光は、この禅的精神を茶の湯に取り入れ、「心の法」を重視する侘び茶の源流を開いた。彼の「一盃の中に天地を観る」という言葉は、茶の作法の中に宇宙的調和と心の統一を

見出す思想を象徴している。さらに武野紹鷗が「簡素の美」を磨き、千利休がそれを哲学的に完成させたことで、茶は「和敬清寂」という倫理を備えた精神修養の体系へと昇華した。

禅の修行における「無心」「一如」「日常即道」は、茶の湯の理念と深く響き合う。亭主と客が茶室という限られた空間で心をつにし、沈黙や所作の呼吸の中に調和を感じる時、そこには言葉を越えた心の交流が生まれる。これこそが「茶禅一味」の核心である。

茶の湯における「一服の茶」は、単なる飲料ではなく、「今この瞬間を生きる」ための禅的实践の象徴である。たとえば、湯が沸く音、茶筴を振る動き、茶碗を差し出す間合いの一つひとつに、亭主の心のあり方が映し出される。茶を通じて自他の区別を超え、心を整え、世界と調和することが、禅的修養の究極の姿といえる。

## 第2項 茶室の空間と“間”、人間関係の“間”

茶室は、単なる建築空間ではなく、人と人、人と自然、心と心の“間(ま)”を生かす舞台として設計されている。茶室の構造は四畳半や二畳台目という極めて限られた空間でありながら、その中に静寂・緊張・調和のリズムを生み出す。この「間」は、物理的な距離ではなく、呼吸・視線・動作の間合いによって成立し、亭主と客、道具と人との関係性を美しく結ぶものである。にじり口の低さ、露地の曲がり道、床の間の余白はすべて、心を沈め、相手を敬うための時間的・心理的“間”の演出である。

一服の茶を点てる動作もさらに、「間」に支えられている。釜の湯が静かに煮え立つ音、帛紗をさばく動作の緩急、茶碗を差し出す呼吸の合わせ方―、これらの“間”が対話以前の相互理解を生み出す。この空間的・時間的“間”は、単なる形式美ではなく、人間関係における倫理的秩序と心の余白を表すものである。茶室では、主客が互いに他者を尊び、沈黙や眼差しをもって語り合う。その沈黙の美こそが、「和敬清寂」の精神を具現する“間の美学”である。

## 第3項 譲り合いの精神 “After you”

「After you(お先にどうぞ)」という言葉に象徴される譲り合いの精神は、単なる礼儀を超えた人間関係の調和を生む文化的知恵である。

日本の「お先にどうぞ」「どうぞお召し上がりください」にも通じるこの行為は、相手への尊重と自己マネジメントを伴う倫理的・美的態度として機能する。

茶道の世界では、こうした譲り合いの姿勢を「和敬清寂」の一部として捉え、“自我を引くこと”によって他者と調和する美を説く。

茶室で亭主が客を先に通す、客が道具を静かに返す、その一連の動作には、互いの存在を尊ぶ“間”と敬意のリズムが息づいている。

この“After you”の精神は、序列や競争ではなく、相互信頼・共生・調和を基盤とした社会的美意識の形成に寄与してきた。

現代社会においても、ビジネスや公共空間でこの精神が発揮されるとき、人間関係の摩擦が和らぎ、相手中心の共感的コミュニケーションが生まれる。

それは、効率よりも調和を重んじる日本文化の根幹にある“間”の倫理・心の余白の実践でもあり、グローバル社会においても普遍的価値を持ち続けている。

#### 第4項 平和を求める精神“一碗からピースフルネスを”への思想の昇華

かつて戦争という極限の状況を体験した裏千家鵬雲斎宗匠は、「一碗からピースフルネスを」というスローガンを通じて、茶道という日本古来の文化を、個人の心の平安から世界平和へとつなげる橋渡しとして位置づけた。この語句に含まれる“ピースフルネス”とは、国家や体制の平和ではなく、一人ひとりの心が穏やかであることが出発点という理念でもある。

茶碗の中の緑茶は“地球＝小宇宙”として語られ、肌の色や国籍を超えた共感と調和のシンボルであり、茶道空間において一碗の茶を点て、客と亭主と一緒に味わうその瞬間に、対立・分断・暴力の記憶を超え、無言の対話を通じて他者を尊び、和する実践が生まれると説く。

鵬雲斎はこの理念を携えて1951年以降、世界62カ国以上を訪問し、茶道を“国際文化外交”を展開した。

今日、「一碗からピースフルネスを」は茶会だけでなく、国際交流プログラム・教育現場・企業研修・のテーマにもなり、日常行為を平和構築の一步と見なす枠組みを提供している。

このスローガンにより、「茶を飲む」という行為を超えて、心の姿勢、他者との関係性、世界との連帯を問いかける現代的な思想へと転換された。

### 第7節 結び

モンゴル帝国時代に日本に伝わってきた茶が、歴史を通して、一服の茶から平和を求める“一碗からピースフルネスを”の精神へと昇華した。分断が深まる現代の世界で今、最も求められているのは自己を習い、譲り合い、平和を希求する精神である。螺旋階段の法則のように、今度は日本より茶とこの精神を世界とユーラシア大陸に戻すことが重要である。

最後に鵬雲斎宗匠の言葉を引用する。

「お茶は人の心を和ませ、故郷や家族を思う安らぎを与えてくれます。丸い茶碗は地球を、その中の緑は自然を表します。まさしく自然共生の象徴であり、同時に人と人との繋がりを示す平和の飲み物です。さらに、茶道には、日本人が古来大事にしてきた「間」の精神が息づいています。「間」があるからこそ、衝突や対立を避け、お互いを尊重することができるのです。真の平和とは、どこか遠くにあるものではなく、我々の足元から生まれます。まずは、家庭という一番身近な場所で、和みの心を育むことから始めましょう」(淡交会総本部、2025年、p4)

# 第11章 モンゴル帝国の自由貿易期における琉球の発展

## 第1節 問題意識：パックス・モンゴリカが琉球を発展させた

### 第1項 本章の目的

モンゴル帝国と琉球は、関連性が薄いということが一般的な見方と考えられる。中国大陸と琉球の関係といえば、明朝の冊封体制に入った琉球王国の反映に焦点が当たる。しかしながら、明朝の前段階にあたるモンゴル帝国、元朝時代に、まったく交渉がなかった、と考える方が不自然ではないだろうか。明朝期は海禁政策と朝貢貿易という、民間の交易を禁じた管理貿易体制であったが、これに対し元朝期は、モンゴル帝国の広域支配のもと、「パックス・モンゴリカ」によってユーラシア世界にわたる広く自由な交易がおこなわれていた。東アジアの海洋世界も自由貿易時代であり、この時期に、琉球は新石器時代から鉄器時代に進化しているのである。次世代(15世紀)に繁栄した海洋国家、琉球王国の揺籃期と考えられるのではないか。

本論では、「パックス・モンゴリカ」というアジアダイナミズムが琉球を時代的に発展させた、という仮説を立て、検証を試みるとともに、「モンゴルと琉球」の一見相容れない組み合わせに、文化、歴史的なつながりを見出してみたい。

### 第2項 グスク時代における自由貿易の意義

琉球史研究において、最も豊富に取り上げられてきたのは、明代以降の冊封体制とそれに基づく朝貢貿易である。これは中国正史の記録や琉球王府の公的文書が比較的良好に残されており、外交・貿易の制度的側面が明確に把握できるからである。その結果、琉球史の通説的叙述は、「王国の誕生と朝貢貿易の繁栄」を中心に据えがちであり、それ以前のグスク時代は、考古学的研究が進んでいるにもかかわらず、国際史的な位置づけに関しては依然として空白が多い。

しかしながら、グスク時代は単なる前史ではなく、東アジア海域における自由貿易の最盛期に位置していた。すなわち元代の国際環境は、泉州を中心とした開放的な海域交易によって特徴づけられ、民間商人やムスリム商人の活動が許容されていた。この環境の中で琉球は、鉄器や陶磁器、銅銭などを一挙に受け入れ、社会構造を大きく変化させたのである。貝塚時代から鉄器時代への急速な移行は、単なる内発的進化ではなく、国際的な自由貿易ネットワークに取り込まれたことの帰結として理解すべきではないか(安里, 1998, p.28)。

元朝と明朝の海洋政策を対比すると、元代を「自由貿易」、明代を「管理貿易」と規定することができる。元代の交易は民間商人の活発な活動に支えられ、交易形態は互酬・贈与・市場交換が混在していたのに対し、明代は洪武帝以降、海禁と冊封体制を通じて交易を朝貢に限定し、国家が再分配を独占した。この大きな変容を基軸にすると、琉球史においても「グスク時代＝自由貿易」と「王国時代＝管理貿易」の二層構造が浮かび上がる。

中島楽章は『琉球王国の南海貿易』で、明代以降の冊封体制下での琉球が中継貿易国家として機能したことを明確に論じた(中島, 2025, p.54)。ただし彼の叙述は、明代以降を中心にしており、前段の元代＝自由貿易期には比較的光が当てられていない。したがって本論では、中島の議論を補完し、グスク時代における交易の実態を自由貿易システムとの関連で検討する。

本章の課題は、第一に、元朝期の海洋政策の特質を整理し、それがどのように自由な交易環境を生み出したかを明らかにすることである。第二に、その環境のもとで琉球がどのように国際ネットワークに組み込まれ、社会変容を遂げたのかを、考古学的出土資料と歴史的推定を組み合わせることで分析することである。第三に、こうした変容が三山分立と王国形成へ向かう前提条件をどのように整えたのかを明示することである。最後に、比嘉佑典が提示する「今帰仁グスク＝モンゴル帝国末裔説」という仮説を付論として取り上げ、学術的実証とは別に、地域的暗黙知の可能性を示す。

## 第2節 東アジア交易圏と元朝の海洋政策

### 第1項 元朝の海洋政策と「海の道」

元朝の特徴は、陸路と並んで「海の道」を国家的に認知し、広域的に活用した点にある。宋代から発展していた泉州は、元代において「世界都市」と呼びうる規模に膨張し、アラブ・ペルシャ・インドの商人が常住し、各地の物産が集中する国際交易港となった。こうした海域空間は「自由貿易圏」に外ならず、ユーラシア東端において多様な人・物・文化が混在する特異な空間であった。

元朝の海域統制は明朝のような徹底した国家独占ではなく、比較的緩やかな管理にとどまった。宋代の市舶司制度は存続したが、民間商人の活動を完全に規制するものではなく、むしろ税収確保と交易奨励のために商人の活動を利用した側面が強い。この「制度の緩さ」が、泉州を中心とした国際交易の自由度を高め、結果として琉球のような周縁の島嶼社会にまで交易が波及する余地を生んだ。

さらに重要なのは、船舶技術の革新である。宋代末から元代にかけてジャンク船は大型化し、隔壁構造による安定性と複数の帆柱による操船効率の向上が実現した。これにより南シナ海から東シナ海、日本列島までを結ぶ外洋航行が安定的に可能となり、季節風と黒潮を利用した長距離航海のリスクが大幅に軽減された(上田, 2021, p.42)。

### 第2項 東シナ海の回廊化と琉球の位置

東シナ海には、福建から琉球を経て九州南部に至る「南島路」と、浙江から直接博多に至る「大洋路」という複数のルートが存在した(中島, 2025, p.21)。これらは季節風の往復性を利用して構築された航路であり、往路と復路を分けて考えることで効率的な交易が可能となった。

琉球はこの南島路における中継地として重要であった。停泊・補給・修繕の機能を果たし、同時に交易品の積み替えや地場産品の交換が行われる場ともなった。これにより琉球は単なる周辺社会ではなく、国際交易圏における「結節点」としての機能を持つようになった。

こうした結節点では、交易の利得は港市や島嶼の地政学的条件に大きく依存する。琉球列島は、まさにその地理的位置自体が交易参加の条件であり、この条件が社会構造の飛躍的变化を可能にしたと考えられる。

### 第3項 民間主体の台頭と制度的「緩さ」

元代の特徴は、交易が国家の専管事業として統制されるのではなく、民間主体が比較的自由に活動できたことである。泉州商人、広南の海商、さらにはイスラム商人が、元朝の広大な支配圏の中で自由に活動し、交易利得を追求した。国家はこれを全面的に禁止するのではなく、むしろ税収や軍需物資の確保のために部分的に利用した。

この「緩やかな制度環境」は、琉球のように国家的な組織を持たない地域社会でも、交易の波に乗ることを可能にした。港に寄港した船からは物資だけでなく、航海技術、言語知識、商習慣という「暗黙知」が伝播し、在地社会の生活様式を根本的に変化させたのである。

## 第3節 琉球列島と交易ネットワーク

### 第1項 遺物にみる自由貿易の痕跡

グスク遺跡の考古学的調査からは、13世紀から14世紀にかけての外来遺物の急増が明らかになっている。陶磁器、鉄器、銅銭などの出土品は、琉球が自由貿易圏の一部として機能していたことを示す重要な証拠である。安里進は、特に陶磁器の出土状況に注目し、南宋から元にかけて福建・広東の産品が沖縄本島や奄美諸島に広範に流入したことを指摘する(安里, 1998, p.112)。これらの陶磁器は、実用容器であると同時に、交易を媒介とする威信財として用いられた可能性が高い。

鉄器の流入もまた決定的であった。鉄製農具や武器は、従来の石器・木製道具に比べて生産効率と戦闘力を格段に高め、社会の生産関数を飛躍的に上昇させた。安里は、農業生産力の向上と集落の拡大が鉄器導入と不可分であることを示し、鉄器流入を「外来交易ネットワークの直接的影響」と捉えている(安里, 1998, p.51)。

さらに銅銭の出土は、市場的交換が浸透した兆候と考えられる。中国銭貨は単なる交易品ではなく、価値尺度・決済手段として利用された可能性があり、これによって物々交換から貨幣経済への移行が促された。中島は、琉球における銅銭の流通を「東アジア貨幣圏への編入」とみなし、国際的経済圏の周縁部としての琉球の性格を強調する(中島, 2025, p.14)。

### 第2項 人的移動と知識の移植

物質的遺物と並んで重要なのが、人的交流による知識の移植である。港湾や入江に寄港した中国人・ムスリム商人は、交易品の供給者であると同時に、航海術、造船技術、市場慣行という実務知を伝えた。中島は、福建商人の活動を通じて、琉球に初期の華僑コミュニティが形成され、後世の久米村の起源となったと指摘している(中島, 2025, p.30)。

これらの商人は必ずしも定住したわけではないが、季節的滞在や中継地での活動を通じて琉球社会に多くの「暗黙知」を残した。船舶修繕の方法や市場での交渉技術などは、文献には残らないが、確実に在地の人々の技能・知識体系を変化させたと考えられる。

### 第3項 農耕の再編と「冬作」体系

鉄器導入の成果は農耕システムの刷新として現れた。沖縄本島の石灰岩台地や谷底低地においては、鉄製農具が効率的な耕作を可能にし、従来は限界的であった土地利用を拡大した。安里は、特に「冬作農業システム」が確立したことを強調する。これは秋に播種し、冬の間成長し、春に収穫するというもので、本土とは異なる季節暦に適応した農業形態であった（安里, 1998, p.31）。

この暦体系は、外来技術を単に受け入れるだけでなく、在地の気候・地形条件に合わせて柔軟に変容させたものである。すなわち自由貿易ネットワークを通じて導入された技術が、琉球独自の生態環境と結びつき、新しい生産様式を形成したのである。

## 第4節 グスクの成立と富の集積

### 第1項 多機能拠点としてのグスク

グスクは、しばしば「城」と訳されることから、専ら防御的建造物として理解されがちである。しかし考古学的調査や遺構分析が示すのは、それが単なる防御拠点にとどまらず、経済・宗教・政治の多機能的空間であったという事実である。安里は、グスクを「共同体秩序の中核」と位置づけ、石垣や城壁に囲まれた空間が、食糧貯蔵の倉庫、首長居館、祭祀の御嶽、さらに港湾に付随する交易品の集積所として機能したことを指摘する（安里, 1998, p.137）。

グスクの立地は、しばしば丘陵や台地の縁に築かれ、周囲を見渡せる高所にあった。これは防衛上の理由のみならず、周囲の農耕地と海岸を一望できる「統治の視覚化」という意味を持っていた。按司が支配権を主張する象徴空間として、グスクは共同体のアイデンティティと権力の視覚的な中心であったと考えられる。

さらに、グスクに併設された御嶽は、農耕儀礼や航海の安全を祈願する宗教空間であり、共同体全体の精神的統合の場であった。すなわち、交易・富・信仰が一体化した空間としての性格が、グスクを単なる軍事施設以上の存在にしていたのである。

### 第2項 外来財の配分と首長権力

グスクを拠点とする首長層（按司）は、外来交易品を掌握し、それを共同体内に再分配することで権威を高めた。ここで重要なのは、陶磁器や鉄器などの外来品が「生活必需品」であると同時に「威信財」として機能した点である。安里は、これらの遺物が集中的に出土する場所を分析し、それが共同体のエリート層に偏っていたことを指摘する（安里, 1998, p.51）。

外来財は単に使用されるだけでなく、祭祀や饗宴において贈与品として流通し、首長が共同体構成員に「恩恵」として与えることによって、支配の正統性を演出した。中島は、交易ルートの掌握と贈与・互酬の関係を、首長権力の基盤として位置づけ、経済と政治の不可分性を強調している(中島, 2025, p.102)。

こうした贈与と互酬のネットワークは、単なる経済取引を超えて、社会関係の再編成をもたらした。すなわち、外来財の分配＝社会秩序の再生産という構図が成立し、グスクはその中心であったのである。

### 第3項 大型化・城郭化の動因

外来財の流入は富の集中をもたらし、それが共同体間の競合を激化させた。交易利得を巡る争奪は、他集団による攻撃や略奪のリスクを高め、その結果として防衛的建築の強化が促された。石積の高い城壁や堀切は、単に外敵を防ぐためだけでなく、内部に蓄積された富を守るための装置でもあった。

安里は、大型グスクの成立を「富の集中と防衛の連鎖的關係」と説明する。すなわち、交易による経済的成功が富を生み、その富が新たな攻撃を誘発し、それに対応する形で防衛施設が強化され、結果として大型化・城郭化が進行したというのである(安里, 1998, p.98)。

ここに見られるのは、自由貿易の恩恵が同時に緊張と不安定性をもたらしたというパラドックスである。豊かさは権威の源泉であると同時に、争奪の対象でもあった。グスクの大型化は、その両義性を体現していたといえよう。

## 第5節 三山分立と海域支配

### 第1項 三山分立の形成過程

14世紀後半、琉球は北山・中山・南山の三山に分立した。明朝からは北山は「山北」、南山は「山南」、と呼ばれた。山は山岳ではなく、「島」を意味し、沖縄本島の北の国、中部の国、南部の国、という意味の命名である。北山、南山というのは、後世、琉球王国時代に編纂された史書で、中山にあわせて呼称統一されたものであり、同時代的には「山北」「山南」と呼ばれていた。

いずれにしても、これは単なる地理的な分割ではなく、交易ルートと港市の支配権をめぐる政治構造であった。中島は、三山分立を「国際交易の利権化」の結果とし、各勢力が港湾管理を通じて富を独占しようとした点を強調する(中島, 2025, p.19)。

北山は今帰仁を拠点に北は現在の鹿児島県にあたる奄美諸島を支配下に収め、南島ルートを押さえた。中山は浦添から首里へ拠点を移し、政治的統合とともに中国との接触を強めた。南山は大里を拠点に南方航路と結びつき、東南アジア方面との接続を図った。それぞれが交易路に基盤を置いた勢力であり、分立はまさに海域支配の反映であった。

## 第2項 海域支配と治安供給

交易利得は倭寇や海賊を誘発し、治安維持が支配の重要な要素となった。「海を守る者が海を治める」という論理は、明朝や李朝の成立からもみることが可能である。各山は、港湾や海域の治安維持を担うことを通じて正統性を主張し、自らの支配領域を防御すると同時に、交易者にとって安全な航路を提供することで経済的利益を確保した。

こうした「治安供給としての支配」を、海域国家の形成原理とすれば、モンゴル帝国が陸路で示した秩序形成との共通点が見出せる。琉球における三山分立もさらに、自由貿易ネットワークの中で形成された「海域秩序」の一形態であったと考えられるのではないか。

## 第3項 外交と外来秩序への接続

元末から明初にかけて、琉球の首長層は、互酬的自由貿易と冊封的管理貿易という二重の秩序に直面した。中島は、三山分立期の琉球が、自由貿易ネットワークの一員であると同時に、明朝との冊封体制への接近を模索したと指摘する(中島, 2025, p.26)。

この二重接続の試行は、政治的選択を迫る局面でもあった。三山はそれぞれ明朝との冊封関係を模索したが、中山が最初にそれに成功した。北山、南山は独自の朝貢船は出せず、中山の船に同乗したとされ、琉球統一は中山が担うこととなった。ここで重要なのは、琉球が自由貿易圏と冊封体制の狭間で、どの秩序に接続するかを選択する主体であったという点である。

## 第4項 北山と今帰仁グスクの位置づけ

北山勢力は、今帰仁グスクを拠点に奄美までを支配し、南島ルートの掌握を通じて経済的基盤を確保した。この拠点性は、比嘉佑典が提示する「北山王＝モンゴル帝国末裔説」とも接続可能なものである。学術的な裏付けは乏しいものであるが、北山の広域的な海域支配を考える上で、モンゴル帝國的ダイナミズムとの関連を想起することは、想像力として決して無意味ではない。付論では、この点をさらに掘り下げる。

# 第6節 明朝期の管理貿易:海禁と冊封体制

## 第1項 海禁の制度化とその影響

元末の混乱と倭寇の活動の激化を背景に、明朝は洪武帝の時代に「海禁」政策を発した。これは、民間の自由な海外渡航や交易を全面的に禁止し、交易を朝貢関係に限定するという徹底した管理貿易政策であった。「自由貿易圏から管理貿易圏への移行」であり、元朝と明朝の海洋政策の差異を「開放」と「封鎖」と対比可能である。

海禁の背景には、倭寇や海商の活動による沿岸治安の悪化があった。明朝はこれに対抗するため、民間交易を禁止し、朝貢を通じてのみ海外との交易を認める制度を整備した。これにより、中国商人の活動は大幅に制限され、琉球のような周辺地域にとっては、従来の自由貿易ルートが閉ざされることを意味した。

## 第2項 冊封体制と再分配の制度化

海禁政策のもと、朝貢は単なる外交儀礼ではなく、唯一の正規交易ルートとして機能した。朝貢品は皇帝に献上され、その代償として下賜される「賜物」が再分配の仕組みを形成した。岩井は、この「冊封―朝貢―賜与」の構造を「再分配の政治的儀礼」と呼び、経済行為が国家の権威を媒介にした再分配に変質したことを指摘している（岩井, 2020, p.27）。

琉球はこの制度に適応し、頻繁に朝貢使節を派遣して「貢納王国」としての地位を確立した。冊封を受けた中山王が明朝から国王として認められると、三山分立は終焉に向かい、琉球王国が成立した。この過程は、自由貿易に基づくグスク時代から、管理貿易に基づく王国時代への体制転換を象徴するものであった。

## 第3項 自由から管理への変容

以上を整理すると、琉球における元代と明代の差異は、交易のあり方における変容として位置づけられる。グスク時代は、自由貿易ネットワークへの参入を通じて外来物資と技術を受容し、社会構造を大きく変容させた時代であった。一方、明代は管理された朝貢体制への従属を通じて、国家の制度化と王権の安定がもたらされた。「自由から管理への転換」は、琉球においても当てはまる。

ここで強調したいのは、グスク時代が決して「原始的段階」ではなく、むしろ国際ネットワークに積極的に参加した「自由な時代」であったという点である。そして明代の管理化は、これを制約しつつも制度的な安定をもたらし、琉球王国の成立を可能にした。琉球王国はグスク時代を克服して成立したわけではなく、「変容と発展」という関係であったのである。

## 第7節 結び

本章では、元朝期＝グスク時代の自由貿易システムと、その社会的影響を明らかにした。安里の考古学的研究が示すように（安里, 1998, p.94）、陶磁器や鉄器の流入は単なる物質的变化にとどまらず、農耕生産の拡大や社会階層化を引き起こし、大型グスクの成立を促した。中島が指摘するように（中島, 2025, p.19）、交易ルートの掌握は首長権力の基盤となり、首長が政治的混乱と戦乱と向き合う中で三山分立へとつながった。

一方、明朝の成立は自由貿易から管理貿易への変容をもたらした。これにより、琉球は自由な交易環境を失うと同時に、冊封体制に従属することで新たな国家としての安定を得た。

したがって、琉球史におけるグスク時代は、単なる「王国前史」ではなく、自由貿易圏に参入したことによって社会が飛躍的に進化した時代であった。加えて、明代の管理貿易への転換は、それを制度化し、王国形成を促す役割を果たした。両時代の対比こそが、琉球史を「アジア海域ダイナミズム」の文脈に位置づける鍵である。

## 第8節 付論：モンゴル帝国の末裔が北山王として

### 今帰仁グスクに君臨した — 比嘉佑典の仮説

#### 第1項 はじめに

琉球史を実証的に論じるとき、史料や考古学的証拠を重視するのは当然である。しかしながら、歴史の舞台には、史料に記録されずとも人々の記憶や伝承として語り継がれたものがある。比嘉佑典は、1940年に沖縄に生まれ、東洋大学文学部教授、名桜大学理事長を歴任し、80歳を機に故郷に戻り、自身の体験と想像力と想像力(構築力)を頼りに、2022年に『今帰仁御神 女神(うない) 国の民衆古代史 上巻・下巻』を出版した。ここでは、学者としての立場を離れ、史料の裏付けに縛られることなく、いにしへの琉球の歴史と文化について自由に描いている。「北山王＝モンゴル帝国の末裔説」は、そうした記憶や伝承に寄り添いながら描かれる壮大な仮説である。本付論では、比嘉の著作の内容を紹介しつつ、沖縄北部に漂う「モンゴルの影」を追いかけてみたい。

#### 第2項 元朝の皇子・地保奴の琉球配流

比嘉が物語の中心に据えるのは、地保奴(ディボド、沖縄方言で「ていぼぬう」と呼ばれる人物)である。

明朝に漢地を追われた元朝は、北京を捨ててモンゴル高原に戻り、北元と呼ばれた。1388年、明朝の洪武帝は將軍藍玉に命じて北元を討伐させ、彼はブイルノールの戦いで元軍に大勝した。その際、モンゴル帝国第17代ハーン、トグス・テムル(ウスハル・ハン、天元帝)と長子天保奴(テンボド)は辛うじて逃れることができたが、次男の地保奴(ディボド)は前ハーンの後妃や皇女(公主)らとともに捕虜となった。地保奴らが洪武帝に大元ウルスの金印・金牌を献上すると、洪武帝は金銭と邸宅を与えて厚遇した。

しかしながら、藍玉がハーンの後妃と私通したという噂が流れ、洪武帝は激怒し、恐れた后妃は自殺した。この経緯に地保奴が恨み言を述べると、洪武帝は地保奴を琉球に流罪とした。この内容は明の正式な記録である『明太祖実録』に次のように記載されている。

「大將軍永昌侯藍玉遣人送虜主次子地保奴及后妃公主等至京師。地保奴及后妃獻金印・金牌、賜鈔二百錠。命有司給第宅、廩餼俾就居京師。既而有言玉私元主妃事、上怒曰『玉無礼如此。豈大將軍所為哉』。元主妃聞之、惶懼因自尽、地保奴由是有怨言。上聞之曰『朕初以元世祖君主中国時、有恩及民不可無嗣。嘗与儒臣議欲封地保奴、以尽待亡国之礼、彼乃如此。豈可以久居内地』。於是遣使護送、往居琉球仍厚遺資遣之」(日本語訳：大將軍永昌侯の藍玉が人を遣わし、ハーンの次子である地保奴と后妃・公主らを京師(首都)へ送ってきた。地保奴と后妃は金印・金牌を献上し、朝廷からは紙幣二百錠を下賜された。さらに役所に命じて邸宅と食糧を与え、都に住ませた。ところが後に「藍玉が元のハーンの後妃と私通した」との噂があり、洪武帝は怒って言った。「藍玉は無礼である。これが大將軍のすることか。」ハーンの後妃はこれを聞いて恐れおののき、自ら命を絶った。地保奴はこれに恨み言を言った。皇帝はこれを聞いて言った。「朕はもとより元の世祖(フビライ)が中国を支配していた時に、その恩が民に及んだことを思い、後嗣が絶えては

ならぬと考えていた。かつて儒臣と議し、地保奴に爵位を与えて亡国に対する礼を尽くそうとしたのだが、彼はこうした振る舞いをする。どうして長く内地に居させられようか。」そこで使者に護送させて、琉球に住ませ、なお厚く資財を与えて送り出した。)(『明太祖実録』洪武二十一年四月丙辰、筆者訳)

さらに、琉球側の正史『中山世譜』にも次の記載がある。

「本年 太祖以所獲元主次子地保奴發流于琉球」(日本語訳:この年、太祖は、捕らえた元の皇帝の次子・地保奴を琉球に流した。)(『中山世譜』洪武二十一年、筆者訳)

琉球側の記録は簡潔であるが、宗主国である明から前王朝の皇子が配流されてきたのであるから、大変なことだったはずである。「明実録」によれば、洪武帝はフビライ・ハーンが中国を繁栄させた功績に敬意を表し、その子孫が絶えないよう礼遇したとある。不祥事ゆえにやむなく配流したが、護送もつけ、多くの財産も持たせた、というのであるから、流罪というよりも左遷に近い。当時、明に臣従していた中山王の察度としても、罪人というよりも賓客として遇する必要があったはずである。当然お付きとしてモンゴル人が何名も同行してきたと思われるから、この機にモンゴルの宮廷文化が琉球にもたらされたと考えても不自然ではない。

これほどの大事件でありながら、琉球側の正史の記録が簡潔なのは、明朝を憚ってのことである可能性がある。しかしながら、これを裏付ける考古学的証拠は見つかっていない。比嘉は、状況証拠から想像力を膨らませるのである。

沖縄本島北部には「モンゴル王の墓」と呼ばれる石造遺構が存在し、地元では地保奴の墓ではないかと語られてきた(比嘉, 2022, p.218)。苔むした石組みの墓は、在地の墓制とやや異なる形状を示しており、外来の王の存在を想像させるに十分である。風雨に晒されながらも、地域の人々は「この地に異郷から来た王が眠る」と語り継いできたという。

比嘉は、この墓の伝承を重要な手掛かりとして、地保奴＝北山王の祖という仮説を展開する。学術的証拠に乏しいものであるが、地域に残された「記憶の場」としての墓は、在地社会にとって異郷の王を受け入れた痕跡そのものである。

### 第3項 今帰仁グスクと北山王権

今帰仁グスクは北山王国の居城であり、沖縄本島北部を一望する丘陵上に築かれている。海から見上げると切り立った石垣が連なり、その雄大な姿はまさに「北の王の城」にふさわしい。比嘉は、このグスクをモンゴル帝国の末裔が築いた拠点として読み解く(比嘉, 2022, p.222)。

今帰仁は奄美諸島をも支配下に置き、北山王国は薩南諸島との交易を独占したとされる。石垣の積み方や城郭の規模の壮大さは、ただの地域防御を超え、広域的支配を意識した権威の象徴であった。比嘉はこれを「海の遊牧国家」の縮図とみなし、北山をモンゴル帝国の遺産を受け継ぐ「海の王国」として描くのである。

## 第4項 沖縄に残る「モンゴルの影」

本論文末の「フィールドワーク記録」で報告しているが、匈奴時代から続くモンゴルの伝統的な夏の祭典、「ナーダム」では、「競馬」「格闘技」「弓競技」の3種目が競われる。比嘉によれば、この遊牧民の伝統の残像が沖縄北部にみられるというのである。

### (1) 馬と競馬

沖縄北部では古くから馬が飼育され、村祭りでは競馬が行われてきた。とくに今帰仁や本部周辺には、細身で小柄ながら俊敏な在来馬が知られ、かつては「琉球馬」と呼ばれた。モンゴル帝国拡大に貢献した蒙古馬(モウコノウマ)も小型である。比嘉は、この競馬文化を騎馬民族の名残と結びつける。祭祀に組み込まれた競馬は単なる娯楽ではなく、権力と富を象徴する儀礼的要素を帯びていたのである(比嘉, 2022, p.230)。

### (2) 格闘技・相撲との関連

沖縄では「手(ティー)」と呼ばれる格闘技が古くから伝わり、また相撲に類似した競技が農耕儀礼や祭礼の一部として行われてきた。比嘉は、これをモンゴルのブフ(モンゴル相撲)との類似性に注目する。体力を競い、共同体の勇者を顕彰する競技は、騎馬民族社会に広く見られる要素であり、その残滓が沖縄に留まったのではないかという。

### (3) 弓競技の伝承

さらに比嘉は、沖縄北部に残る弓競技や弓祭祀に注目する。競馬と弓を組み合わせれば、それはまさに騎射の再現であり、モンゴルの戦闘文化を思わせる。農村で行われた弓祭は豊穰祈願の儀式でもあったが、戦闘技術の伝承という側面も持っていた可能性がある。

## 第5項 伝承と口承の力

比嘉の仮説を補うのは、地域社会に残された伝承である。沖縄北部の村々には「北から来た王」「異郷の支配者」という言葉が口承に残され、祭祀の文脈で語られてきた。これを地保奴の記録と重ね合わせると、琉球に渡来した異国の王が北山に君臨したという物語が見えてくる。大陸から来た貴人を、琉球人が王として奉ったとしても違和感はない。

比嘉は、こうした伝承の背後にある「歴史感覚」を重視する。記録に残らない歴史を、伝承や祭祀に刻まれた形で読み解くことで、琉球とモンゴルとの関係を想像する余地が広がるのである。

## 第6項 学術的限界と想像力の意義

もちろん、これらは実証史学の立場からすれば極めて脆弱である。地保奴の配流を裏付ける考古学的史料はなく、墓の特定も確証を欠く。競馬や格闘技、弓競技をモンゴルに結びつけるのも大胆な飛躍である。しかし比嘉は、そうした限界を承知の上で「沖縄人だからこそ見える歴史像」としてこの仮説を提示している(比嘉, 2022, p.240)。

この姿勢には、在地の暗黙知の重要性がある。考古学や文献史学が描けない部分を、地域の記憶や伝承が補う。歴史解釈において想像力が果たす役割を示すものとして、この仮説は決して

無意味ではない。むしろ、琉球史をユーラシア草原世界と結びつける思考実験として、独自の価値を持つのである。

## 第7項 おわりに

今帰仁グスクと北山王をモンゴル帝国の末裔と結びつける比嘉佑典の仮説は、実証性を欠き、主流史学からは距離を置かざるを得ない。しかしその語りは、琉球史を「東アジア海域の自由貿易圏」からさらに拡張し、ユーラシア草原世界との接点へと誘うものである。地保奴の墓の伝承、競馬や相撲、弓競技という文化要素は、確証はないにせよ「モンゴルの影」を感じさせるものであり、沖縄北部の歴史景観をより豊かにしてくれる。

本論の実証的叙述とは別に、この付論を併置することで、琉球史に潜む多様な解釈可能性を示すことが可能である。学術と想像力の狭間に立ち上がる歴史像は、時に研究を深めるヒントとなりうるのである。

# 第12章 総括と今後の課題

本論文では、その緩やかで寛容な統治がもたらした「パックス・モンゴリカ」が、広いユーラシア世界での自由な交易を活発化し、異なった文化をもった諸地域が交流し、互いに影響し合った実態をあぶり出すことを目指した。本章では、各章のまとめと、それぞれのテーマの限界、今後の課題を整理する。

## 第1節 精神文化

第1章では、パックス・モンゴリカの基盤となったモンゴル民族の精神文化を深掘りした。モンゴルの宗教は自然崇拝的であり、また「母性原理」の尊重が「根源的生命力尊重」となって、多宗教・多文化の共存を可能とした。これは現代世界にも「科学的自然敬愛精神」として昇華できるものである。具体的な実践計画の提示が、今後の課題である。

第2章では、中国人メンバーならでの知見から、現代中国がモンゴル帝国をどのような歴史観で捉えているかを探った。そのため、中国の歴史教科書の叙述を分析した。すると、現代中国にとって元朝は、日本の教科書に書かれているような異民族による征服王朝ではなく、中華多民族統一国家の完成期として評価されていることが分かった。統一、融合、発展といった、モンゴル帝国の理念が、多民族国家の成功モデルとされていたのである。今後の課題としては、中国・日本・韓国など東アジア各国の教材を比較することで、歴史教育と国家アイデンティティの形成過程をより立体的に捉えることが可能になる。特に中国の教材は多民族国家としての視点が比較的明確であり、その特徴を他国と比較する意義は大きい。元朝のような多民族歴史は、統一と多様性の双方を踏まえた学びの重要性を示している。

## 第2節 組織文化

第3章では、パックス・モンゴリカにおけるモンゴル帝国の広域統治と多民族支配の仕組みから、現代の組織文化の在り方を探った。モンゴル帝国の特色である「薄くゆるいつながり」が、多様性を力に変え、無理な統合ではなく、多様な価値観の「連結」モデルが成功の鍵であった。現代でも画一的な統合よりも共通のインフラと仲介者で連結する方が効果的という示唆を得た。課題と限界としては、第一に、モンゴル帝国の統治は、軍事力、ハーンへの絶対的な忠誠という、現代の企業組織とは根本的に違う土台の上に成り立っていること。第二に、複数のルールが存在も現代の組織への適用には課題が残る。

第4章では、モンゴル帝国の血統主義と女性の果たした役割及び現代への継承をテーマとした。「チンギス統原理」は統治の中核的イデオロギーで、統治の正統性を担保した。血統主義は過去の遺物ではなく、時代と地域を超え、日本の天皇制や企業の家系的継承意識にも影響している。また、チンギス統原理は男系のみ適用されたが、女性は補完者というわけではなく、文化的調停者として男性と同等の位置づけがあったことも明らかになった。ただし、モンゴル帝国の領土拡大において果たした女性の役割については今後の研究課題である。

第5章では、チンギス・ハンのリーダーシップに学ぶ「感情の転換」を取り上げた。チンギス・ハンが1219年から1222年にかけて遠征し、ホラズム・シャー朝を滅ぼした歴史的事件を分析。一般には、使者を殺されたことにチンギス・ハンが激怒して遠征に踏み切ったとされているが、そこには感情のみならず、戦略的な意図もあり、リーダーの情動と国家戦略合理性との二面性を見出した。現代のリーダーシップ論にも通じると考える。今後の課題としては、チンギス・ハンの「恐怖」という他者の情動を、組織の安定と求心力の維持という合理的目的のために、いかに利用・管理したか、という点が挙げられる。

## 第3節 生活文化

第6章では、モンゴル帝国と中国の伝統音楽の歴史と感性を比較した。モンゴルは音楽を「自然との共鳴」「精神性」ととらえ、中国は「秩序」と「調和」の面を重視したが、音楽は社会や宗教、世界観を映し出す存在であることが浮かび上がった。この後の研究課題は、現在の観光向け演奏と、本来の儀礼・生活文化で使われる音楽の違いを整理し、どの部分が失われて、継承されているかの探求である。

第7章では、モンゴル帝国の繁栄を支えた食文化を分析した。農作物の取れない、いわゆる不毛の地であるが、遊牧に最適化され、夏は白い食べ物としての乳製品、冬は赤い食べ物としての肉を余すことなく利用していた。現代のエコに通じる文化である。今後の課題は、遊牧・農耕・交易ネットワークが実際にどの程度の規模と頻度で食料供給や感染症拡大に影響したのかを数量的・比較史的に調査することである。

第8章では、モンゴル相撲ブブの広がりを深掘りした。日本の相撲にモンゴル力士が多く活躍していることに歴史的な文化交渉は見出せなかったが、東アジアには広く格闘技は広がりを見せている。一方で、なぜ欧米に広がらなかったかが疑問であるが、宗教が原因ではないか、という示唆

を得た。今後の課題は、ブフの身体文化が支えたモンゴル軍事力が、国際的に巨大な脅威をもたらしたのか、という点の探求である。

第9章では、モンゴル帝国における多言語政策と印刷文化の展開にスポットを当てた。モンゴル帝国は武力帝国で成り立ったが、情報帝国に転換することによって安定したという視座のもと、記録媒体と技術がどう統治システムに影響したのかを探った。結果、情報インフラが帝国の結合を実現し、紙、印刷がパックス・モンゴリカに果たした役割は極めて大きいことが分かった。高麗がモンゴル帝国に併合されなかったのは、その優秀な印刷技術によるものではないか、という視点も浮かび上がった。高麗が東アジア印刷文明に与えた影響は計り知れない。紙の歴史は権力の歴史でもあり、1392年高麗から最後の統一王朝である李氏朝鮮となり、その王朝が5百年後、どう変貌していくのかを考察することが今後の課題である。

第10章では、モンゴル帝国時代と茶をテーマとし、茶が文化的緩衝材としての役割を果たしたという仮説を検証した。結果、パックス・モンゴリカが広めた物資としての茶が、文化、宗教、民族を超えて共有され、異文化交流の媒体となり、普遍的、共感的コミュニケーションを生み、さらに平和をもたらすという循環構造を見出すに至った。この後の課題は、モンゴル帝国・シルクロードを通してユーラシア大陸全域から東アジアまで広がって茶はインドの茶(紅茶)にどのような影響を及ぼしたのかの考察である。

第11章では、パックス・モンゴリカがもたらした自由交易が、時代の発展につながった例として、琉球を取り上げた。海洋貿易国家としての琉球王国の最盛期は、中国における明朝時代であるが、それに先立つモンゴル帝国に、鉄器が交易によって琉球にもたらされ、新石器時代から一気に鉄器時代に時代が進んだのである。付論として、沖縄本島北部にはモンゴル帝国の影響があるという仮説にも触れた。今後の課題は、これらの視点をさらに史料分析と現地調査、さらに考古学的アプローチから探究し、裏付けることである。

## 第4節 総括

本研究全体を通じて明らかになったのは、パックス・モンゴリカが単なる軍事的平定の結果ではなく、精神文化、統治システム、人材登用、情報インフラ、文化交流という多層的な要素の統合によって実現されたということである。モンゴル帝国は、多様性を抑圧するのではなく包摂することで、史上稀に見る広域的な平和と繁栄を達成した。

この歴史的経験は、現代世界に対して重要な示唆を与える。第一に、多様性の尊重と寛容が、長期的な安定と繁栄の基礎となること。第二に、画一的な統合ではなく、柔軟な連結と調整が、複雑な社会システムの運営には有効であること。第三に、精神文化や価値観の共有が、制度や法律以上に人々を結びつける力を持つこと。第四に、情報と知識のインフラが、物理的な支配以上に統治の持続性を担保すること。

以上の視点を得たことが、本論文におけるモンゴル帝国の研究成果である。

## おわりに

本年度のインターゼミ・アジアダイナミズム班は、「分断」が進む世界情勢に直面しながら、研究活動を続けた。世界各地の戦争も終息していない。テーマは「パックス・モンゴリカ(モンゴルの平和)」としたが、千年も前の「平和」に価値を見出さなければならないとは、人類はいったい進歩したといえるのだろうか、という思いに囚われる。

インターゼミは、毎週土曜日に九段下の寺島文庫の3階に集い、まず第1部として、学生、社会人院生が一緒になって情報交換、意見交換を行う。その後、寺島実郎学長が、時々刻々と変化する内外の社会・国際情勢について、事象の原因と本質は何か、課題と為すべきことは何か、全体知をもって知見を示される。第2部では、各班に分かれ、それぞれのテーマに向き合い、「知」を深めるトレーニングを行うのである。

学長から与えられる示唆は多岐にわたるが、柱のひとつと受け止められるのは「歴史の鏡を磨く」ということである。アジアダイナミズム班に新たに参加したメンバーは、いきなり800年前のモンゴル帝国に向き合うことになり、全員が戸惑う。経営学を学ぶつもりが、歴史学のゼミに迷い込んだ思いになる。しかし、それぞれが、それなりに自分の興味のあるテーマを見つけ、議論してゆくと、まず、一見無関係に思える互いのテーマが、実は強く関連していることを知り、驚く。そして次に、遙か昔のモンゴル帝国が、現代の国際関係、内外の政治、社会、経済、そして企業活動にまで、影響と教訓を与えていることに気づき、寺島学長の示唆に、少しずつながら近づいてゆける気がしてくるのである。

本論文は、その気づきの集大成である。これまでの研究成果が示すように、モンゴル帝国は史上最も成功した統治機構だと言っても過言ではない。本年は、その緩やかで寛容な統治がもたらした「パックス・モンゴリカ」が、広いユーラシア世界での自由な交易を活発化し、異なった文化をもった諸地域が交流し、互いに影響し合った実態をあぶり出すことを目指した。テーマは広く、深く、体系化するにはとても至らないが、「文化交渉学」という新たな分野への挑戦の第一歩としたい。

2025年の国際情勢は、トランプ政権の保護主義的政策に象徴されるように、本国第一主義と分断が進行している。大国のエゴイズムが世界秩序を不安定化させる現代において、パックス・モンゴリカの歴史的教訓は一層の重要性を持つ。モンゴル帝国が示したのは、武力と威圧ではなく、寛容と柔軟性によって多様な人々を結びつける可能性であった。

もちろん、歴史の単純な適用には慎重でなければならない。モンゴル帝国の統治には、征服戦争の暴力性や、血統主義による不平等といった問題も含まれていた。しかし、その限界を認識した上でなお、パックス・モンゴリカ期の文化交渉と平和的秩序形成のメカニズムから学ぶべきことは多い。

本研究は、「文化交渉学」という新たな学際的分野への挑戦として位置づけたい。文化交渉とは、異なる文化圏の接触、交流、変容のプロセスを包括的に考察する学問である。パックス・モンゴリカ期は、ユーラシア全域にわたる文化交渉の壮大な実験場であった。本論文で扱ったテーマは、その一部に過ぎない。今後の研究では、科学技術の交流、医学知識の伝播、芸術様式の変容など、さらに多様な側面からの考察が必要である。

インターゼミ・アジアダイナミズム班は、2017年以來9年間にわたりモンゴル帝国史を考察してきた。その蓄積の上に立つ本論文は、過去の教訓を現代に活かすという実践的な歴史研究の意義を示すものである。歴史は過去の記録であると同時に、未来を構想するための鏡である。パックス・モンゴリカの研究を通じて、私たちは現代世界の課題に向き合い、より良い未来を展望するための視座を得ることができた。

最後に、本研究には多くの限界がある。各章のテーマは広範であり、それぞれがさらに深い考察を要する。また、一次史料の分析や現地調査も、より体系的に行う必要がある。しかし、これらの限界を認識することこそが、今後の研究発展の出発点となる。本論文が、パックス・モンゴリカと文化交渉史に関する今後の研究の礎となり、また現代社会の課題解決に向けた一助となることを願う。

2025年7月には、天皇皇后両陛下が、日本の天皇として初めてモンゴルを訪問し、大歓迎を受けた。かつてモンゴル帝国時代には中国、ロシア地域までも支配下に収め、「パックス・モンゴリカ」を実現していたモンゴルは、現代では中ロの両大国に挟まれた小国である。モンゴルによる天皇の招聘は、日本との絆を強くしたいという意思の表れに他ならない。不安定化する国際情勢の中で、アジアの安定のため、日本とモンゴルの関係強化は極めて重要であるといえる。多摩大学インターゼミで、学生と社会人が10年近くもの間、モンゴル帝国の研究を続けている意義は、決して小さくないものと考ええる。

# フィールドワーク記録

## フィールドワーク(1):天理大学附属天理参考館

### 1) 開催日・場所

開催日:2025年6月1日(日) 13:00-15:00

場 所:天理大学附属天理参考館(奈良県天理市)

面談者:天理大学附属天理参考館 学芸員 梅谷昭範氏(海外民族室)

参加者:佐藤力、菅沼孝陽、金美德教授

### 2) 内容

天理大学創立100周年記念第98回企画展-絆-ヒトとヒトをつなぐモノ-2025年4月16日～6月2日に展示されている世界最大級の家系図(チンギス・ハンの子孫であるチェチェン・ハーン・ショロイから始まり14世代に亘る)の見学、及び梅谷学芸員からの本展示内容の解説をいただく。

<質問事項>

- ①本家系図が日本、そして天理大学に持ち込まれた歴史的背景
- ②本家系図の特徴
- ③モンゴル帝国にとっての家系図とは
- ④モンゴル独立後、ソ連統制下での家系図の位置付け

<調査結果>

#### 【本家系図について】

モンゴル帝国初代皇帝チンギス・ハンの男系子孫であるチェチェン・ハーン・ショロイ(1577-1655)を始祖とする家系図である。ショロイはモンゴル南東部のハルハ部を治めたハーンの一人。ショロイ以降の後継者はいずれもチェチェン・ハーンを名乗った。

#### 【家系図の特徴】

直径555cmあり、世界最大級の家系図である。家系図の中心にはショロイの名前が記されており、そこから同心円状に赤い線が世代毎に区切られている。記されているのは14世代11,966人、全て男系男子。モンゴル文字+満洲文字で記載されている。文字が染みていないことから、インクには膠(にかわ)を使用しているのではないかと推察される。朱印は1カ所を除いて布と布のつなぎ目に割印する形で押されており、偽造防止を目的にしたものではないかと推察される。

#### 【本家系図伝来の歴史的背景】

本家系図は1905年頃に作成されたと考えられる。どのように日本(天理大学)に持ち込まれたのかは不明。参考館職員も、ブリキ缶の中に防虫剤とともに保管されている本文物の存在は認識していたが、これが何なのか長らく不明だった。今回も展示に際し、初めてモンゴルの家系図であることが判明、マスコミでも報道された。すると、駐日モンゴル国大使をはじめモンゴル人が多く拝観に訪れ、中には五体投地で拝礼する人もいた。大使からも床に置いての展示は避けてほしい話があった。

たが、大きすぎて難しい。伝来したのは恐らく戦前(1945年より前)の可能性があり、証拠はないが、社会主義国となったモンゴルから避難させる目的かもしれない。(後述)

#### 【モンゴル帝国での家系の重要性】

モンゴルの遊牧民社会においては「チンギス統原理」という思想があり、チンギス・ハンの男系男子のみが正統な支配者となる権利と考えられることが、本家系図の作り方にも影響している。

#### 【ソ連統制下での家系図の位置付け】

モンゴルが1924年に独立後、ソ連の共産主義に支配された時代に、ハーンの地位につく資格のあるチンギス・ハンの子孫は粛清された。子孫たちは身を守るため、家系を表す資料を破棄、あるいはどこかに持ち出し、避難させた可能性がある。ソ連統制下で戸籍制度廃止、また姓がなくなり家系が遡れなくなってしまったため、非常に貴重。

#### 【本家系図の希少性】

類似の家系図はモンゴルにも現存するが、直径530cm、12世代までの記載で本展示品より少し小さく、朱印もない。

## フィールドワーク(2):モンゴルの伝統的祭典「ナーダム」観覧

### 1) 開催日・場所

開催日:2025年7月9日(水)~13日(日)

場 所:モンゴル国ウランバートル

参加者:菅沼孝陽

### 2) 内容

#### 【フィールドワークの目的】

モンゴル人が夏の祭典として伝統的に開催している「ナーダム」、特に首都ウランバートルで開催される「国家ナーダム」を観覧し、モンゴルの文化と歴史の理解を深める。また、今年度は天皇皇后両陛下が国賓として訪問されることもあり、現代日本とモンゴル国の関係について考察もできる貴重な機会と捉え、モンゴルを訪問した。

#### 【フィールドワークの形態】

旅行会社のツアーに参加。行程が決められた観光ツアーなので専門家のインタビュー等は叶わなかったが、現地情報を主に観光ガイドのスブド氏(22歳女性、1年間東京外国語大学で日本語を学ぶ)により得た。彼女の発言と情報は『』内に記す。

#### 【ナーダムについて】

##### <概要>

起源は匈奴時代、紀元前3世紀といわれ、「ブフ(モンゴル相撲)」「競馬」「弓射」の「男の3競技」が競われる。モンゴル、中国の内モンゴル自治区の各地で行われ、2010年にユネスコの無形文化遺産に登録される。ブフは「力と勇気」、競馬は「スピードと持久力」、弓術は「集中力と技術」を象徴し、これらの要素をモンゴル民族が古代から尊んでいたことを示す。社会主義国時代の1921年に、革命記念日である7月11日から3日間、首都ウランバートルの中央スタジアムで「国家ナーダム(イフ・ナーダム)」が国家行事として開催されるようになった。1990年の民主化後もモンゴル民族の一体感を醸成する行事として、国を挙げての祭典として続いている。7月11日には中央スタジアムで開会式(午前11

時から2時間程度)が行われ、競馬は郊外のアルガラントで開催される。弓射のみ女性も参加できる。『ナーダムは国のお祝いなので、7/10～14の5日間、公務員は休日となる。良い季節であり、171万のウランバートル市民のうち約50万人がバカンスで郊外に旅行に行き、普段渋滞の激しい市内の車が少なくなる。スタジアムの外には屋台がたくさん出て、民族衣装の晴れ着を着る人も多い。開会式のチケットはモンゴル国民は抽選で、1家族2枚までしか買えない。』



図 11 匈奴時代の文物（モンゴル国立博物館）（筆者撮影）

#### <開会式>

中央スタジアムにて11時にファンファーレで開会。貴賓席に大統領、閣僚、来賓が座り、今回は天皇皇后両陛下が臨席され、紹介があると歓声が起こった。これに先立ち、普段国会議事堂に納められている9本の白いトゥグ（旌旗）が議事堂から出発するセレモニーがスフバートル広場で行われた。この9本のトゥグは1000頭の白馬の毛から作られ、憲法で大統領とともに国の象徴と規定されている。見た目は旗というより馬印に近い。チンギス・ハンが平時の儀式に掲げたと伝わっており、「平和の旗」とも呼ばれる。戦時には黒いトゥグが敵国に向けて立てられるとのことだが、これは国会議事堂内に納められたままである。鼓笛隊の演奏の中、議事堂から9本のトゥグが持ち出され、広場で騎手に渡され、馬上高く掲げられ、儀仗騎馬隊に護られながら市内をパレードし、スタジアムに入場する。場内のトラックを一周したあと、貴賓席の前に掲げられる。国家斉唱の後、民族衣装の盛装を着た大統領が貴賓席から降りてきて開会宣言を行う。続いて、大人数によるパフォーマンスが繰り広げられ、民族の踊り、騎手による曲乗り、馬頭琴の大オーケストラの演奏などがオリンピック開会式さながらに1時間半にわたって繰り広げられる。「鶴の舞」があったが、これは通常は行われず、日本の天皇を歓迎しての特別なオマージュだった。最後は国旗を掲げた騎手たちが場内を駆け回り、国家としての団結、一体化の醸成や愛国心高揚を目的としたイベントであることが分かる。



図 12 国会議事堂から出る「9本のトゥグ（平和の旗）」（筆者撮影）



図 13 スタジアムに入場するトゥグ（筆者撮影）



図 14 フレルスフ大統領による開会宣言（筆者撮影）



図 15 貴賓席の天皇皇后両陛下（筆者撮影）



図 16 馬の曲乗り（筆者撮影）



図 17 ナーダム開会式のフィナーレ（筆者撮影）

### <競馬>

ウランバートル西郊の競馬場で開催。『モンゴルの遊牧民は2歳から乗馬を始める。レースは2歳馬、3歳馬、4歳馬、種馬などの種目がある。今回見学するのは4歳馬で、騎手は7～12歳の少年。4歳馬レースは16～18km走るので子供でないとスピードが出ない。種馬レースは25km走る。昔は年齢制限がなかったが、勝つために3歳、4歳の子供を乗せることもあり、落馬事故が多かったので年齢制限が設けられるようになった。ナーダムに出場できるのは、例えば羊を1000頭所有しているなどの裕福な遊牧民。自分の子供に怪我をさせないため、騎手を雇うことになる。1等になるのは大変な名誉で、1等の馬の土埃を浴びると1年間運が良くなる、とされている。』観覧はゴール付近。長い時間をかけて出場する馬と騎手が遠い集合場所に集まる。そこで出走資格の審査が行われ、失格した者がかなり多く戻ってくる。スタート地点は遠くてゴールからは見えない。アナウンスでスタートしたことが告げられるが、30分以上姿は見えない。やがて遠くに土煙が見え、ようやく疾走する馬が見えてくる。かなり差はつき、バラバラとゴール地点に入ってくる。大歓声が沸き、遅れた騎手にも大きな拍手が送られた。

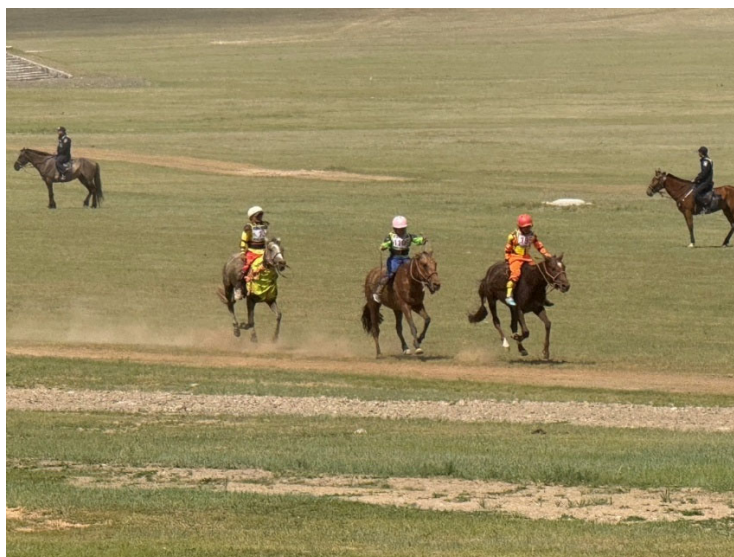


図 18 ナーダム競技の競馬（4歳馬レース）（筆者撮影）

### <ブフ（モンゴル相撲）>

開会式の後、貴賓が退場してから同じ中央スタジアムで行われる。予選では512名が出場するが、本選では赤組、青組に分かれ、各16人ずつでトーナメント対戦する。一人ずつザソール（行司）がつくが、取り組みが進むうち場内はザソールの姿の方が多くなる。肘・膝・頭・背中・尻が地面についたら負けだが、手は問題ない、土俵も制限時間もないため、延々と続く場合もある。自分は30分程度しか見ていないが、TV中継で見る限り夕方になっても決着はついていなかった。日本の相撲のように太った選手はおらず、見た目はレスリングに近い。



図 19 ナーダム競技のブフ（筆者撮影）

<弓射>

中央スタジアムに隣接した専用の会場で行われる。男性は70メートル、女性は60メートル離れた革製の的を狙い、命中すると的の周辺にいる審判が独特の所作で知らせる。今回は会場入り直前に天皇皇后両陛下が到着したため、後からの入場は停止となり観戦することができなかった。



図 20 大統領のエスコートで弓射場に到着した天皇皇后両陛下（筆者撮影）



図 21 ナードム会場においてフレルスフ大統領の弓射を観覧される天皇皇后両陛下  
出典：宮内庁ホームページ

### 【現代のモンゴル国について】

#### <政治>

『政治家の汚職が問題となっている。政治家はウランバートル市内の「政治家地区」に集住している。2011年に開港したチンギス・ハーン国際空港は円借款で資金調達したが、政治家の横領で当初の計画の半分の規模となってしまった。』

#### <国際関係>

『よく、ロシアと中国どちらが嫌いか、と尋ねられるが、若い人は好きでも嫌いでもない。50代以上は社会主義時代にロシア語を習っていたし、ソ連のお陰で中国から独立できたという認識なのでロシアに親近感があると思う。でも、ソ連はかつて、何もしていない仏教のお坊さんをたくさん殺し、自分の友人の祖父も殺されたので、それは許せない。ウクライナのようにロシアに攻められるのでは、怖いのでは？とよく聞かれるが、モンゴルには資源はたくさんあり、中国が許さないので大丈夫だ。民主化後の世代はロシア語ではなく英語を習っている。』

#### <遊牧民について>

『ウランバートルでは土地を買ってゲルを建てて住む人がいるが、それは比較的裕福でない人で、ゲルに住んでいるからといって遊牧民とは限らない。遊牧民は国有地を年4回ほど移動して暮らしている。住所がないので郵便は、郵便局に行った人がロコミで届いている人に伝える。』

#### <首都の状況>

『ウランバートルは本来55万人程度の計画で作られた都市なのに、今は171万人で、国民の40%が集中してしまっている。気温が冬は最低で-40℃、夏は最高40℃になり、季節の寒暖差が80℃もある。地下鉄など市内の鉄道がなく、バスは時刻表そのものがなくて、いつ来るか分からず、冬はバス待ちが命にかかわるので皆車を使い、大渋滞となる。市内には75万台の車があり、渋滞回避のため、ナンバーによって市内を走ってよい車を仕分けしている。違反すると罰金が課されるが、納付率が悪いので1週間以内に支払うと半額にするという措置をとっている。JACAがバス停にシェルターを作ってくれたり、政府が街中に貸

しバイクを設置したりしているが、やはり車頼みだ。郊外に新都心を作り、市庁舎や省庁が移転し始めている。地下鉄の建設計画もある。首都をカラコルムに移転する話もあるが、どうなるか分からない。』

#### <モンゴル人の生活>

『モンゴルは義務教育が12年あるが、小1から高3まで同じ建物なので飽きる。日本が羨ましい。授業は40分で休み時間は5分。昼食時間も10分しかないのでモンゴル人は食べるのが早い。夏休みは6~8月の3ヵ月、冬休みは1ヵ月あり、春、秋にも1週間程度休みがある。部活はなく、共働きの家庭が多いので、子供たちはすぐ家に帰り、家事をやり、夕飯を作って親の帰りを待つ。遊牧民でなくても、普通の家庭で秋には生きた羊1頭、馬1頭を買い、自分たちで屠殺してひと冬分の食料とする。1頭、日本円で3万円くらい。羊1頭屠るのに5人では足りず、6、7人で行う。幼い頃は嫌だったが慣れると楽しいものである。屠殺の経験のない人はいない。今回食べるホルホグは焼け石で蒸して作る羊料理だが、本来は屠殺するときだけ食べる特別料理である。ウランバートルでは賃貸物件に住む人は少ない。自分の所有にならないのを嫌い、住宅ローンを組む。平均月収は日本円で75,000円だが、ローンの支払いも同程度である。徴兵制があり、18~27歳の間に1年兵役に就く必要がある。しかし、2歳未満の子がいる者、3人以上子がいる者は免除、海外留学中の者も免除されるので、留学が増えている。最近、軍内の暴力で死者が出る不祥事があったので、兵役忌避ムードがある。』

#### <モンゴルにおける日本の関わりについて>

『トヨタが最強。しかもプリウスが燃費が良いので人気。新車はほとんどなく、皆中古車を買っている。あまりにもプリウスが多いので、こんな小咄がある。「ある遊牧民の老人が、もう遊牧生活ができなくなったので都会暮らしをしようと思ってウランバートルに来て、タクシーの運転手に尋ねた。車を買おうと思うが、皆が乗っているプリウスとはどんな車か。タクシーの運転手が答えた。前を走っているのがプリウス、右を走っているのがプリウス、左を走っているのがプリウス、後ろを走っているのがプリウスだ。老人いわく、外見は分かったが、中はどうなっているのか。運転手曰く、この車の中を見なさい。」今のところ、日本よりも韓国文化の方が人気で、ウランバートル市内には韓国料理屋が多い。24時間営業のコンビニができたのは7、8年前で、CUとGS25の2社あるが、いずれも韓国企業だ。自分も9月にはいったんガイドを辞めて韓国の大学院に進学する。韓国からも多くの人々がモンゴルに来ている。乗用車はトヨタだがバスはほとんどヒュンダイだ。でも、日本もラーメン、アニメが人気だ。モンゴル人はもともとラーメンを主食だと思っていなかったが、最近は主食になりつつある。トヨタ以外で存在感のある日本企業はトイレのTOTOだ。空港からウランバートルまでのモンゴル唯一の高速道路も円借款で建設された。』



図 22 ウランバートル市内に多いトヨタ車 (筆者撮影)

【フィールドワークを終えての考察】

<9本の白い「トゥグ」について>

ナーダム開会式の時に目にした9本の白い「トゥグ」を、モンゴル国民が非常に大切にしているのが印象的であった。社会主義体制が終わり、1992年に民主主義に基づく新憲法を制定したモンゴル国は、「チンギス・ハン」を新たな国民のアイデンティティとした。チンギス・ハンゆかりの「9本の白いトゥグ」を100頭の白馬の毛を使って再現し、憲法で「国民統合の象徴」と定めた。普段は国会議事堂に収められているが、年に一度の「国家ナーダム」に際して、儀仗兵によって街を練り歩いたあと、ナーダム会場に掲げられる。「戦時の5本の黒いトゥグ」も作られたが、これは国会議事堂から出ることはない。

トゥグは、チンギス・ハンが1206年に即位した「クリルタイ」で掲げられたという記録がある。

『こうして、フェルトの帳幕をもつ民人を征定して虎の年、オナン河の源頭に集まり、九脚の白旄を立てて、チンギス合罕に「罕」の名をそこに与えた。』（『元朝秘史（下）』小澤重男訳・岩波文庫、p. 61）

三叉戟に布と黄金の傘、馬の毛をつけた権力の印であり、歴代ハーンの座所に、平時は白色、戦時は黒色のものが掲げられた。チンギス・ハンのは9本だが、その後継者は8本を使用した。オスマン・トルコ帝国にも受け継がれたが、チンギス・ハンの血統ではないため、7本にしたという。クリミア・ハン国では「ブンチューク」と呼ばれ、8本を使用した。ウクライナのコサックを経て、ポーランドでも使用された。現ポーランド軍でも使用されており、ここにもユーラシアを制覇したモンゴル帝国の遺産を見ることができ



図 23 チンギス・ハンがクリルタイで即位した図に見える白いトゥグ（『集史』パリ本の挿絵）出典：Wikipedia commons



図 24 オスマン帝国の第1回ウィーン包囲（1529年）を描いたミニアチュール（細密画）に見える戦時の黒いトゥグ（出典：<https://www.meisterdrucke.jp/fine-art-prints/Islamic-School/63426/>）



図 25 ウクライナ・コサック（左）とクリミア・ハン国（右）の戦いの図に見えるブンチューク（出典：Wikipedia commons）



図 26 現代ポーランド軍のブンチューク（出典：Wikipedia commons）

<現代日本とモンゴルの関係について>

このフィールドワーク期間、2025年7月6日から同13日にかけて、天皇皇后両陛下はモンゴル国を訪問された。今上天皇は、皇太子時代の2007年にもモンゴル国を訪問され、ナーダム開会式を観覧されたが、天皇として、さらに皇后を伴っての訪問は史上初めてである。

両陛下の訪問に際しては、モンゴル国より再三の要請があったとのことである。チンギス・ハーン国際空港に政府専用機で到着された両陛下には、モンゴル人が賓客をもてなすのに使う伝統的な乳製品菓子「アーロール」が供され、スフバートル広場で開催された盛大な歓迎式典には朝青龍関、日馬富士関、白鵬関といったモンゴル力士も参列した。この歓迎に応え、大統領夫妻主催の晩餐会では、天皇陛下は馬頭琴楽団とともに自らヴィオラを演奏された。両陛下は、モンゴル滞在中、モンゴルにおけるシベリア抑留の日本人死亡者慰霊碑への供花のほか、ナーダム開会式と競技の観覧、博物館、教育施設、病院、水利施設、モンゴル仏教寺院、自然公園などを精力的に訪問され、モンゴル文化への強い興味と深い理解を示された。モンゴルの国を挙げての熱狂的な歓迎ぶりを目の当たりにして、その理由について考えた。

モンゴルは、モンゴル帝国時代にはユーラシアに広大な領土を保有したが、今は、現地ガイドの言うように、大国ロシアと中国に挟まれた小国となっている。歴史的にも、近代には、清朝の崩壊に伴い独立を試みたが、なかなか果たせず、ロシア帝国の力を借りてようやく独立できたが、ロシア帝国が社会主義国ソ連となると、その衛星国となり、共産党の支配下で抑圧を受けることとなった。それでも、中国に支配されるよりは、と考えている人が今も多いようだが、苦難の歴史といってよい。そして現代も、強権国家に挟まれ、逆にその均衡を利用して独立と平和を守っている。しかし、激動の国際情勢の中では不安定であり、薄氷を踏むような状態である。2024年秋には、プーチン大統領の訪問を受け入れざるを得なかった。モンゴルには、条約に基づきなぞプーチン氏を逮捕しなかったのか、という非難が世界から寄せられたが、ロシア大統領を逮捕すればモンゴル国はロシア軍の侵攻を受けること必定である。プーチン大統領の訪問は、ノモンハン事件（モンゴル

側ではハルハ川戦争と呼称)でのソ連・モンゴル連合軍の、日本関東軍に対する戦勝記念という、モンゴルが断りにくい名目であった。プーチンとしては、モンゴルに、ロシアの恩を忘れるな、という威圧をかけたつもりである。

モンゴルは、ソ連の崩壊をきっかけに社会主義から脱し、民主化を果たしたが、逆に民族、国民を統合するアイデンティティが無くなってしまった。そのため、かつての栄光に劣るようになり、モンゴル帝国、そして英雄チンギス・ハンを国民統合の象徴に据えた。今、小国モンゴルに圧力をかけているロシアも、中国も、モンゴル帝国時代には、逆にモンゴルの支配下にあったのである。ウランバートル郊外には巨大なチンギス・ハン像が聳え、ナードム開会式でも大きなチンギス・ハンの肖像が掲げられていた。紙幣もすべてチンギス・ハン像であり、新しい国際空港名にも英雄の名を冠した。

本論文でも、チンギス・ハンの聖なる血統について研究されている。そして、その血統が、近代に至るまで脈々と尊ばれてきたことは、フィールドワーク(1)で取り上げた家系図が証明している。一方、世界の王室で最も古いとされているのが日本の天皇家である。「万世一系」が科学的に証明されているわけではないが、起源も定かではないほどに古い血統が、現代まで続いているのは世界史上稀有である。さらに、天皇の名で行われたあの戦争の惨禍を経ても、責任を問われるどころか、今も日本国民統合の象徴として敬愛を集めているのも、世界の人々から見れば奇跡のようなことであると思われる。

これは、アイデンティティを求めているモンゴルにとって非常に羨ましいことに違いない。それだけに、聖なる血統をもつチンギス・ハンと、日本の天皇を結び付けて、自国のアイデンティティを強化したい、ということが、天皇訪問を切望した理由ではないだろうか。対外的にも、中ロとは外交上の友好関係維持と経済依存を維持せざるを得ないが、日本に「第4の隣国」として「本当の友人」となることを求めているのである。

ロシア、中国から大国圧力を受けているのは、日本も同様である。せっかくモンゴルが日本の価値を認め、より関係を強化したい、と考えてくれているのだから、日本も、アジアの安定のため、これに積極的に応えるべきではないだろうか。すでに、国際空港や高速道路の建設には円借款が使われており、冬には零下40度になるというウランバートルの路線バス停留所には、JICAが寄付したシェルターが設置されている。また、厳冬には暖をとる石炭の煤煙で大気汚染がすさまじい首都にあって、寒気にも故障せず、また排気ガスの少ないトヨタのプリウスを市民は愛している。しかし、モンゴルから日本への留学生はまだ少ない。もっと民間の交流を活発にし、アジアの友人として絆を深めるべきと考える。

## フィールドワーク(3): 東京国立博物館見学

### 1) 開催日・場所

開催日: 2025年7月19日(水) 9:30~14:00

場 所: 東京国立博物館(東京・上野公園)

参加者: 藤川竜輔、三浦雄太、矢野雅大、佐藤力、阿達敏洋、菅沼孝陽

### 2) 内容

日本文化は古代よりシルクロードを通じて、アジア・ユーラシア大陸からの強い影響を受けて来た。文化交渉学をテーマに、東京国立博物館の収蔵文物から、それぞれの個人テーマの深掘りに関わる知見、情報を得るべく、見学を行った。

## フィールドワーク(4):モンゴル語によるミュージカル

### 『モンゴル・ハーン』鑑賞

#### 1) 開催日・場所

開催日:2025年10月19日(日)16:30~19:00

場 所:東京国際フォーラム(東京・有楽町)

参加者:阿達敏洋、佐藤力、菅沼孝陽

#### 2) 内容

2022年に本国モンゴルにて180回以上のロングランとなり、観客10万5千人を動員した、モンゴル人によるモンゴル語ミュージカルが日本公演されることとなった。テーマは2000年前のモンゴル帝国に設定され、そのハーンの葛藤が描かれている。昨年度のフィールドワークで訪問したモンゴル大使館より、阿達ゼミ員に直接案内があったこともあり、またロンドン、シンガポールでも好評を博したということから、現代モンゴル人がどのようにモンゴル帝国の歴史を捉えているか、を体感するために、3名で鑑賞した。

華やかで迫力ある舞踏で、モンゴル帝国の栄光と騎馬民族の誇りが表現されている一方で、ストーリーは王族の愛憎が悲劇的な結末を生むという、深い二面性をもった内容であった。モンゴル帝国という存在を世界に知らしめたいという現代モンゴル人の思いが伝わってきた。

## 図目次

図 1 中国教科書抜粋 出典:『中外歴史綱要(上)』	33
図 2 中国教科書抜粋 出所:『中外歴史綱要(上)』	36
図 3 チェチェン・ハーン・ショロイから始まる世界最大級の家系図(筆者撮影)	46
図 4 家系図展示説明文の系譜部分(筆者撮影)	46
図 5 モンゴル帝国のハーン家系図 (出典: <a href="https://ethnos.takoffc.info/MongolGnlg.htm">https://ethnos.takoffc.info/MongolGnlg.htm</a> )	50
図 6 マーモット 出典:wikipedia commons	66
図 7 モンゴル力士と日本力士 出典:日刊スポーツホームページ	67
図 8 羊皮紙写本製作の様子 出典:Miracle de Notre Dame	73
図 9 海印寺・大蔵経経板閣の内部にある版本 出典:ユネスコ世界記録遺産	75

図 10	1568年に描かれた印刷所の様子。一時間に240枚を印刷。出所：鶴見大学図書館所蔵見大学図書館所蔵.....	80
図 11	匈奴時代の文物（モンゴル国立博物館）（筆者撮影）.....	106
図 12	国会議事堂から出る「9本のトゥグ（平和の旗）」（筆者撮影）.....	107
図 13	スタジアムに入場するトゥグ（筆者撮影）.....	107
図 14	フレルスフ大統領による開会宣言（筆者撮影）.....	107
図 15	貴賓席の天皇皇后両陛下（筆者撮影）.....	108
図 16	馬の曲乗り（筆者撮影）.....	108
図 17	ナーダム開会式のフィナーレ（筆者撮影）.....	108
図 18	ナーダム競技の競馬（4歳馬レース）（筆者撮影）.....	109
図 19	ナーダム競技のブフ（筆者撮影）.....	110
図 20	大統領のエスコートで弓射場に到着した天皇皇后両陛下（筆者撮影）.....	110
図 21	ナーダム会場においてフレルスフ大統領の弓射を観覧される天皇皇后両陛下 出典：宮内庁ホームページ.....	111
図 22	ウランバートル市内に多いトヨタ車（筆者撮影）.....	113
図 23	チンギス・ハンがクリルタイで即位した図に見える白いトゥグ（『集史』パリ本の挿絵）出典：Wikipedia commons.....	113
図 24	オスマン帝国の第1回ウィーン包圍（1529年）を描いたミニアチュール（細密画）に見える戦時の黒いトゥグ（出典： <a href="https://www.meisterdrucke.jp/fine-art-prints/Islamic-School/63426/">https://www.meisterdrucke.jp/fine-art-prints/Islamic-School/63426/</a> ）.....	114
図 25	ウクライナ・コサック（左）とクリミア・ハン国（右）の戦いの図にみえるブンチューク（出典：Wikipedia commons）.....	114
図 26	現代ポーランド軍のブンチューク（出典：Wikipedia commons）.....	115

## 執筆担当

項目	執筆担当
はじめに	菅沼孝陽
第1章 パックス・モンゴリカの成立に影響を与えたモンゴル民族の精神文化	五十嵐郁一
第2章 中国の教科書から見る歴史観	馬尚慶
第3章 パックス・モンゴリカにおけるモンゴル帝国の広域統治と多民族支配の仕組みから、現代の組織文化の在り方を学ぶ	中里健吾
第4章 モンゴル帝国の血統主義と女性の果たした役割及び現代への継承	佐藤力
第5章 チンギス・ハンの戦略的意思決定に学ぶ感情の転換ーホラズム遠征における「情動」と戦略のメカニズム	小谷田篤
第6章 モンゴル帝国における伝統音楽の役割	藤川竜輔
第7章 モンゴル帝国を支えた食文化	矢野雅大
第8章 モンゴル相撲ブブの広がり	三浦雄太
第9章 モンゴル帝国における多言語政策と印刷文化の展開ー記録媒体の歴史的転換と高麗の位置づけを含む再検討ー	阿達敏洋
第10章 モンゴル帝国時代と茶:文化的緩衝材としての茶の価値と文化的意義	中村淳
第11章 モンゴル帝国の自由貿易期における琉球の発展	菅沼孝陽
第12章 総括と今後の課題	菅沼孝陽
フィールドワーク記録	菅沼孝陽
おわりに	菅沼孝陽

# 参考文献

## 書籍

1. Chinggis khaanii Magtaal-Batzorig Vaanchig May, Timothy (2012)
2. ジャック・ウェザーフォード『パックス・モンゴリカ』(NHK出版、2006)
3. エドワード・ハレット・カー『歴史とは何か』(岩波書店、1962)
4. 森安孝夫『興亡の世界史 シルクロードと唐帝国』(講談社学術文庫、2007)
5. 島村一平『ヒップホップ・モンゴリア：韻がつむぐ人類学』(青土社、2021)
6. ブレナー・ブラウン『本当の勇氣は「弱さ」を認めること』(サンマーク出版、2013)
7. ラシード・アッディーン、赤坂恒明・金山あゆみ訳『集史「モンゴル史 部族篇」』(風間書院、2022)
8. フランシス・ロビンソン、小名康之訳『ムガル皇帝歴代誌 インド、イラン、中央アジアのイスラーム諸王国の興亡』(創元社、2009)
9. 川原秀城『中国の音楽文化 三千年の歴史と理論』(勉誠出版、2016)
10. 田中有紀『中国の音楽論と平均律』(風響社、2014)
11. 人民教育出版社編『中外歴史綱要(上冊・下冊)』(人民教育出版社、中国普通高等学校(高中)歴史必修教科書、2020)
12. 人民教育出版社編『中外歴史綱要(上)』(人民教育出版社、中国義務教育(初中)歴史教科書、2020)
13. 寺島実郎『人間と宗教あるいは日本人の心の基軸』(岩波書店、2021)
14. 小島毅『紙の東アジア史』(汲古書院、2003)
15. 小澤重男(訳注)『元朝秘史』(岩波書店、1997)
16. 小長谷有紀『モンゴル帝国の歴史 遊牧民の世界と大帝国の形成』(講談社、2004)
17. 岡田英弘『モンゴル帝国の興亡』(講談社現代新書、1996)
18. 岡田英弘『世界史の誕生—モンゴルの発展と伝統』(筑摩書房、1999)
19. 岡田英弘『チンギス・ハーンとその子孫—もうひとつのモンゴル通史』(ビジネス社、2016)
20. 朴尚煥『高麗金属活字文化史』(ソウル大学出版部、2001)
21. 竹田武史『茶馬古道の旅』(淡交社、2010)
22. 熊倉功夫『茶の湯の歴史』(朝日新聞社、1990)
23. 学校茶道教本編集委員会『裏千家茶道』(財団法人今日庵、2004)

24. 杉山正明『興亡の世界史 モンゴル帝国と長いその後』（講談社学術文庫、2016）
25. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡（上・下）』（講談社現代新書、1996）
26. 杉山正明『大モンゴルの世界：陸と海の巨大帝国』（角川書店、1996）
27. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡』（講談社現代新書、2004）
28. 杉山正明『クビライの挑戦 モンゴルによる世界史の大転回』（講談社、2009）
29. 杉山正明『モンゴル帝国と大元ウルス』（京都大学学術出版会、2004）
30. 森安孝夫『興亡の世界史 シルクロードと唐帝国』（講談社学術文庫、2016）
31. 楊海英『モンゴル帝国 草原のダイナミズムと女たち』（講談社、2024）
32. 檀上寛『陸海の交錯 明朝の興亡』（岩波新書、2020）
33. 白石典之『チンギス・カンとその時代』（勉誠出版、2015）
34. 荒川正晴 他『構造化される世界 14～19世紀（岩波講座世界歴史11）』（岩波書店、2022）
35. 中島楽章『琉球王国の南海貿易 「万国津梁」の200年』（吉川弘文館、2025）
36. 高良倉吉『アジアのなかの琉球王国』（吉川弘文館、1998）
37. 高良倉吉『琉球王国史の探求』（榕樹書林、2011）
38. 上里隆史『海の王国・琉球 「海域アジア」大交易時代の実像』（ボーダーインク、2018）
39. 高梨修・阿部美菜子・中本謙・吉成直樹『沖縄文化はどこから来たか グスク時代という画期』（森話社、2009）
40. 赤嶺守『琉球王国 東アジアのコーナーストーン』（講談社選書メチエ、2004）
41. 外間守善『沖縄の歴史と文化』（中公新書、1986）
42. 余並岳生『新琉球王統史2 察度王 南山と北山』（新星出版、2005）
43. 安里進『グスク・共同体・村 沖縄歴史考古学序説』（榕樹書林、1998）
44. 来間泰男『琉球王国の成立と展開 よくわかる沖縄の歴史』（日本経済評論社、2021）
45. 村井章介『古琉球 海洋アジアの輝ける王国』（角川選書、2018）
46. 岩井茂樹『朝貢・海禁・互市 近世東アジアの貿易と秩序』（名古屋大学出版会、2020）
47. 檀上寛『シリーズ中国の歴史④ 陸海の交錯 明朝の興亡』（岩波新書、2020）
48. 上田信『中国の歴史9 海と帝国 明清時代』（講談社学術文庫、2021）
49. 比嘉佑典『今帰仁雄神 女神国の行方と琉球王国（上巻・下巻）』（ゆい出版、2022）
50. 吾妻重二編著『文化交渉学のパーспекティブ-ICIS国際シンポジウム論文集』（関西大学出版部、2016）

51. 杉山正明『中国の歴史8 疾駆する草原の征服者』（講談社学術文庫、2021）
52. 森安孝夫『興亡の世界史 シルクロードと唐帝国』（講談社学術文庫、2016）
53. 吾妻重二編『文化交渉学のパースペクティブ』（関西大学出版部、2016）
54. 道中华『耶律楚材与元初政治』（中国社会科学出版社、2022）
55. E・D・フィリップス『チンギス・ハーンとその後継者たち』（学生社、1976）
56. 佐口透『モンゴル帝国と西洋』（平凡社、1970）
57. ジョン・マン『チンギス・カン』（東京書籍、2006）
58. Anne F. Broadbridge 『Women and the Making of the Mongol Empire』（Cambridge University Press, 2018）
59. Tomas T. Allsen 『Culture and Conquest in Mongol Eurasia』（Cambridge, 2001）
60. Jack Weatherford 『The Secret History of the Mongol Queens』（Broadway Books, 2010）

## 学術論文

1. 冯吉娜「『遼宋夏金多民族政権の並立と元朝の統一』中的歴史人物」『教学内容研讨』第10期, 广东实验中学 (2025)
2. 劉熙「学生の問題解決に基づく史料実証型授業の実施——七年級下冊『元朝の建立と統一』を例として」『歴史教学』第11期, 福建省教育科学規劃課題成果 (2025)
3. 四日市康博「モンゴル帝国の駅伝制と商業ネットワーク」『歴史と地理』(2010)
4. 内藤直樹「草原社会における農耕と遊牧の併存について」比較社会文化研究、第11号 (2017)
5. 乔杰「『遼宋夏金多民族政権の並立と元朝の統一』关键问题解读」『教学内容研讨』第10期 (2025)
6. 丁燕「他者文化の建構と自我文化の認識——『忽必烈汗』におけるモンゴル人形象の研究」『外国文学評論』(2025)
7. 富川力道「伝統的モンゴル相撲の近代的再生をめぐって」『スポーツ人類學研究』第5号、p. 19-40 (2003)
8. 内村圭「カップファ包圍戦と生物兵器論の再検討」西洋史研究、第32号 (2020)
9. 王卓爾・神田誠仁・松垣麻人「日本企業の買収後における買収の成否と海外子会社の自律性及び文化的距離の関係性について」『早稲田大学社会科学総合研究別冊』pp. 177-190 (2023)

10. 飛田努「日本企業の組織文化・経営理念と財務業績に関する実証分析—2000年代における日本的経営を考察する手掛かりとして—」『立命館経営学』第48巻第5号, p. 61-78 (2010)
11. 船田善之「元朝の多元的統治構造—イルハン朝・元朝を中心に」『史学雑誌』118 (12), pp. 1-28 (2009)
12. 船田善之「モンゴル帝国(大元)史研究における漢語文書史料について」『歴史と地理』649, pp. 54-55 (2011)
13. 松田孝一「元代モンゴル高原とカラコルム」『東洋史研究』64(1), pp. 33-65 (2005)
14. 村岡倫「元代におけるケシク制度の展開」『史学雑誌』122(6), pp. 1-35 (2013)
15. 四日市康博「モンゴル帝国のジャムチ(駅伝)制度と東西交流」荒川正晴ほか(編)『岩波講座世界歴史10 モンゴル帝国と海域世界』岩波書店, pp. 115-142 (2010)
16. 宮脇淳子「ロシアにおけるチンギス統原理」、ロシア史研究会 (1996)
17. ソーハン・ゲレルト『モンゴル帝国時代におけるハーンたちの世界観について』(東西南北vol. 2003 p. 68-86, 和光大学総合文化研究所、2003)
18. バイカル『モンゴルのオルドス地域におけるキリスト教の過去と現在—ウーシン旗の「エルケウン」について』(人文科学研究『人文研究』編集委員会編 (4) p99-115、桜美林大学、2013)
19. 本田実信「モンゴル帝国と宗教政策」『東洋史研究』 (1991)
20. 村岡倫「モンゴル帝国におけるケシク制度の研究」『東洋史論集』 (2013)
21. 松田孝一「元朝における色目人の役割」『史林』 (2005)

## Webページ

1. デロイト トーマツ コンサルティング(2018)「海外M&A、「成功」37% 日本企業、新規事業は失敗多く」『日本経済新聞』2018年5月29日
2. <https://www.nikkei.com/article/DGKKZ031044380Y8A520C1EE9000/>
3. (2025年12月8日閲覧)
4. チンギス統原理
5. <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%81%E3%83%B3%E3%82%AE%E3%82%B9%E7%B5%B1%E5%8E%9F%E7%90%86> (2025年12月8日閲覧)
6. World History Encyclopedia “Hanji - Traditional Korean Paper”
7. 真野信治 チンギス・カン一族とその系譜
8. <https://www.yokoreki.com/wp-content/uploads/2019/07/%E3%83%81%E3%83%B3%E3%82%AE%E3%82%B9%E3%82%AB%E3%83%B3%E4%B8%80%E6%97%8F%E3%81%A8%E3%81%9D%E3%81%AE%E7%B3%BB%E8%AD%9C.pdf> (2025年12月8日閲覧)

9. 国立民族学博物館「モンゴル遊牧民の生活と食文化」
10. <https://www.minpaku.ac.jp> (2025年12月8日閲覧)
11. Amusing Planet “The Tripitaka Koreana” <https://www.amusingplanet.com/2021/10/tripitaka-koreana.html> (2025年12月8日閲覧)

# 謝辞

最後に、本論文を作成するにあたり、インターゼミ主宰の寺島実郎学長をはじめとする多くの先生方、卒業生より、毎回のゼミにおいて高い視座と広い視野から多くの助言をいただきました。

アジアダイナミズム班の指導教員である金美德教授、越田辰宏教授には、テーマ設定から文献研究、論文執筆に至るまでの研究の大きな指針と共に、モンゴル帝国史のみならず、アジア・ユーラシア史およびグローバル・ヒストリーから紐解く現代的意義、現代に生きる我々が持つべき視座についてきめ細かい指導をいただきました。

この場を借りて、本論文を執筆するにあたりご協力いただいた全ての皆さまに感謝の意を表します。誠にありがとうございました。

2026年1月24日

多摩大学インターゼミ(社会工学研究会)

アジアダイナミズム班一同

## 付録 最終発表スライド

2025年度アジアダイナミズム班 最終発表



# 「パックス・モンゴリカ」時代の 文化交流史

## ～文化交渉学の視点から～

第17期社会工学研究会  
アジアダイナミズム班

学部生 : 藤川竜輔、三浦雄太、矢野雅大  
大学院生 : 菅沼孝陽、佐藤力、阿達敏洋  
五十嵐郁一、中里健吾、中村淳  
馬尚慶、小谷田篤

指導教員 : 金美德教授、越田辰宏教授

### Agenda

1. 振り返り (2017年～2024年 論文のテーマ)
2. 研究目的・方法
3. 研究対象
4. 2025年度の研究テーマ・領域・成果
5. フィールドワーク
6. 参考文献
7. 年間スケジュール

## 1. 振り返り（2017年～2024年 論文のテーマ）

モンゴル帝国史の8年間の研究（今年で9年目！）

年度	タイトル	頁数
2017	モンゴル帝国のユーラシア興隆史	107
2018	モンゴル帝国の興隆と衰退	244
2019	モンゴル帝国と朝鮮半島	84
2020	パンデミックのユーラシア史とポストコロナ	118
2021	倭寇とモンゴル帝国史～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～	106
2022	華人華僑とモンゴル帝国史	81
2023	モンゴル帝国の衰退から見る宗教と統治	89
2024	モンゴル帝国の遺産	229

2017年度～2021年度の論文が書籍として出版されました(2023/3/30発売 全240頁)



## 2. 研究目的・方法

- ✓ アジア班が目指す論文は、歴史の視点から「**現代的意義**」を見出す
- ✓ 「**文献研究とフィールドワーク**」を中心に研究活動を行う
- ✓ 研究テーマに対して「**文化交渉学**」を参考にしたアプローチを行う
- ✓ フィールドワークは「**博物館**」の文物視察や「**現地訪問・体験**」を行う

## 3. 研究対象：「パックス・モンゴリカ」とユーラシアの文化交流

### パックス・モンゴリカとは

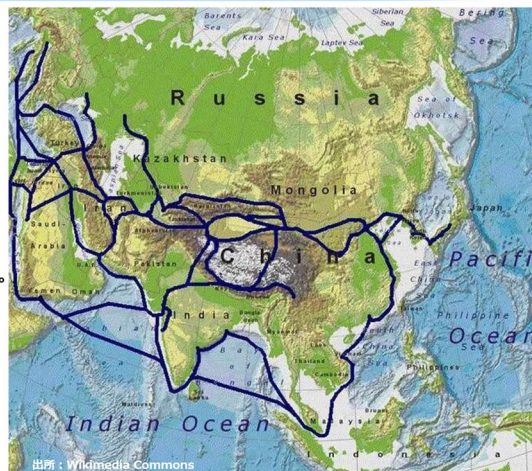
1206年のチンギス・ハン即位から1368年の明朝成立まで、ユーラシア大陸を支配したモンゴル帝国の覇権による安定した時代を、パックス・ローマ（ローマの平和：1～2世紀）になぞらえた言葉である。（パックス（PAX）はラテン語で「平和」の意）

モンゴル帝国の最盛期の領土は約3,300万km<sup>2</sup>、地球上の陸地の約17%を占め、人類史上、大英帝国に次ぐ2番目の大きさであり、人口は約1億人に及んだ。

本論文では「モンゴル帝国の支配による広域にわたる政治的安定によって、分断されていた地域が繋がりが、人々が自由に往来できるようになり、文化交流が栄えた時代」という主旨で使用する。

Cf. パックス・ブリタリカ（19世紀の大英帝国最盛期）

パックス・アメリカーナ（20世紀のアメリカ覇権）



#### 4. 2025年度の研究テーマ

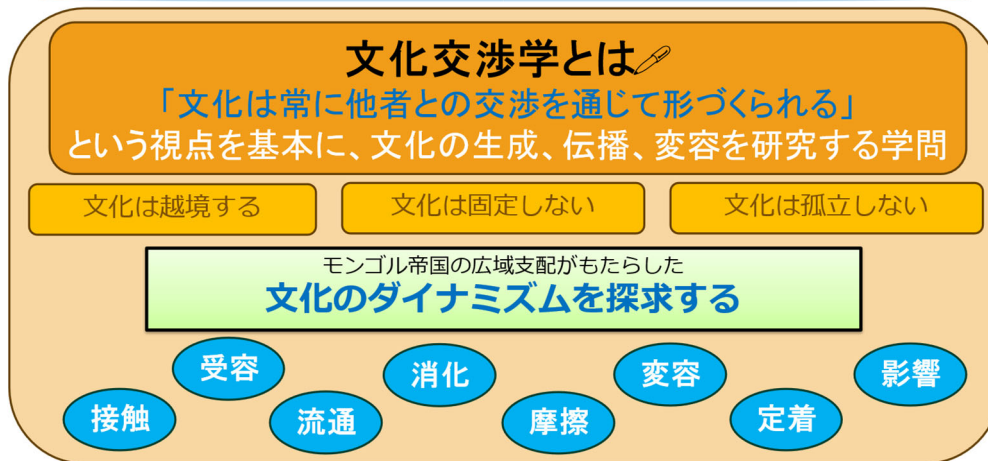
##### 問題意識

- 13～14世紀にモンゴル帝国の統治が実現した広域支配圏とその安定（パックス・モンゴリカ）は、分断された地域を結びつけ、異文化の交流を活発化させた。
- 「パックス・モンゴリカ」による文化交流のダイナミズムを、環ユーラシア交易網が実現した物産・技術・文化の相互交流の探求によってあぶり出したい。
- 現在、自国第一主義、戦争・紛争、宗教対立など、世界で進む分断化の動きに対し、モンゴル帝国の歴史から得られる教訓は何か。

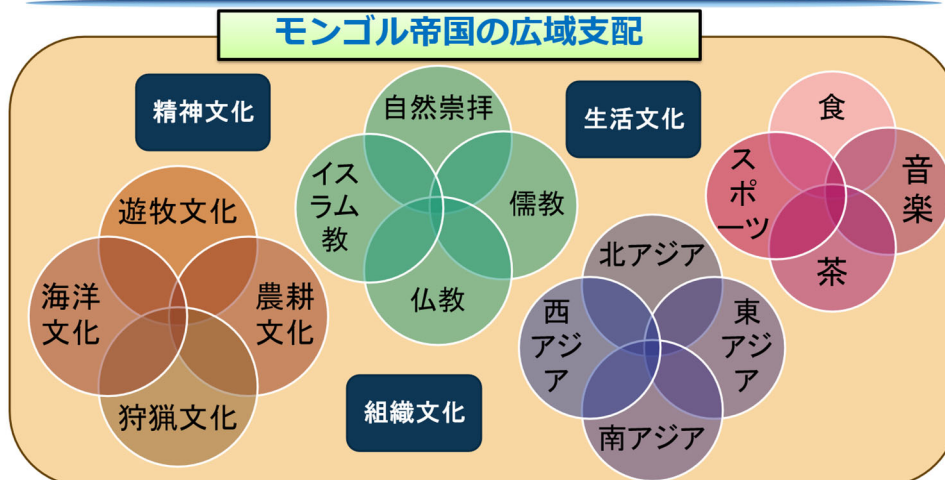
##### 研究課題

- 「パックス・モンゴリカ」による広域交易、経済圏を実現したモンゴル帝国の統治機能
- 3つの交易路（ステップロード<草原の道>、シルクロード<オアシスの道>、マリロード<海の道>）の果たした役割
- 交易された物産、伝播した技術の歴史的意義
- モンゴル帝国が果たした文化圏同士の文化交流を「文化交渉学」の視点で考える

#### 4. 「パックス・モンゴリカ」への文化交渉学的アプローチ



#### 4. 「パックス・モンゴリカ」への文化交渉学的アプローチ



## 4. 研究論文担当

カテゴリー	章	タイトル	執筆担当
精神文化	第1章	パックス・モンゴリカの成立に影響を与えたモンゴル民族の精神文化	五十嵐 郁一
	第2章	元朝、チンギス・ハーン、フビライ・ハーン中国の教科書から見る歴史観	馬 尚慶
組織文化	第3章	パックス・モンゴリカにおけるモンゴル帝国の広域統治と多民族支配の仕組みから、現代の組織文化の在り方を学ぶ	中里 健吾
	第4章	モンゴル帝国の血統主義と女性の果たした役割及び現代への継承	佐藤 力
	第5章	チンギス・ハーンのリーダーシップに学ぶ「感情の転換」	小谷田 篤
生活文化	第6章	モンゴル帝国と中国の伝統音楽の歴史と感性	藤川 竜輔
	第7章	モンゴル帝国の繁栄を支えた食文化	矢野 雅大
	第8章	モンゴル相撲ブブの広がり	三浦 雄太
	第9章	モンゴル帝国における多言語政策と印刷文化の展開	阿達 敏洋
	第10章	モンゴル帝国時代と茶：文化的緩衝材としての茶の発展	中村 淳
	第11章	モンゴル帝国の自由貿易期における琉球の発展	菅沼 孝陽

### 精神文化：パックス・モンゴリカの成立に影響を与えたモンゴル民族の精神文化（五十嵐）

#### 研究テーマ

- 中国で生まれた茶の歴史、モンゴル民族の精神文化は「パックス・モンゴリカ」の成立にどのような影響を与えたのか？
- 未来に向けて、分断と対立を超えた安定的国際平和秩序の構築に活かせる教訓とは何か？

#### 研究結果概要

1. モンゴル民族にとって、自然崇拝的な「 Tengri教」が精神的支柱となっていた。
2. モンゴル民族社会において、生命創造の象徴である「母性原理」が霊性・教育・共同体形成の中心に位置していた。
3. 「Tengri教」と「母性原理」が、「根源的生命力尊重」とでもいうべきモンゴル民族の精神文化の基礎を醸成した。
4. その「根源的生命力尊重」が、特定の教義や制度宗教を超えて、複数の宗教的価値観や宇宙観を包摂・調和しうる超越的な精神文化の枠組みとなっていた。そのことが、多宗教・多文化の共存を可能にする帝国統治の包摂性につながり、パックスモンゴリカを成立させた。

#### 結論（考察）

「パックス・モンゴリカ」の成立に大きな影響をもたらしたのは、「根源的生命力尊重」というべき精神文化であった。それを教訓に、「根源的生命力尊重」を現代的な「科学的自然敬愛精神」として昇華させ、国際社会で共有することが、分断を超えた新たな平和秩序の構築をもたらす。

#### 「科学的自然敬愛精神」の五原則～生命の奇跡を守り共生の未来を築く

- ① 生命への根源的敬意  
生命の奇跡に深い敬意を抱き、いかなる命も奪われるべきではないという倫理観を持つ。
- ② 科学と精神の統合的理解  
自然界の法則を科学的に探究しつつ、知性と感性の両輪で世界を捉える。
- ③ 争いの否定と平和の創造  
生命を脅かすあらゆる暴力を否定し、対話と共感による平和的秩序の構築を志す。
- ④ 多様性の尊重と倫理的共通項の発見  
宗教・文化・民族の違いを尊重しつつ、共通の相互敬愛精神を共有する。
- ⑤ 未来世代への責任と共生の実践  
自然と生命の尊厳を守ることを未来世代への責任と捉えて行動する。

著者：五十嵐 郁一 10

### 精神文化：中国の教科書から見る歴史観（馬）

#### 研究テーマ

- 元朝、チンギス・ハーン、フビライ・ハーンについて、中国の教科書から現代中国の歴史観を探る。

#### 研究結果概要

中国の中学・高校歴史教材では、元朝とモンゴル支配者（チンギス・ハーン・フビライ・ハーン）が、「征服者」ではなく多民族国家の統一を実現した政治的リーダーとして描かれていることが明らかになった。用語レベルでは「征服・侵略・支配」といった語が避けられ、「統一・融合・発展」などの肯定的語彙に言い換えられており、暴力性よりも統一と民族融合の物語が前面に出されている。中学教材は「統一と融合」、高校教材は「ユーラシア交流と世界的意義」を強調する構成で、教育段階に応じて焦点が変化する一方、いずれも元朝を「中華多民族統一国家の完成期」として位置づける点で共通している。これらの叙述は、「中華民族共同体」「大中華」など現代中国の国家理念と結びつき、モンゴルを含む多民族を「中華」の枠内に包摂する統合的歴史観を学習者に内面化させる役割を担っている。

#### 結論：

本研究から、中国の歴史教材において元朝は「異民族による征服王朝」としてではなく、「中華多民族統一国家の完成期」として位置づけられていることが明らかになった。

そこでは、モンゴルも「中華民族共同体」の一員として再定義され、元朝の歴史は「征服の歴史」ではなく「多民族が共に国家を築いた中国の発展の一段階」として語り直されている。したがって、教材の中で元朝は中国とは別の他者の王朝ではなく、「中国のもの」であり、中国自身の歴史として完全に取り込まれていると結論づけられる。

#### モンゴルは我が国

##### 元朝の建立

蒙古<sup>①</sup>は我々北方一个古老的民族、蒙古人善于骑射、逐水草而居、过着游牧生活。12世纪时，蒙古草原上分布着许多部落，相互间为争夺人口、草场、水源和牲畜而发生战争，人们盼望草原统一，结束战争。

1206年，铁木真完成蒙古草原的统一，建立蒙古政权。他被尊为大汗，尊称为成吉思汗。从此，蒙古草原结束了长期混战的局面。『侵略』ではなく『拡張』

随着蒙古的强大，成吉思汗发动了大规模的扩张战争。几十年里，成吉思汗和他的子孙除向东、向南对金、西夏和南宋作战外，还向西一直打到欧洲的多瑙河流域。1227年，蒙古军队灭西夏。1234年，蒙古灭金。此后与南宋形成了长达40多年的对峙局面。



成吉思汗（1162-1227）

① 蒙古、第12-13世纪世界历史上最重要国家之一，横跨欧亚大陆，对世界历史和文化产生深远影响。

著者：馬尚慶 11

## 組織文化：パックス・モンゴリカにおけるモンゴル帝国の広域統治と多民族支配の仕組みから、現代の組織文化の在り方を学ぶ（中里）

研究テーマ 【モンゴル帝国の「薄くゆるいつながり」による多民族統治から、現代のグローバル組織運営への示唆を探る】

- ▶ モンゴル帝国はいかにして広大な領土と多様な民族を統治したのか
- ▶ 「統合」ではなく「連結」というアプローチの有効性
- ▶ 現代の多国籍企業が直面する文化的多様性の課題への応用可能性

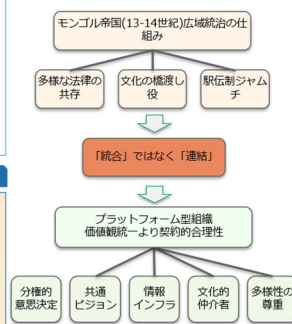
### 研究結果概要

- 1. 法的多元主義：各地域の法制度を維持**
  - ・征服地の法律や慣習を尊重し、画一的な法制度を押し付けなかった。中国では中国式、イスラム圏ではシャリーアを維持し、紛争時には「約会」という調停制度で解決した。
- 2. 能力主義による多民族登用**
  - ・契丹人の耶律楚材、ウイグル人のチンカイなど、征服された民族出身者を高官に登用。ケシク制度により多民族エリートを養成し、色目人が財政・商業の橋渡し役を担った。
- 3. ジャムチ（駅伝制）：帝国を連結するインフラ**
  - ・約30kmごとに駅を設置し、情報・物資・人の移動を支援。「薄いが強い」支配ネットワークを構築した。
- 4. 「統合」の限界と「ドライな合理性」の重要性**
  - ・強力な文化による価値観の統一は困難。むしろ「適度な無関心」と「契約的な合理性」が組織を持続させる。

結論：「薄くゆるいつながり」が多様性を力に変える

1. モンゴル帝国の統治は「**連結**」モデルであり、多様性を認めながら緩やかにつながることで広域支配を実現した。
2. 現代組織においても、画一的な統合よりも、各拠点の独自性を尊重し、共通のインフラと仲介者で**連結**する方が効果的である。
3. 従業員に過度な愛社精神を求めめるのではなく、「この組織に属することが合理的」という**納得感**を提供することが重要である。
4. 多様性が進む社会で持続可能なのは、カリスマではなく、参加するメリットを設計できる「**プラットフォーム型組織**」である。

### モンゴル帝国の広域統治から現代組織へ



著者：中里健高 12

## 組織文化：モンゴル帝国の血統主義と女性の果たした役割及び現代への継承（佐藤）

研究テーマ 「チンギス統原理」がモンゴル帝国に及ぼした影響と、男系男子を支えた女性の果たした役割について

- ▶ チンギス・ハンの家系の重要性、血統はどのように尊重され受け継がれて来たのか
- ▶ 男系男子を支えた女性の活躍とその役割について

### 研究結果概要

- 1. 「チンギス統原理」の確立**
  - ・モンゴル帝国では「チンギス・ハンの男系男子のみが正統な支配者である」という血統主義「チンギス統原理」が確立し、帝国全体の支配秩序を規定した。この原理は分裂後の各八・国にも引き継がれ、形式的な正統性の基盤として機能した。
- 2. 「チンギス統原理」の両義性：統合と分裂**
  - ・血統主義は帝国の安定と正統性を支えた一方で、後継者間の内戦を引き起こす要因にもなった。
- 3. 女性の政治的・文化的役割の顕在化**
  - ・女性は生活面及びモンゴル帝国の多宗教共存・文化交流を支える重要な媒介者であった。
- 4. 血統の拡散と現代への影響**
  - ・チンギス・ハンの血統は、血統による優遇や婚姻政策により広範囲に拡散し、遺伝的影響は現代にも及んでいる。

結論：血統主義は両義性を持ちながらモンゴル帝国の繁栄の基盤となり、女性は実質的差別者として活躍した

1. 「チンギス統原理」はモンゴル帝国統治の中核的イデオロギーであり、**帝国の政治的正統性を担保**した。
2. 血統主義は時代と地域を超えて変容しながら継承され、日本の天皇制や現代企業の**家系的継承意識**にも類似構造が見られる。
3. 女性は「男系社会の補完者」ではなく、実質的な**文化的調停者**として帝国の持続に寄与した。
4. 「パックス・モンゴリカ」の根底には、女性を含む**社会的ネットワークの調和的共存**があり文化帝国の形成を可能にした。



チンギス・ハンのシャロイから始まる世界最大級の家系図（著者撮影）

著者：佐藤力 13

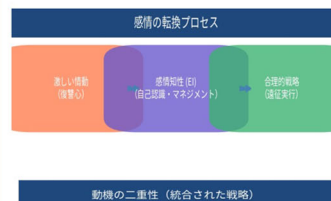
## 組織文化：チンギス・ハンのリーダーシップに学ぶ「感情の転換」（小谷田）

### 研究テーマ

▶ チンギス・ハンの戦略的意思決定に学ぶ感情の転換 –ホラズム遠征に見る感情知性（EI）に基づくリーダーシップの源泉–

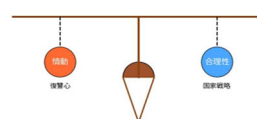
### 研究結果概要

- ・現代組織の課題：現代組織は、変革推進時に「合理性（効率化・成果主義）」と、それを阻害する「情動（非合理的な人間の感情）」という根深い衝突に直面している。
- ・チンギス・ハンの**合理的組織**：チンギス・ハンは、幼少期の裏切り体験から血縁や権威の非合理性を痛感し、能力主義による人材登用や駅伝制（ジャムチ）など、徹底した「合理的組織運営」を構築した。
- ・ホラズム遠征の「**二重性**」：彼のリーダーシップの核心は、ホラズム遠征に見られる。この遠征は、使節団を虐殺されたことへの激しい「復讐心（情動）」と、交易路の確保や地政学的脅威の排除といった「国家戦略（合理性）」という、二重の動機によって実行された。
- ・情動の「**エネルギー転換**」：彼はこの私的な激しい情動を、高度な感情知性（EI）一特に「自己認識」と「セルフマネジメント」一によって統制。「復讐心」を、国家戦略（公的な合理性）を達成するための「強大な推進エネルギー」へと意図的に転換し、「活用」した。



### 結論：


現代のリーダーも、自身の不安や怒りといった情動を単に抑圧・切り離すのではなく、まず「**自己認識**」する。そして、それを組織のビジョンや合理的な目標達成のための「**エネルギー**」として「**活用**」する**感情知性（EI）**こそが、不確実な時代における組織変革の鍵となる。



著者：小谷田 14


## 生活文化：モンゴルの伝統音楽、食文化、格闘技の特質と伝播（藤川・矢野・三浦）

### 共通意識：遊牧民が受け継いだ三伝統（紡ぎ繋いだ軌跡）

<p><b>研究テーマ</b> モンゴル帝国と中国の伝統音楽の歴史と感性（藤川）</p> <p>モンゴル・中国の音楽を比較し、それぞれの社会における音楽の位置づけや歴史的な文化交流、そして現代への継承についての研究をする。</p> <p><b>研究結果概要</b></p> <p>①モンゴルと中国の音楽思想 モンゴル→「自然との共鳴」と「精神性」を重視している。 ②中国→「秩序」や「調和」として考えられていた。</p> <p><b>結論：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>音楽は単なる文化交流ではなく、社会や宗教、世界観そのものを映し出す存在である。</li> <li>両者ともに根本的には異なるが、新しい音楽価値を生み出した。</li> </ul>	<p><b>研究テーマ</b> モンゴル帝国の繁栄を支えた食文化（矢野）</p> <p>広大な領域を保有し侵略を繰り返し、圧倒的な力を持ちながら成長していたモンゴル帝国の食文化を遊牧民の生活に沿って調査する。</p> <p><b>研究結果概要</b></p> <p>①遊牧と食→赤と白の食の二つを賢く使い分け食に飢えることはなかった。 ②食と黒死病→獲物であったマーモットをよく食していたことからモンゴル帝国で黒死病が流行した。</p>  <p>マーモット（リス科のげっ歯類） 出所：Wikimedia Commons</p> <p><b>結論：</b></p> <p>モンゴル帝国での食文化は遊牧生活に最適化されているものであり、狩りをした獲物の血や肉、皮まで余すことなく最大限活用していた。</p>	<p><b>研究テーマ</b> モンゴル相撲ブフの広がり（三浦）</p> <p>モンゴル相撲ブフの東アジアへの広がりや文化、欧米に広がらないのはなぜか研究する。</p> <p><b>研究結果概要</b></p> <p>①モンゴル相撲ブフが日本国にくるまでに中国、朝鮮を経て競技形は変わるが宗教、祭祀目的などは変化せず伝播してきた。 ②欧米はすでに宗教が定着していたので広がらなかった。</p> <p><b>結論：</b></p> <p>モンゴル帝国で栄えたブフは祭祀的、礼儀的文化を経てアジアに広がりを見せた。既に宗教的思想が根強く定着していた欧米にはつながらなかった。</p>
---	--	---

著者：藤川・矢野・三浦 15


## 生活文化：モンゴル帝国における多言語政策と印刷文化の展開（阿達）

<p><b>研究テーマ</b> 「記憶媒体の歴史的転換と後々の位置付けを含む再検討」</p> <p>➢ 武力帝国から情報帝国へどのように転換していったのか ➢ 知識インフラ国家としての高麗の位置付けは？ ➢ 記録媒体と技術による統治システムの分析</p> <p><b>研究結果概要</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>文書主義への転換と統治の可視化 軽くて低コストな「紙」の普及を背景に聖旨を紙文書として可視化し、駅伝制度を通じて広域に流通させ統治を持続。</li> <li>高麗が提供した技術的・物質的基盤 高麗は、耐久性と保存性に優れた紙を供給し、八万大蔵経に見られる高度な木版技術を有し、東アジアの技術センターとして機能する。</li> <li>多言語翻訳システムと「理解可能な命令」 モンゴル語の命令を各地域の言語（漢語、チベット語、ペルシア語等）へ翻訳・文書化する官僚機構を整備。</li> </ol> <p><b>結論：</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>情報インフラによる帝国の結合 モンゴル帝国は軍事力だけでなく、蔡倫以来の紙で権力を可視化し、印刷で知識を標準化し、独自の翻訳制度による多言語世界を連結した、史上稀に見る「情報帝国」であった。</li> <li>高麗の核心的役割 高麗は東アジア印刷文明の中核を担う存在であり、その製紙・印刷技術は帝国の行政実務や経済システム（紙幣）を底支えし、統治を持続可能とする要因となる。</li> <li>技術遺産の継承と世界的意義 この技術遺産は各方面に金属活字文化に継承され、紙と印刷の「情報技術」が巨大な多言語、多民族国家の統治を可能にしたことは、ユーラシア世界史において、極めて重要な意味を持つ。</li> </ol>	
--	---

羊皮紙写本製作の様子  
(Miracles de Notre Dameより)

著者：阿達敏洋 16

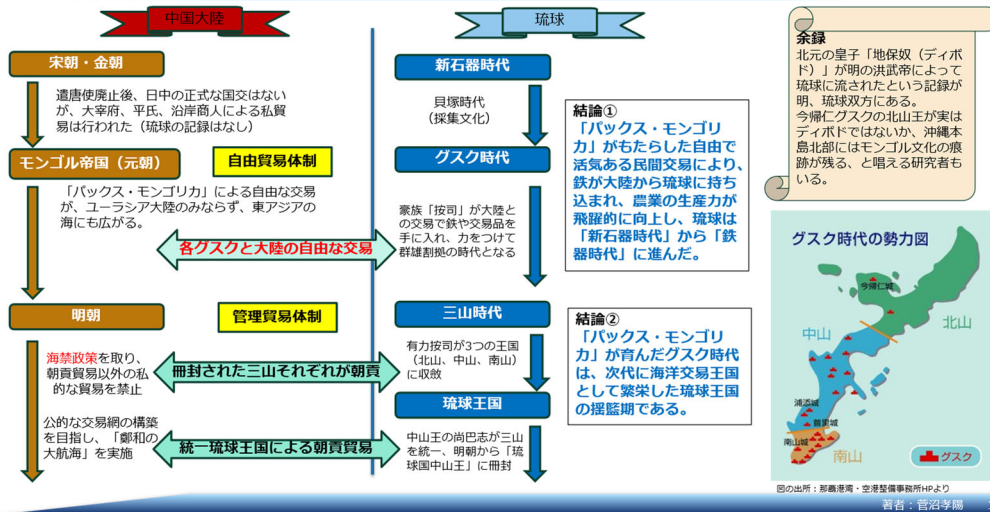
## 生活文化：モンゴル帝国時代と茶：文化的緩衝材としての茶の発展（中村）

<p><b>研究テーマ</b> 【文化的緩衝材としての茶の発展】</p> <p>➢ 中国で生まれた茶の歴史、その位置づけ、モンゴル帝国というユーラシア規模の支配体制の下で、茶がいかに交易・儀礼・思想の交差点として機能し、異文化間の接触、受容、平和に貢献してきたのか、そして混沌とする現在の世界状況においてこれからの茶が持つ意味を考察する。</p> <p><b>研究結果概要</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>シルクロード的文化融合 茶は中国・モンゴル・中央アジア・朝鮮・日本を結ぶ媒介となり、交易・儀礼・精神文化を横断的に結びつけた。</li> <li>茶の精神化・美学化 禅思想や武家文化と結びつき、日本では茶が修養・倫理・美意識を統合した独自の精神文化として体系化された。</li> <li>平和と対話の文化資源 茶は近代以降、国際交流・相互理解・心の平安を象徴する「文化的緩衝材」として位置づけられ、その普遍的価値が再認識された。</li> </ol> <p><b>結論：</b>茶は現代社会において“平和と共感を生む緩衝材”たり得る</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>茶が文化・宗教・民族を超えて共有される中立的媒介として、異文化交流を円滑にする役割を持つシルクロード以来の伝統を継承し、茶は今も国境・宗教・政治的立場を越えた普遍的コミュニケーション媒体として機能する。</li> <li>茶室の“間”と譲り合いの所作が、他者尊重・無言の対話・共感的コミュニケーションを形成する茶の湯空間の沈黙・間合い・礼の動作が、競争ではなく調和を基盤とした関係性を生み出す。</li> <li>“一椀からピースフルネスを”の思想が、心の安寧から世界平和へ至る道を示している 異千家騰雲斎が茶を国際交流・文化外交の軸に据え、個人の心の平和を起点に世界的平和を志向した。</li> </ol>	
--	--

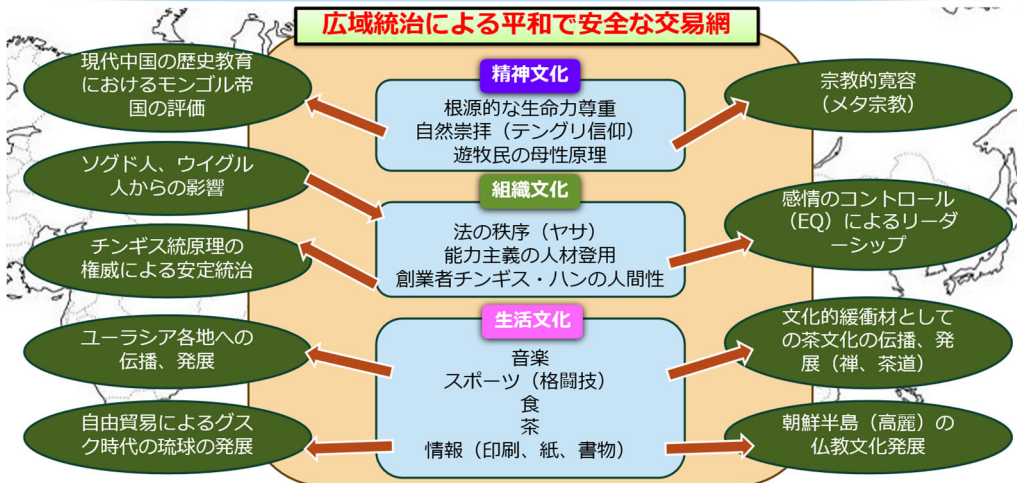
雲南省西双版納の茶樹 円茶（餅茶（へいちゃ））

著者：中村 淳 17

## 生活文化：モンゴル帝国の自由貿易期における琉球の発展（菅沼）



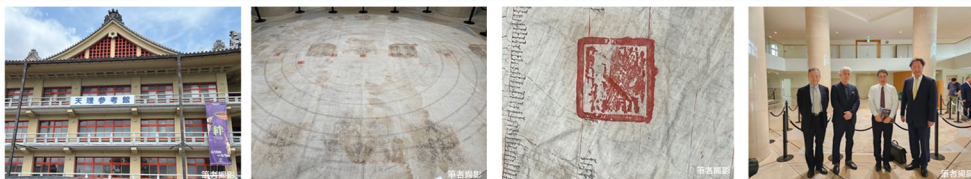
## 研究のまとめ：パックス・モンゴリカの文化交渉学



## フィールドワーク 天理大学附属天理参考館

### 天理大学附属天理参考館訪問 世界最大級の家系図 見学/意見交換

- 面談日時 : 6月1日（日）13:00～15:00
- 面談者 : 先方1名 天理大学附属天理参考館 学芸員 梅谷昭範氏（海外民族室）  
当方3名 大学院生（菅沼、佐藤）、指導教員（金）
- 内容 : 天理大学創立100周年記念第98回企画展-絆-ヒトとヒトをつなぐモノ-2025年4月16日～6月2日に展示されている**世界最大級の家系図（チンギス・ハンの子孫であるチエチエン・ハーン・シヨロイから始まり14世代に渡る）**の見学及び梅谷学芸員からの本展示内容の解説を頂く  
①本家系図が日本、そして天理大学に持ち込まれた歴史的背景は？  
②本家系図の特徴は？  
③モンゴル帝国にとっての家系図とは？  
④モンゴル独立後、ソ連統制下での家系図の位置付けは？



## フィールドワーク 天理大学附属天理参考館

世界最大級の家系図 – 直径555cm 記されているのは14世代11,966人、全て男系男子



### 【本家系図について】

●モンゴル帝国初代皇帝チンギス・ハンの男系子孫である**チェチェン・ハーン・ショロイ** (1577-1655) を始祖とする家系図

●ショロイはモンゴル南東部のハルハ部を治めたハーンの一人  
●ショロイ以降の後継者はいずれもチェチェン・ハーンを名乗った

### 【家系図の特徴】

●家系図の中心にはショロイの名前が記されており、そこから**同心円状に赤い線が世代毎**に区切られている

●**モンゴル文字+満洲文字**で記載されている

●文字が染みしていないことから、インクには膠（にかわ）を使用しているのではないか

●朱印は1カ所を除いて布と布のつなぎ目に割印する形で押されており、**偽造防止を目的**にしたものではないか

21

## フィールドワーク 天理大学附属天理参考館

モンゴル帝国での家系の重要性と現代へ至るまでの歴史を幅広く学ぶことが出来た

### ①本家系図伝来の歴史的背景

- 本家系図は1905年頃に作成
- どのように日本（天理大学）に持ち込まれたのか**不明**
- 恐らく戦前（1945年より前）の可能性
- モンゴルから避難させる目的か（？）

### ③ソ連統制下での家系図の位置付け

- モンゴルが1924年に独立後、ソ連の共産主義に支配された時代にチンギス・ハンの子孫は肅清、家系を表す資料は破壊或はどこかに持ち出し、避難された可能性あり
- ソ連統制下で**戸籍制度廃止**、また姓がなくなり家系が遡れなくなる

### ②モンゴル帝国での家系の重要性

モンゴルの遊牧民社会においては「チンギス統原理」という思想があり、チンギス・ハンの**男系男子のみ**が正統な支配者となる権利と考えられることが家系図の作り方にも影響

### ④本家系図の希少性

- 類似の家系図はモンゴルにも保管
- 直径530cm、12世代までの記載で本展示品より少し小さく朱印がない

22

## フィールドワーク モンゴル国の平和の祭典「ナーダム」2025

古代から遊牧民族に受け継がれた競技大会が、社会主義時代を経て、平和の祭典に

### ナーダムとは

起源は匈奴時代、紀元前3世紀にさかのぼるといわれ、「ブフ（相撲）」「競馬」「弓射」の「男の3競技」が競われる。現代にも受け継がれ、夏季にモンゴル国、中国・内モンゴル自治区の各地で行われており、2010年にユネスコの無形文化遺産に登録される。

### 国家ナーダム

社会主義時代の1921年に革命記念日である7月11日から3日間、首都ウランバートルの中央スタジアムで「国家ナーダム（イフ・ナーダム）」が国家行事として開催されるようになった。1990年の民主化後も、国を挙げての祭典として続いている。



2025年のナーダムにて、モンゴル国大統領スフバートル大統領の弓射をご覧になる天皇皇后両陛下  
出典：高内JHP

22

## フィールドワーク モンゴル国の平和の祭典「ナーダム」2025

国家ナーダムの開会式では、遊牧民族としてのアイデンティティが強調された



疾走する騎馬からの的を射る騎射



伝統の民族楽器、馬頭琴の合奏



年4回行われる遊牧民族の移動（ラクダに乗せたゲル）



野生馬を捕獲する道具



遊牧に重要な役割を果たす犬



国旗を掲げた騎手が会場を埋め尽くすフィナーレ

23

## フィールドワーク モンゴル国の平和の祭典「ナーダム」2025

国家ナーダムの主役、チンギス・ハンゆかりの平和の旗「9本の白いトゥグ」

### モンゴル国民統合の象徴「トゥグ」

社会主義体制が終わり、1992年に民主主義に基づく新憲法を制定したモンゴル国は、「チンギス・ハン」を新たな国民のアイデンティティとした。チンギス・ハンゆかりの「9本の白いトゥグ」を100頭の白馬の毛を使って再現し、憲法で「国民統合の象徴」と定めた。普段は国会議事堂に収められているが、年に一度の「国家ナーダム」に際して、儀仗兵によって街を練り歩いたあと、ナーダム会場に掲げられる。「戦時の5本の黒いトゥグ」も作られたが、これは国会議事堂から出ることはない。



普段、国会議事堂に置かれているトゥグ  
出典：Wikipedia commons



ナーダムの開会式のため、国会議事堂を出発するトゥグ



ウランバートル市内を行進するトゥグ



ナーダムメインスタジアムに入場するトゥグ

24

## フィールドワーク モンゴル国の平和の祭典「ナーダム」2025

国家ナーダムの主役、チンギス・ハンゆかりの平和の旗「9本の白いトゥグ」

### トゥグの歴史と伝播

トゥグは、チンギス・ハンが1206年に即位した「クリルタイ」で掲げられたという記録のある、三叉戟に布と黄金の傘、馬の毛をつけた権力の印。歴代ハーンの座所に、平時は白色、戦時は黒色のものが掲げられた。チンギス・ハンのもは9本だが、その後継者は8本を使用した。オスマン・トルコ帝国にも受け継がれたが、チンギス・ハン血統ではないため、7本にしたという。クリミア・ハン国では「ブンチューク」と呼ばれ、8本を使用した。ウクライナのゴサックを経て、ポーランドでも使用された。



ウクライナ・ゴサック（左）とクリミア・ハン国（右）の戦い  
出典：Wikipedia commons

左図：チンギス・ハンがハンに即位した1206年のクリルタイの図。  
（ラシードウッディーン『集史』パリ本[14世紀後半]の挿絵）  
出典：Wikipedia commons  
『こうして、フェルトの帳幕をもつ民人を征する年、オナン河の源頭に集まり、白旗を立てて、チンギス合軍に「罕」の名をそこに与え〜元朝秘史（『元朝秘史（下）』小澤重男訳・岩波文庫、p.61）



オスマンのウィーン包圍（1529）の図  
出典：Wikipedia commons



ポーランド軍のブンチューク  
出典：Wikipedia commons

25

## 6. 参考文献 【書籍：計36件】

書籍/論文	著者	書名	出版社	出版年
書籍	1 荒川正晴 他	構造化される世界 14～19世紀(岩波講座世界歴史1)	岩波書店	2022
書籍	2 中島幸華	琉球王国の南海貿易「万国津梁」の200年	吉川弘文館	2020
書籍	3 高島貴吉	アジアのなかの琉球王国	吉川弘文館	1989
書籍	4 高島貴吉	琉球王国の歴史	研文堂	2011
書籍	5 上里隆史	海の王国・琉球「海域アジア」大正時代の実像	ポニーインク	2018
書籍	6 高柳裕・阿部菜穂子・中本謙・百成直樹	沖縄文化はどこから来たか グスク時代といひ前期	西経社	2009
書籍	7 斎藤守	琉球王国 東アジアのコーナーストーン	講談社選書メヂエ	2004
書籍	8 外間守善	沖縄の歴史と文化	中央新書	1989
書籍	9 高島貴吉	琉球王国の歴史 第五巻 南山と北山	研文堂	2005
書籍	10 安里進	グスク・共同体・村 沖縄歴史学言序説	研文堂	1988
書籍	11 辻嘉佑典	沖縄に神神 女神の歴史古史(上・下)	けい出版	2022
書籍	12 津野隆男	琉球王国の成立と展開 よくわかる沖縄の歴史	日本経済新聞社	2021
書籍	13 村井重典	琉球 琉球アジアの歴史と王国	角川選書	2018
書籍	14 高井茂樹	朝鮮・琉球・互市 近世東アジアの貿易と秩序	名古屋大学出版会	2020
書籍	15 榎上寛	シリアと中国の歴史 陸海の交錯 朝顔の興亡	岩波新書	2020
書籍	16 上田信	中国の歴史 9 海上帝国 明清時代	講談社学術文庫	2021
書籍	17 杉山正明	中国の歴史 9 交戦する草原の征服者	講談社学術文庫	2021
書籍	18 森安孝夫	蒙古の歴史 シンクワーツと帝国	講談社学術文庫	2016
書籍	19 中島幸華	人間と関係あるいは日本人の心の基軸	岩波書店	2021
書籍	20 出口治明	全世界史	新潮社	2018
書籍	21 出口治明	医学と宗教全集	ダイヤモンド社	2019
書籍	22 杉山正明	モンゴルが世界史をどう変えたか	日経BPマーケティング	2006
書籍	23 杉山正明	モンゴルの興亡	講談社	1986
書籍	24 杉山正明	ケブライの戦い モンゴルによる世界の転回	講談社	2009
書籍	25 岡田英弘	世界史の縮図—モンゴルの発見と伝説	筑摩書房	1989
書籍	26 橋本英	モンゴル帝国 草原のダイナミズムと変遷	講談社	2024
書籍	27 Jack Weatherford	パルクス・モンゴルのチンギス・ハンが作った新世界	KKV出版	2006
書籍	28 百澤智世	探検の経緯として生きるソフ・パワンの展開—21世紀の「パルクス・モンゴリ」を求めて	日本国際情報学会誌 2巻1号 p.31-33	2017
書籍	29 志茂敏敏・曾子	モンゴルの帝国研究 完結	東京大学出版会	2021
書籍	30 依藤正樹	チンギス・カンの源流	研文堂	2006
書籍	31 小長谷有紀・前川慶	現代モンゴルを知るための250章	研文堂	2014
書籍	32 小松久男	中央ユーラシアの専横	丸善出版	2022
書籍	33 高島貴吉	モンゴルの歴史 遊牧民の誕生からモンゴル国まで	研文堂	2002
書籍	34 占部俊夫・李托雅	モンゴル遊牧民—チンギス・ハンの飲んだお茶—	三省堂	2022
書籍	35 本ム・ホドン	モンゴル帝国と世界史の誕生	名古屋大学出版会	2022
書籍	36 ジェームズ・ヘンリー	本の歴史	研文堂	1988
書籍	37 橋本英—ほか編	岩波講座世界歴史15 商人と市場—ネットワークの中の国家	岩波書店	1989
書籍	38 杉山正明 訳 Vassiliev, E. de la.	ソグド商人の歴史	岩波書店	2022

24

## 6. 参考文献 【論文：計8件】

書籍/論文	著者	書名	出版社	出版年
論文	1 松井大、白 玉冬、榎堂晃一	10～14世紀東方ユーラシアにおける古代ワイルドネットワークの展開	JFE21世紀財団 アジア歴史研究報告書	2015
論文	2 Brose, Michael C	Uyghur Technologists of Writing and Literacy in Mongol China	T'oung Pao, 2005, Second Series, Vol. 91, Fasc. 4/5 (2005), p. 396-435. Brill	2000
論文	3 松川正義	モンゴル命令文とワイルド文書文化	待兼山論叢 史学篇 2018, 52, p. 1-27. 大阪大学大学院文学研究科	2018
論文	4 松井大	中央ユーラシアのネットワークとワイルド商人	東洋学報 2002/01 世界のしおり p.1-7	2002
論文	5 松井大	文字文化からみた草原とオアシスの世界	東洋文化研究 11号 p.455-478	2008
論文	6 荒川正晴	ソグド人の移住聚落と東方交易活動	岩波講座世界歴史19：商人と市場：ネットワークの中の国家, 1989, p. 81-103	1989
論文	7 Morgan, G.O	Who Ran the Mongol Empire?	The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, 1982, No. 1 (1982), pp. 124-136. Cambridge University Press	2006
論文	8 Ostrowski, D	The "tamga" and the Dual-Administrative Structure of the Mongol Empire	Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London, 61 (2), 262-277.	1998

25

## 7. 年間スケジュール 春学期

回	日付	議題	発表者	文献調査・フィールドワーク	備考	講義録担当	
1	4月19日	・自己紹介 ・今年度テーマ方向性				・春学期スケジュール確定	
2	4月26日	・問題意識発表(1)	杉、阿達、菅沼、佐藤			・メンバー確定	
3	5月10日	・ゼミ長・副ゼミ長確定 ・問題意識発表(2)	中里			・連絡用Classroom作成(中里) ・共同作業用Google Drive設定(中里)	中里
4	5月17日	・問題意識発表(3)	菅沼、五十嵐			・研究計画発表準備開始(ゼミ長・副ゼミ長)	菅沼
5	5月24日	・問題意識発表(4)	中村、佐藤	6月1日フィールドワーク(第1回)確定(天理大学付属参考館)		・役割分担確定	阿達
6	5月31日	・問題意識発表(5) ・テーマ案検討	中里、阿達				菅沼
7	6月7日	・テーマ案検討 ・フィールドワーク(第1回)報告 ・発表資料骨子検討	ディスカッション、佐藤				杉
8	6月14日	・テーマ案確定 ・研究計画発表資料確定(最終調整) ・発表リハーサル	ディスカッション	・研究者インタビュー調整		・発表役割&予演日程確定	五十嵐
9	6月21日	・研究計画発表					
10	6月28日	・中間発表準備	ディスカッション	〃			
11	7月5日	・中間発表準備		〃			
12	7月12日	・中間発表準備	〃	〃			
13	7月19日	・中間発表準備	〃	フィールドワーク(第2回)実施			
14	7月26日	・中間発表準備	〃	〃			
15	8月25日～26日	・合宿・中間発表					

26

## 7. 年間スケジュール 秋学期

回	日付	議題	発表者	文献調査・フィールドワーク	備考	議事録担当
1	9月20日	・自己紹介 ・春学期成果共有	五十嵐		・秋学期スケジュール確定 ・最終メンバー確定	佐藤
2	9月27日	・追加メンバー問題意識発表	小谷田、佐藤	各自文献調査		中里
3	10月4日	・追加メンバー問題意識発表	馬、菅沼	各自文献調査		菅沼
4	10月11日	・問題意識集約	中里、藤川、馬	各自文献調査		阿達
5	10月25日	・問題意識集約	矢野、三浦	各自文献調査		中村
6	11月1日	・発表資料骨子検討	小谷田	各自文献調査		五十嵐
7	11月8日	・発表資料骨子確定	中村、阿達、馬	各自文献調査		藤川
8	11月15日	・発表資料準備 ・論文準備	中里、佐藤	各自文献調査		矢野
9	11月22日	・発表資料準備 ・論文準備	藤川、矢野、三浦	発表資料個人シート提出	・最終発表役割分担決定	三浦
10	11月29日	・発表資料準備 ・論文集約		各自論文集約、まとめ	・最終発表リハーサル	佐藤
11	12月6日	・最終発表				中里
12	12月13日	・Active Learning発表				菅沼
13	12月20日	・年内論文提出				阿達
14	1月10日	・論文最終調整				中村
15	1月24日	・論文最終提出16:00 ・懇話会17:00~				五十嵐

27

2025年度 アジアダイナミズム班 最終発表



ご清聴ありがとうございました

学部生：藤川竜輔、三浦雄太、矢野雅大  
 大学院生：菅沼孝陽、佐藤力、阿達誠洋  
 五十嵐郁一、中里健吾、中村淳  
 馬尚慶、小谷田篤  
 指導教員：金美徳教授、越田辰宏教授

写真出所：Wikimedia Commons (サンギス・ハンの即位：「歴史」(アリエ神画))